逆さまの王

ころみごや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逆さまの王

【Ｎコード】
Ｎ８２９１Ｖ

【作者名】
ころみごや

【あらすじ】
ロギスタニア大陸の魔を統べる王――リュウオ＝リヴァースは、愛する女性を失い、その恨みを晴らすために一国の王女を連れ去る。しかしリュウオが連れ去った人物は王女の替え玉であり、他者の行く末を視通すことのできる占師――シイナ＝ラヴィリンスだった。

【プロローグ】

月明かりの道しるべを辿ってきたフクロウが、開け放たれた木窓の縁に影を落としている。

眼球を動かさず、けれども怪訝そうに眼を細めて、百八十度に首を回して室内を見回す。暇を飽かすつもりだったのか、低い声が不満を抱き、唸りを上げた。

「浮かぬ顔をしておるの」

松明の炎に照らされて暗がりに揺らめく影が、無数の模様を石壁に描き出している。それは命ある存在として蠢き、ざわりざわりと浸食していくかのようだ。

「何故（なにゆえ）、このような暗きところに」

長い髪を一つに結い纏めた女性が一人と、言葉を自在に操れる一羽のフクロウを除き、室内には誰もいない。

椅子に腰掛けたまま、不安を打ち消すかのように左腕を上げ、フクロウを手招きする。すると驚くことに、フクロウは左右へと羽を広げることなく、重力に逆らいながら女性の許へと向かい、腕に止まってみせた。女性はその背中を撫でながら、ゆっくりと首を横に振り、空いた右手で机の棚から草紙を取り出し、筆先を走らせてゆく。

――なんでもない、だから心配しないで。

これは決して愚かな行為ではない。フクロウの手を借りずに解決するだけの力を持っているのだから、真実を語らなくともよい。言葉にして伝える必要のない些細な歪みなのだと、女性は自分自身に言い聞かせた。

罪と罰を科せられてしまい、大切な存在を裏切ることになろうとも、初めから全てを受け入れる覚悟で伝えたのだ。そしてフクロウ

は、それが嘘と見抜く術を持ち合わせてはいなかった。
仮に、それが現実に起こりうるとすれば、未来が変わる可能性も否定はできない。だとすれば、今ここで伝えておかなければならないだろう。

――さようなら、逆さまの王。

決して気づかれぬように、そっと唇を振るわせる。
ありったけの想いを込めたその言葉が、フクロウに届くことはなかった。

【1－1】

逆さまの王。
それはロギスタニア大陸に蔓延る魔を統べる王の二つ名だ。
あるときは人型を成し、民衆の生活に紛れ込む。またあるときはフクロウの姿を成し、宙を自在に羽ばたいてみせる。しかしながら、彼らが存知する逆さまの王の姿が、それらに当て嵌まることはなかった。
魔力を持たざるただの人間が、姿形を変えた逆さまの王に畏怖の念を抱くはずもない。それは至極当然のことではあるのだが、因由は別に存在する。
「――やれやれ、随分と無用心なものじゃのう」
高く聳え立つ城壁を悠々と飛び越え、フクロウは言葉を紡ぐと同時に嘆息した。
城門の内側には堀が巡っている。跳ね上げ式の桟橋は上がっていたが、門衛を増強したわけではなさそうだ。それが些か滑稽に見えたのか、フクロウは羽を振るわせることで反応を示す。
「死人（しびと）が一人消えておるというのに」
一月（ひとつき）ほど前、ロギスタニア城では奇怪な出来事が起こった。それは死人が姿を晦ますという、何とも理解しがたいものだ。
ロギスタニア王家に代々仕えるラヴィリンス家の占師が、城内の空き部屋で、自分で自分の命を絶ってしまった。しかしながら不幸はそれだけに止まらず、異変という名の連鎖を生み出していく。王女より絶大なる信頼を寄せられていた占師の亡骸は丁重に扱われ、棺へと納められたのだが、何者かの手によってその亡骸が奪われてしまったのだ。目撃者が誰一人いないことから、空恐ろしいと薄気味悪がられた。
一体誰が何の目的で、死人を攫ったのか。
「……所詮、その程度の存在でしかなかったということか」

闇夜に浮かび上がる輪郭は、小柄な体躯からは想像もできないほどに壮大で、それは黒き龍の姿を象っているかのようだった。勿論それは比喩ではなく、決して目の錯覚などではない。

「ふむ、この部屋じゃな」

フクロウが降り立ったのは、豪奢な造りによって施された寝室だ。十五夜の月に照らされた影が揺らめいているが、灯りは既に消えている。誰にも気づかれた様子はない。音もなく空から忍び寄ってきたのだから、それも当然といえよう。更に付け加えるならば、フクロウは人間ではない。人の目を欺くには打ってつけの姿を成していた。だが、それもすぐに別の変化を齎すことになる。

「人間を相手にするときは、こちらの方が都合も良かろうて」

静まり返った空間に、身の毛の弥立つ戦慄とざわめきが、暗闇に花を添えていく。

それは闇に惑いしフクロウが人型に姿を変える瞬間だった。

魔力を解放することなく自らの姿を自在に成してゆく魔族は、一握りしか存在しない。つい先ほどまでフクロウの姿を成していた逆さまの王こそ、そのうちの一人として数えられる。

人型を成した逆さまの王は、身体の具合を確かめるかの如く、大きく息を吸い込んだ。

依然として、寝室には安穏とした空気が流れている。衛兵にも気づかれた様子はない。

或いは、占師の亡骸が忽然として消えうせた出来事に酷似していたかもしれない。そしてそれは同時に、三度(みたび)の異変を引き起こす切っ掛けにもなり得る。

「――忌まわしきめ、見付けたぞ」

足音を立てずに一歩ずつ近づいていく。

天蓋つきの寝台の手前で立ち止まると、織物を両手で捲って中の気配を感じ取る。

「ヘレナ＝ロギスタニア王女よ……」

闇夜に紛れ、衛兵らの目を掻い潜り、逆さまの王が訪れた場所、

それはロギスタニア王家第一子、ヘレナ＝ロギスタニア王女の寝室だった。
暗がりに視界を奪われつつも、渦中の人物をこの眼にしっかりと認識し、脳裏に焼き付ける。
「汝（なれ）がいなければ、吾（われ）は哀しむこともなかったろうに」
失望が、大きな吐息を生み出す。
柔らかな手触りの毛布を剥ぎ取り、安らかな寝息を立てる人物の身体を優しく抱きかかえた。
よほど深い眠りについているのか、目を覚ます素振りすら見せない。
「殺しはせぬ。……じゃが、死を渇望したくなるほどの絶望を与えたもうぞ」
形容しがたいであろう胸のうちを、表には一切出すことなく、上辺を飾ってみせる。この細い首を絞めるだけで、容易く死へと誘うことはできるだろう。しかしそれでは契約を反故にしてしまう。それならば、と逆さまの王は殺さずに苦しませることを決めた。
窓の縁に足をかけ、何の躊躇いも持たずに身を乗り出した。
傍から見れば、投身するかのように思われても仕方がないだろう。けれども不思議なことに、逆さまの王が地に落ちるようなことはなく、その身体は重力に逆らい宙に浮いていた。これこそが、ヘレナ王女の寝室へと忍び込む際に、逆さまの王が発動した妙技だ。
過去には、逆さまの王を打ち倒すべく名乗りを挙げた者が数え切れぬほど存在したが、その全てが逆さまの王に触れることすら叶わず、地に全身を伏したまま返り討ちに遭った。解放された魔力の暴走を極限にまで押さえ込み、重力を自在に操ることから、いつしか逆さまの王と呼ばれるようになったのだ。
人間が付けた呼び名とはいえ、逆さまの王の真名を知る者は少なく、ロギスタニア大陸では逆さまの王として、その名を広く知られることになっている。その呼ばれ方をいたく気に入ったのか、配下に置く魔族らにも逆さまの王と呼ばれるほどだ。

「次に目が覚めたとき、汝の隣におるのは死の象徴と不吉だけじゃ……」

誰にも気づかれずに、逆さまの王は寝室を後にした。

月明かりの道しるべに導かれ、人を抱えているとは思えないほどの身軽さで、颯爽と空気による風の抵抗を裂いていく。ロギスタニア城から南西に三里ほど離れた山脈に辿り着くと、重力の抵抗を少しずつ強めていき、密集した木立ちの中に降り立つ。辺りは薄暗く、一冬かけて降り積もった雪が白銀の世界を演出していた。そんな中、一筋の光耀がこちらへと向けられている。王の帰還を察した配下の手によるものだろう。

逆さまの王が根城を構えるのは、尾根伝いに歩いた先に建てられた高根の古城だ。ここら一帯が魔族の巣窟となっており、足を踏み入れようとする間抜けな人間はいない。

真っ白な地面に足跡を残しつつ、逆さまの王は古城へと向かっていく。途中、胸に抱いた王女がおもむろに瞳を開いた。そしてぽつりと一言、

「――ここまで来れば、大丈夫ですね」

不可解な言動を取った。

時間が止まったかのような瞬時に、風に吹かれてざわめかせる葉音が現実に呼び戻す。

「汝は」

逆さまの王に抱きかかえられた王女は、現状を把握しているのか、衝撃を受けた様子はない。

まさか、そんなはずはない。自分が胸に抱いた女性は、確かに王女の寝室にいたはずだ。それならば何故、全てを見透かされていたのか。

「汝は、何者じゃ……」

胸に抱いた女性は、王女ではなかった。

今に至るまで暗闇に惑わされていたが、ようやく攫った相手が別人であることに気づいたのだ。王女と間違われた女性は、逆さまの

王に抱かれたまま、ゆっくりと顔を見上げた。透き通るように澄んだ両方の眼は赫に染まっており、何とも言えぬ独特な雰囲気を醸し出している。
「吾はロギスタニアの王女を直に見たことがあるが、汝ではのうたわ」
逆さまの王の呟きに、女性は視線を合わせることなく呼吸を整える。
「貴方の指摘通り、わたしはヘレナ＝ロギスタニア王女ではありません」
王女を攫いに来た魔族が、よもや魔を統べる王であるとは思ってもいまいが、しかしそれが彼女に毅然たる態度を維持し、自らの意志を強く持ち続けるだけの勇気を与えていることは疑いようのない事実だ。……少なくとも、逆さまの王はそうであると確信していた。
「空寝しておったな、汝め」
舌を打ち、忌々しげに苛立ちを露にする。
今すぐにでも怒りをぶちまけたい衝動に駆られていたが、残念ながらその相手はここにはいない。予め危険を察知し、替え玉を用いていたのだ。
しかし解せないのも確かだ。これほどに巧妙な手口で周到な用意をするだけの知略を巡らせるというのに、侵入者を捕らえようとは考えなかったのだろうか。
「何故、汝はロギスタニアの王女ではのうと言わなんだ」
疑問を発する。不適切な返答をすれば命はないと睨みを利かせているが、それも彼女には意味のないものらしく、声を震わせるどころか、恐怖に慄くこともない。
「わたしが王女ではないと知れれば、貴方はその場でわたしを殺していたでしょう」
今もなお、死と隣り合わせにいるのは理解しているはずだ。
だが、彼女には彼女の目的があり、それを速やかに遂行するために、空寝をすることで死を迎える瞬間を長引かせたのだろう。

「……ふんっ、汝は自分の命惜しさに身分を偽ったというわけか」
汚らわしいものでも見るかのように、侮蔑な言葉で吐き捨てる。
それが気に障ったのか、平静を保っていた彼女が眉根を寄せた。
「それは違います。わたしは自分の命など惜しくありません」
逆さまの王に抱かれたまま、彼女は凛とした声を上げる。
「死を恐れぬ生物などおらぬ。人間風情が強がるでない」
「強がりではありませんよ。仮にあのとき、わたしが王女ではないと知られてしまえば、貴方は本物の王女を捜し出し、攫うこともできたはずです」
気丈に振る舞い言葉を紡ぐ彼女だったが、視線の先に映るのは逆さまの王ではなく、闇夜に浮かぶ十五夜の月だ。それも暗闇の雲に覆われてしまえば、あとは何も映し出さなくなる。
「……つまり汝は、王女のために身代わりにでもなったと申すか」
「そうなるべき未来が視えました」
その言葉に、逆さまの王は少しだけ肩を揺らした。
何かがおかしいとは思っていたが、偶然にしては出来過ぎている。逆さまの王と彼女が出逢う過程すら、初めから決められていたかのような不自然さだ。言うまでもなく、既にその理由に関してははっきりしていた。
「視えた……、と言うたな？　それはどういう意味じゃ」
確認の意味を込めて、逆さまの王は反問する。彼女はその質問をずっと待っていたのか、緊張を解すように小さく深呼吸して言葉を続けた。
「わたしは占師です」
「ふざけるでない、そのようなものが存在するものかっ」
一喝し、微弱ながら指先に力を加える。すると彼女は苦しそうに身を捩り、顔を歪めた。
「……いいえ、確かに存在します。王女の代わりに、わたしが貴方に抱かれているのが何よりの証拠です」
自らを証拠であると捉え、彼女は逆さまの王の顔がある方に視線

を向ける。
「ならば問う、汝には吾の未来が視えると申すか？　視えるならば吾の質問にも答えることができようぞ。吾の死に様を占ってみせよ」
死期を占ってみせろと言われ、けれども彼女は首を横に振って言葉を返す。
「死は、何者にも平等に訪れるもの……。わたしが王女の身代わりになったことで、貴方はいずれ死ぬことになるでしょう。そうなる未来がわたしには視えました」
「答えになっておらぬぞ。吾が知りたいのは、いつどこで死を迎えるかじゃ」
苛立ちを隠そうともせず、逆さまの王は答えを急いた。
「わたしの口からは言えません。それを口にしてしまえば、貴方が死ぬ未来が変わってしまうことになります。それはわたしたち人間にとって不利益な事態に陥ります」
言葉を濁し、巧みにかわしていく。
魔族と相対してなお、確固たる意志を抱き続けることのできる彼女が相手なのだ。逆さまの王にとって、最も重要な答えを得ることはできそうになかった。
「くっ、占師を相手取るというのは何とも不愉快極まりないものじゃな」
「よく言われます……。人間から」
逆さまの王は、彼女の言葉の端に一抹の重さを感じ取った。
それは恐らく、占師という存在が人間側ではなく、魔族に近しい存在にあることに対する悲嘆なのだろう。魔族として生きゆく逆さまの王からしてみれば、大したことではないのかもしれない。勿論それは、あの女性にさえ出逢っていなければの話だが。

【1－2】

「……汝、名をなんと申す」
古城へと歩を進めながら、逆さまの王は彼女との会話を続けていく。
「名前ですか？」
「そうじゃ、答えよ」
自ら攫われてきたとはいえ、名を尋ねられることになるとは考えていなかったのだろう。
彼女は瞬きを繰り返し、不可解なものでも見るかのような視線をぶつけてくる。だが、その視線も逆さまの王の顔を正確に捉えてはいなかった。
「わたしの名前など知っても意味がありませんよ。王女の代わりとして時間を稼ぐだけの存在ですから、人質にすらなりません」
「卑下にするでない。これは単に吾の好奇心が齎したものじゃ。戸惑うこともなかろうて」
「でも……」
「汝の名を、吾に紡げ」
有無を言わさぬ口調で、彼女が自分の名前を口にするのを待っている。
観念したのか、やがて彼女は渋々ながらも唇を動かしていく。
「シイナ……、シイナ＝ラヴィリンスと言います」
逆さまの王の胸に抱かれた占師――シイナ＝ラヴィリンスは、その名を言い終わると同時に、顔を横に向けて下唇を緩く噛んだ。
「ラヴィリンスか……、」
シイナの名を耳にして、逆さまの王の表情が強張る。
「くくっ、これは実に興味深いものじゃな……」
だがそれも極めて短い時間で収まると、シニカルな笑みを浮かべてみせる。皮肉な巡り合わせとは、今まさにこの瞬間を言い表して

いるのかもしれない。そう考えてみると、笑わずにはいられなかった。
「占師、シイナ＝ラヴィリンスよ」
わざとらしくシイナの顔を覗き込み、魔を統べる王として堂々と言い放つ。
「吾の死に様を、その赫い瞳を持ってして見届けるがよかろうぞ。占師たる汝には、その権利もあるじゃろうからのぅ」
前方からの灯りを道しるべに、雪化粧された地面に一人分の足跡を残しつつ、薄暗い木立ちの中を突き進んでいくと、木々に囲まれた古城が姿を現した。
「さあて、着いたぞ」
抱きかかえていたシイナを気遣うように優しくその場に降ろすと、数歩離れて向かい合った。
「招かれざる客人、シイナ＝ラヴィリンス。我が、リヴァース城へよくぞ来られた。……どうじゃ、なかなかよい城であろう？　客人は一月振りじゃからな、吾が直々に城内を案内してやろうぞ。さあ、吾の手を取れ」
恭しい態度で頭を下げ、優雅な立ち振る舞いで右手を差し出してくる。それは魔族であると言われなければ気づかぬほどの人間味を感じさせるものだった。
しかれども、シイナは返事をしない。
「どうした、今更怖くのうたか？」
「いいえ、そうではありません。ただ……」
首を振り、シイナはぽつりと呟く。
見当違いの方角を見上げるシイナの両目を、逆さまの王は覗き見る。そして一つの異変に気づいてしまった。
「……汝、まさか」
「お察しの通り、わたしは眼が見えません……」
シイナの瞳は、逆さまの王の姿を捉えてはいなかった。
隠し通せるとは思っていなかったのだろう。だがしかし、光の無

い暗闇の世界に生きる圧倒的不利な立場に置かれていることを早い段階で見破られてしまい、シイナは肩を揺らす程度の溜息をついてみせる。それは諦めにも似た反応だ。

「成る程、アカズか……」

ほんの些細な引っ掛かりではあるのだが、逆さまの王はシイナと言葉を交わしていくうちに、王女の替え玉として連れ去ることになった一人の人間が、不可思議なものを匂わせていると感じ取っていた。

シイナが占師であるが故、ではない。逆さまの王がこれまでに出逢ってきた人間の中でも、特別な感情を抱かせる原因と成りうるものを持ち合わせていたのが訳合いとなる。

それはまるで、シイナが彼女と同じような運命を辿るべく、何らかの決意を胸に逆さまの王と相対しているかのようにも思える。勿論、それを言葉にするほど逆さまの王は愚かではない。

「わたしの耳には貴方の声が届きますが、その代わり、わたしの瞳には貴方の姿を映し出すことができません。だからこそ、貴方がどれほど恐ろしい姿をしていようとも、それを見てわたしが怯えることもないのです」

逆さまの王に恐れを抱かないのは、暗闇という名の恐怖がシイナの周囲を常に取り囲んでいるのが廉だった。そのような環境に身を置いているのであれば、恐怖に駆られる気持ちや感覚が麻痺してもおかしくはない。

「ふむ、案ずることはない。吾は汝のような存在と接するのには慣れておる故に」

慣れている、という言葉を用いたことに逆さまの王は自嘲する。慣れていなかったからこそ、このような状況に陥ってしまったのを自覚しているからだ。

だがそれも全ては終わりを迎えた。

今現在、目の前に佇むのは彼女ではない。シイナ＝ラヴィリンスなのだ。

「さぁて、これでどうじゃ」
逆さまの王はシイナの手を取り、ゆっくりと口角を上げた。
「眼が見えぬというのなら、吾が汝の眼となろうぞ。汝にとって吾は人間と同じじゃ。吾の姿をその瞳に映し、恐れることもなかろうて。そして吾もまた汝を恐れたりはせぬ。他者の行く末を視通せる力を持っておるが故に人間から忌み嫌われようが、魔族たる存在には関係のないものじゃからのぅ」
瞳に映し出すことはできないが、その視線の先には逆さまの王の手の温もりを感じ取っている。それは決して冷たくなどはなかった。
未来を視通せる力を持つ占師を、人間は忌み嫌い、故意に接触を避けていた。それが極めて普通であり、魔族に近しい力を持つシイナにとって至極当然の行為であるのだと、理解もしていた。自分を必要としてくれる人間も中にはいたが、それもただ利用する為だけに近づいてくる人間がほとんどだ。
そんな中に生きゆくシイナだからこそ、逆さまの王の手に触れた時、その心がとても温かいものだと気づいた。
「……あの、」
そっと、唇を振るわせる。
その微かな声が届いたのか、逆さまの王はシイナの瞳を覗いた。
人間ではなく魔族を相手取り、それが意味のある行為であるか否か問われれば、疑問を抱かずにはいられないだろうが、しかしシイナは躊躇いながらもその科白を口にしようと決める。
「貴方の、名前を教えて下さい」
逆さまの王は、王女の替え玉としての存在価値しか持たない人間に名を尋ねてきた。たとえそれが気まぐれによって齎されたものだとしても、名を告げたことに変わりはない。だとすれば、自分も逆さまの王の名を知るべきだ。
「吾の名を知りたいと申すか」
先ほど、シイナが名を尋ねられた時と同じように、逆さまの王は不可解に眉を潜める。

「はい、そうです」
少し早めの瞬きを繰り返し、シイナは逆さまの王が名を告げるのを待つ。
「畏怖の念を込め、人は吾を？逆さまの王？と呼んでおる。汝もそう呼べ」
「……逆さまの王とは貴方のことだったのですね」
今に至るまで、シイナは自分と手を繋いだ魔族が逆さまの王だとは気がつかなかった。だがそれも仕方の無いこととといえよう。人間は、逆さまの王が姿を変えられるとは夢にも思っていないのだ。
あるときは人型を成し、またあるときはフクロウの姿を成す。けれどもそれが逆さまの王の仮の姿であることを知る人間はほんの一つまみしか存在しない。何故ならば、人間が畏怖の念を込め、口を揃え？逆さまの王？と呼び恐れる魔を統べる王の姿は、ロギスタニア城ほどもある大きな黒竜の姿を成しているはずだからだ。
「驚うたか」
人型を成したまま、自分が逆さまの王であると告げるのは、実にこれで二度目だった。
一度目は彼女に、そして二度目はアカズの占師に。もっとも、その占師シイナ＝ラヴィリンスは、逆さまの王が人型を成す姿をその眼に捉えているわけではない。言葉を交わし、そして肌に触れることで実感しているのだ。
「驚きました……。でも、」
こくり、と唾を飲み込み、シイナはその先に続く言葉を紡いだ。
「それは名前ではありません。わたしが知りたいのは貴方の真名です」
そう、逆さまの王が告げたのは真の名前ではない。魔を統べる王の名を知らぬ人間が勝手に考えた通称にすぎない。それを名前と呼ぶには、些か無理があるだろう。
「わたしは、貴方の真名が知りたいのです」
「黙れ、吾の名を口にするのを許される人間は、もうこの世にはお

らん」
「いいえ、黙りません。貴方はわたしの名前を知っているのに、わたしが貴方の名前を知らないのは不公平です。だからわたしには貴方の真名を知る権利があるはずです」
その姿に、逆さまの王は溜息をつく。はぐらかそうとしてはみたものの、シイナにはそれが通じることはなさそうだ。やはり占師という存在は厄介だと感じたが、その感覚を常々待ち望んでいたのは隠しようもない事実なので諦めるしかない。
「……リュウオ＝リヴァース、それが吾の名じゃ」
やれやれと肩を竦め、逆さまの王は観念したかのように口を開いた。
逆さまの王の名を知ったシイナは、手を繋いだままの状態で息を整える。
「リュウオ＝リヴァース……、わたしは――」
やがて小さく頷いてみせると、王女と勘違いして自分を連れ去った魔を統べる王に、声を震わせることなく宣言する。
「いつの日か必ず訪れるであろう貴方の死に様を、この眼を持って見届けることを、わたしは貴方に誓いましょう」
その言葉に絶対の自信を持っているシイナの瞳には、揺らぎなど見当たらない。
シイナには、それが変えてはならない運命であることを理解しているし、また変える必要のない運命であることも知っている。
「……くくっ、その眼で視れるのは不確かな未来だけじゃろうて。故に、汝が吾の死に様を見届けることは叶わんさ」

今宵、一人の占師と魔を統べる王が出逢った。
それは予め決められていた運命なのか、それとも――……

【2－1】

魔を統べる王とは、まさに彼のことを言い表すのだろう。
城壁をくぐり、共に城門へと歩いていく最中、彼らの周囲には無数の魔族が控えていた。
地を這うもの、水中に身を潜めるもの、宙に浮かぶもの、風に舞うもの、闇に紛れるもの、実に多種多様な魔族がそこら中に溢れているではないか。耐性のない者がこの場に居合わせたならば、一瞬のうちに気が狂ってしまってもおかしくはないだろう。だが、眼が見えないシイナにはそれも関係のないことだった。
「光の無い、暗闇の世界が耳を研ぎ澄まし、恐怖を倍増させるかと思うたが……、汝はなかなかに心持ちがよいな」
「貴方と手を握っているのですから、今更恐れるものなど何一つありません」
恐れなど微塵も感じさせない、凛々しい姿で歩を進めていく。身体の震えが見当たらないことから、それが強がりではないと証明していた。
「くく、言われてみれば確かにそれもそうじゃな」
眼が見える者であれば、見渡す限りの魔族の群を前にして、これが夢であればどれほど救われるかと祈りを捧げるところだろう。暗闇に閉ざされた空間で一生を過ごしていかなければならないシイナであれば尚更だ。
けれどもシイナは恐れない。何故ならば、彼ら魔族を支配下に置く魔を統べる王が共に歩みを刻んでいるのだ。これほど心強いものはない。
「吾は恐怖を与えこやつ等を支配してはおらぬからのぅ。反旗を翻し襲いかかってくることもなかろうて。心穏やかに出迎えを堪能するがよいぞ」
ロギスタニア王家はそれに当て嵌まることはないが、人間の王の

中には、独裁的な物事の進め方をする者も少なからず存在する。そのような人間には一つの共通点があり、それは一人の人間が全ての権力を握り、好きなように振る舞い続けていれば、いずれ反乱を起こされてしまうということだ。

だが、人間は強大な力を持たぬ者でさえも血筋によって権力を得られるが、魔族の世界は異なる。強大な魔力を持たざる者が上に立つことは不可能なのだ。上に立つ者が魔を統べる王となり、その大陸を支配するのが道理であるとされている。

リヴァース城に存在する魔族が皆一様に逆さまの王を敬い、魔を統べる王であることを認めているであろうことは明らかだ。ロギスタニア大陸で逆さまの王と呼ばれ人間から恐れられている逆さまの王は、その強大な魔力を持ってして恐怖による支配をするのではなく、信頼を勝ち得ているのだ。

城門の前へと辿り着くと、黒服に身を包んだ長身の男が恭しく頭を下げて一礼する。

人型を成しているとはいえ、この場所にいるということはつまり、彼もまた魔族の一員なのだろう。見た目からは決して魔族とは想像もできないほどに完璧といえる、人間の姿だった。

「王、そちらの御方は」

黒服の男は、シイナに視線を向ける。

今宵、リュウオが城を空けたのには理由がある。それはヘレナ＝ロギスタニア王女を連れ去る為だ。その企みは見事成功し、身柄を確保できたようだが、しかしそれにしてもおかしな点がある。リュウオが連れ立っている娘は、ヘレナ＝ロギスタニア王女というには随分と相応しくない格好をしているではないか。

真っ黒なローブを全身に纏い、化粧はおろか髪を整えてすらいないのだ。誰がシイナを見たとしても、彼女はヘレナ＝ロギスタニア王女ではないと口を揃えるだろう。

「占師の娘じゃ。名をシイナ＝ラヴィリンスと申す」

その思考を察したのか、リュウオは薄っすらと笑みを浮かべなが

ら返事をする。
「占師……ですか。なるほど、そうでしたか……」
リュウオではない、別の声が聞こえてくる方向に、シイナは視線を向ける。
眼が見えないシイナにとって、そこにいるのが誰なのか、姿形は知りえない。その代わりに、他の感覚が研ぎ澄まされているのはシイナ自身が自覚するところだ。
この場所に存在する空気の流れや変化、違和や触れ合いを肌で直接感じることで、声を聞かずともリュウオ以外の誰かが存在することに気づいていた。
「シイナ＝ラヴィリンスです」
不確かな相手にお辞儀をしてみせる。
それを見た黒服の男は、魔族とは思えないほどに優しげな笑みを口元で披露した。
「初めまして、シイナ様。わたくしは王の側近、トルエカと申します」
先ほどリュウオにしてみせたように、今度はシイナに向けて深々と頭を垂れる。魔族の紳士的な対応に流石のシイナも困惑を隠せないのか、隣に立つリュウオの顔を見上げてみる。
「トルエカはの、吾の配下の中ではここが一番働く奴じゃ。吾が汝の傍におらぬ間はこやつを頼りにせい」
彼らを取り囲むかのように魔族の群が微かなざわめきを起こしているが、リュウオが支配下に置く魔族の中でもトルエカは特に信頼を得ているようだ。リュウオの声色が安定しているのがよい証拠だ。
「トルエカ」
「はい」
リヴァース城の主に名を呼ばれ、トルエカは一歩前に出る。
シイナの前に片膝をつくと、両腕の裾を捲くってみせた。右腕には赤、そして左腕には黒に染まる二つの腕輪が嵌められている。
トルエカはそれらを外し、赤をシイナの右腕に、そして黒をリュ

ウオの左腕に嵌める。
「この腕輪にはトルエカの魔力が込められておるでな、……ほれ、少しばかし出っ張ったところがあるじゃろうて」
シイナは、右腕に嵌められた赤い腕輪を触って確かめてみた。
言われたように、赤い腕輪には出っ張った箇所がある。
「腕輪の魔力を解放する釦(ボタン)じゃ」
「……この腕輪は、いったい何なのですか」
「黒の腕輪は、命を差し出す象徴……。して赤の腕輪は、命を永らえる象徴じゃ。言うなればな、吾と汝を繋ぐ生命線とでも言い表せるかのう」
言葉の意味を理解できないシイナは、眉根を寄せた。
その表情を見やり、リュウオは更に説明を付け加えていく。
「これから先、もし汝が不測の事態に陥ったとき、その釦を押すがよい。その瞬間、黒の腕輪を嵌めた吾と、赤の腕輪を嵌めた汝のおる場所が入れ替わるでな」
そんな摩訶不思議なことが可能なのかと思考を巡らせそうになったが、シイナはすぐに考えを改める。行く末を視通せる占師が存在するのだから、二つの存在を入れ替えることなど不可能なはずがない。人間が持ち得ない魔力を持ってすれば、不可能とされていることですら可能となってしまうのだ。
「御用が御座いましたらわたくしの名をお呼び下さい」
それだけ伝えると、トルエカはシイナの許を離れる。
三メートルはあろう重たげな城門を軽々と押し開き、トルエカは二人の前に道を作った。
「ゆくぞ」
耳元に囁かれるリュウオの声が、シイナの足を前へと進めていく。
広間はふきぬけになっており、弧を描く階段の中央には、黒に染まった扉が一つ。その扉の奥が玉座の間なのだが、リュウオはそこには向かわずに、シイナが足を躓かないように気を使いながら、ゆっくりと階段を上がっていく。

何かが擦れる音がシイナの耳に届いた。トルエカが城門を閉めたのだろう。しかしその他にシイナの耳に届く音が聞こえない。城の中には最低限の数の魔族しか入れないのか、外に比べて静かでひっそりとしている。

「……他に」

ふと、疑問が口に出た。シイナは言葉を続けるべきか悩んだが、眼が見えない自分が何かを知る為にはリュウオに聞かざるを得ないのだということを思い出す。

「わたしの他に、人間はいるのですか」

「此処は魔が巣食う土地に建てられた城じゃ、聞かずとも想像できようぞ」

それは至って普通の回答のようにも思えたが、幾ばくかの引っ掛かりを覚えた。

「しかし現にわたしは今こうして貴方の隣を歩いています。つまりは人間がいる可能性も無いとは言い切れません」

「ふむ、確かにその通りじゃな。汝の言い分は間違っておらぬ」

歩みを止め、シイナの眼を見つめる。赫に染まった二つの瞳は、この場所にいることに対する恐怖を感じてなどはいないのだろう。赤々と萌ゆる両目には一切の揺らぎさえ見当たらない。

リュウオは興味を示したのか、意地悪そうに口角を上げる。

「逆に問う。……汝はそれを知り、何を思い、何を考えるのじゃ。人間が自分しかおらぬことに対し、怯えたり不安に感じたりするような汝ではなかろうて」

シイナの性格や特徴を見抜いているが故の問いかけに、言葉に詰まりそうになる。

王女の替え玉としての役割を果たすのが第一の目的であったとはいえ、もう一つの目的を言うべきか迷った。それを教えてしまえば、シイナは自分の弱い部分をリュウオに知られてしまうことになるからだ。

「……捜している人が、います」

【2－2】

「ほう、捜し人とな」

口を閉ざした方が利口なのかもしれない。だが、自分が言葉を交わしているのは魔族だ。それもただの魔族ではない。？逆さまの王？と呼ばれ恐れられている、魔を統べる王が相手なのだ。嘘を吐くのも容易ではないだろう。嘘がバレてしまえば、予期せぬ事態に巻き込まれてしまうかもしれない。死を迎えるであろうリュウオの運命が変わってしまう可能性もある。そんなことになってしまえば、王女の替え玉として連れ去られたのも、全てが水の泡となる。それだけは避けなくてはならない。

それならば、とシイナは全てを話してしまうのも致し方ないと考えた。

「汝は眼が見えぬからのう、捜し人を見つけるのも一苦労じゃろうて」

皮肉にも聞こえるが、リュウオは決してそのようなつもりではない。勿論、哀れんでいるわけでもないが、シイナが人を捜しているということに対し、リュウオの共感を得たのだ。

「他者の捜し人を見つけてみるのも一興かもしれんのう……。そうじゃな、汝の眼となって、吾が捜し人を見つけ出してもよいぞ。暇を潰すには調度よかろうて」

それは願ってもない申し出だが、シイナは首を横に振ってみせる。

「わたしの捜し人は、この世にはいません」

「……死者か」

死者を捜すというのもおかしな話だが、シイナは何一つ嘘を言っていない。

だからこそリュウオは眉をしかめる。まさかこんなところにまで因果があるとは思ってもみなかったからだ。シイナの目的を聞いてしまった以上、それに見合うだけのものを提供しなければならない

だろう。
「わたしの話はこれで終わりにします。次は貴方がわたしの質問に答える番です」
この城の中に、シイナ以外の人間は存在するのか否か。その答えは呆気ないものだった。
「今は、おらぬ。……少し前に死んださ」
あっさりとその科白を口にしたリュウオだったが、けれども溜息混じりの声を上げもした。
今はいない、それはつまり少し前までは人間が存在していたということだ。
「……すみません」
「何故、謝るのじゃ。知らぬことがあれば誰でも気になるものじゃろうて」
大したことではないと言いたげに、リュウオはシイナの手を引いた。だがその心中では、聞かれたくないことを口にしてしまったと考えているに違いない、とシイナは感じていた。話をすぐに切り上げようとしている様子が伝わってきたので、シイナはそれ以上、何も追求しないことに決めた。
「眼の見えぬ汝には不便なところじゃろうが、だからといって文句は言ってくれるでないぞ」
「分かっています。わたしにとっては、どんな場所も暗闇に閉ざされていますから同じです」
吹き抜けの回廊を回り歩いて広縁へと出ると、城周辺の景色が一望できる。だがそれも眼の見えないシイナにとっては暗闇の一部にしかすぎない。景色を楽しむことは不可能なのだ。
「声の次は視力か……。難儀なものじゃのう」
ぼそりと呟き、リュウオは塀に手をかける。
「皆に一つ、知らせねばならぬことがある」
城の外に集まる魔族の群に、リュウオは声を届ける。決して大きな声ではないが、リュウオが姿を現すと同時に、城を囲むざわめき

が瞬時にして消え去った。誰が指示をするでもなく、自然に静寂な時を演出する。
「吾が目的を果たさんが為、闇夜に紛れロギスタニア城へと足を運んだのじゃが……ちと、不手際な事態に遭ってしもうたわ」
それが何を表しているのか、シイナには言われなくとも理解している。リュウオの目的を阻んだのはシイナ自身なのだから当然だ。
魔族の群は、リュウオの言葉に耳を傾けるだけでなく、同時にその隣に佇むシイナの姿にも注目していた。彼女が何者なのか知りたいのだろう。
「ヘレナ＝ロギスタニア王女の寝室に忍び込んだまではよかったのじゃがな、そこで吾は大きな失態を犯してもうた。それはじゃな……」
繋いだ手とは反対側の手を伸ばし、大きな素振りをしてみせる。その様子から察するに、残念がっているようにはとても見えない。いったいどのような失態を犯したのか、魔族の群は言葉の先に紡がれる答えを待った。
「連れ去る人間を、間違えてしもうたのじゃ」
首を横に振り、肩を落として残念さを表現する。無論だが、それも全て演技だ。
呆気に取られるかに思えた科白だが、それも無用な心配だった。
リュウオが笑みを零し、しくじりを恥ずかしげもなく披露してみせたかと思えば、それに共鳴るかのように笑い声が木霊する。耳をすませてみれば、二人の後ろに立つトルエカも苦笑しているらしい。振り向かずとも表情が目に浮かんでくる。
「吾は間抜けじゃ、ほんにどうしようもない間の抜けた王じゃわい。……じゃがな、」
それ以上笑うのを堪えて、リュウオは高々と手を上げる。すると周囲を包み込んでいた笑い声が瞬く間に潜めていく。これが魔を統べる王の支配力、その表れだ。
「その代わりと言ってはなんじゃが、吾は一つ……否、一人の人間

を、見事連れ去ることに成功した。それが誰じゃかわかるものはおるか」
　城の主の問いかけに答えるものはいない。その答えには、ここにいる魔族の誰もが気づいているので、答える必要がないのだ。予測していた通りの反応の無さにリュウオは嬉しそうに頷くと、横に立つシイナにそっと耳打ちする。
「すまぬが、汝を抱くぞ」
「え、抱くって……」
　シイナはほんの少し身を強張らせる。
「安心せい、そういう意味ではない」
　勘違いしていることに気づいたリュウオは、シイナの不安を取り除くように、優しく頭を撫でる。そして腰に手を回すと、もう片方の手で両足を持ち上げた。
「先ほどと同じ格好をするだけじゃよ」
　城に戻るまでの僅かな間ではあったが、シイナは空を舞う旅を経験した。そのとき、シイナはリュウオに抱きかかえられていた。それと同じ格好をしてみせるというだけの話だ。
「な、何故……今ここで？」
「こやつらに汝を自慢したかったからかのう」
　恍けているのではないことは、シイナの身体を抱きかかえるリュウオの感触から知れるだろう。城の外から二人を見上げる魔族の群に、その姿をはっきりと見せつける。
「占師の娘、シイナ＝ラヴィリンスじゃ」
　シイナの名を口にすると、魔族の群は次の科白を待たずに満場の喝采を博した。
　何が起こっているのか、シイナには理解できない。できるわけがない。何故、自分が連れ去られることによって、彼らは声を上げて喜んでいるのか。自分はヘレナ＝ロギスタニア王女ではなく、ただの占師だ。このような歓迎を受ける憶えは何一つない。
「不思議か、じゃがそれも時期に理解しようぞ」

くくっ、と喉を鳴らして眼を細める。つい数刻前までは、心の奥底に靄がかかっていたというのに、シイナと出逢うことによってそれも全て消え去ってしまった。
シイナが視たリュウオの死期は、恐らくは疑いようのない事実であろう。それはシイナが占師であることが何よりの証拠となる。だが、同時にリュウオは感謝もしていた。
眼を閉じて暗闇に身を任せてみれば、彼女の姿が浮かんでくる。忘れることのできない想いを胸に、あの日以来ずっと苦しんでいた。
そんなとき、リュウオの前に姿を現したのがシイナだった。
死を迎えるのがリュウオに科せられた運命だというのなら、シイナと出逢った事実もまた運命であることに変わりはない。
「さあ、今宵は宴じゃ。皆存分に楽しもうではないか」
城の外だけでなく、城内に潜む全ての魔族に向けて、リュウオは宴の始まりを告げる。
それを合図に、魔族の群は騒ぎ始めた。宴の準備をしているのだろう。
「窮屈じゃったのう、すまぬ」
「いえ、別にそんなことはありません……」
リュウオは胸に抱きかかえていたシイナを優しく降ろすと、少しばかし頭を傾けてみせる。
「トルエカ」
側近の名を呼ぶと、トルエカは小さく頷き、城の中に戻っていく。
それを見たリュウオは、何かを待ち望むかのように肩肘をつき、賑やかな宴の始まりを満足そうに見下ろした。
暫くすると、トルエカが広縁へと戻ってくる。手にはトレイを持ち、その上には二つのグラスに瓶が一つ。
「うむ、ご苦労」
持ってきたグラスを二つともリュウオに渡すと、瓶の栓を抜いて、静かに注いでいく。
グラスには真っ赤な液体が注がれている。鼻をつくような刺激が

あるが、嫌ではない。
「汝も飲め、魔族が造る酒じゃ。人間のものとは味が異なる故、気に入るか分からんがな」
酒の入ったグラスを手渡そうとする。しかしシイナはそれをうまく受け取ることができずに落としてしまった。
「……すまぬ、汝の眼を忘れとった」
「構いません、もう慣れましたから」
逆に申し訳なさそうに、シイナは苦笑いしてみせる。だが、慣れているにしては不器用な点が多々あるとリュウオは感じていた。ひょっとすると、シイナは眼が見えなくなってからまだ日が浅いのではないだろうか。

【2－3】

「のう、汝よ」
自分のグラスをシイナに差し出して、トルエカにもう一つ新しいグラスを持ってくるように指示を出す。その間、リュウオはシイナの眼が見えなくなった経緯を尋ねてみることにした。
「汝は何故、眼が見えなくなったのじゃ。生まれつきのものか」
当然だが、シイナの眼が見えないのは生まれつきのものではないと知っている。占師であることが何よりの証拠だった。
けれどもそれを自分の口から指摘するほどリュウオは間抜けではない。
シイナが話してくれるのを待った。
「いえ、これは生まれつきではありません」
シイナは首を横に振り、否定する。自らの目的を全て話してしまった後なので、今更隠し事をする意味もないと考えているのだろう。
「貴方も魔を統べる王であるのならお気づきかもしれませんが、わたしは占師です。普通の人間とは異なります。それが意味するものは一つです」
占師たるシイナが持っていて、普通の人間が持たざるもの、それは一つしか残されていない。
「……魔契約者、か」
やはりか、とリュウオは溜息をつく。予想通りの結果に、些か不満気な様子だ。
「そう、わたしは魔族との契約を結んだ、魔契約者です」
――魔契約者。
それは本来、人間が持ち得ない魔力を手にした者を言い表している。
「元々はわたしも、どこにでもいるような普通の人間でした。勿論その頃のわたしは占師としての力も持っていません。……ですが、

ある事件を切っ掛けに、わたしは魔族との契約を結ぶことを決めました」
「……ほう、吾はそれを聞いてもよいのかの」
念のために、リュウオは口を挟んでおく。シイナの気持ちに揺らぎがないか見極めるためだ。
「わたしは魔族ではありませんが、たとえそうだとしても貴方と似たものを持ちえているのは事実です。むしろ人間に知られた方が不測の事態を招くでしょう」
小さく喉を鳴らし、息を整える。
それからシイナは、ゆっくりと、自分の過去を話し始めた。
「ラヴィリンス家の人間は、代々ロギスタニア王家に仕える占師として、魔族との契約を結んできました。但し、魔力を得るにはそれ相応の代償が必要となります。わたしが占師として生きゆくために支払った代償、それが視力です」
視力と引き換えに、シイナは占術を得た。
「なるほどの、汝の眼が見えなくなるのは必然じゃったというわけか」
皮肉な運命もあるものだと、リュウオは感じた。ラヴィリンス家に生まれてしまったがために、視力を奪われてしまうことになったのだ。たとえ行く先を視通せる力を得たとしても、その引き換えに失ったものが大きすぎる。
だがしかし、そうではないとシイナは呟く。
「これは必然でもあり、けれども必然ではありません。わたしが視力を失い、占師になったのは、わたし自身の意志によるものですから」
「汝が、自ら志願したと言いたいのか」
リュウオからの問いかけに、シイナはしっかりと頷いた。
「わたしには、歳が二つ離れた姉がいました。名を、ノイン＝ラヴィリンスといいます」
その名がシイナの口から出たとき、リュウオは肩を揺らした。

「ラヴィリンス家の人間は占師となり、ロギスタニア王家に仕えなければなりませんが、それは第一子に限られていました。つまりわたしは、本来であれば占師として生きゆく運命にはなかったのです」
第一子としてラヴィリンス家に生まれたシイナの姉、ノイン＝ラヴィリンスが、既に魔族との契約を結んでいた。シイナには同じ道を辿る必要はなかったのだ。
「解せぬ……。ならば何故、汝は暗闇に身を任せたのじゃ」
「それは、」
その先を口にするのは躊躇われる。人間同士のいざこざとはいえ、そこに魔族を引き込んでもよいものかと悩んだ。ただ、ここまで話しておいて止めるのはシイナとしても満足のいかないものとなるだろう。
意を決し、シイナはその科白をはいた。
「わたしの姉、ノイン＝ラヴィリンスが殺されてしまったからです……」
「殺された……じゃと？」
眉をしかめる。今までにないほど、リュウオはシイナの言葉に反応を示した。
空気の流れが変わったのを感じたのか、傍を警護するトルエカの額に汗が浮かぶ。
「わたしの姉は、占師となる代償として、声帯を支払いました。言葉を話せなくなる代わりに先を視通せる魔力を手に入れた姉は、ヘレナ＝ロギスタニア王女の信頼を得ることになり、専属占師としての道が約束されていました。それに何より、姉は自分自身の未来を視ることができました。わたしには得ることのできなかったものです」
シイナは魔族との契約を結ぶに辺り、視力を代償として支払った。しかし視力を失ったことが影響を及ぼしているのか、他者の未来は視ることができても、自分の未来だけは視ることができなかったのだ。

たとえ言葉を話せなくとも、手を用いたり紙に字を書いたりして伝えることはできる。その点においても、ノインはシイナよりも優れた占師といえよう。同時に、シイナは歴代の占師の中でも唯一、自分自身の行く先を視通すことのできない出来損ないでもあった。

「ですが、ある日を境に……姉はおかしなことを言い始めるようになりました」

おかしなこと、とシイナは称した。それが果たして本当におかしなことだったのか知る者は、もはやどこにも存在しない。証明できる人間はこの世を去ってしまった。

「なんと言うたのじゃ」

「魔族と……契りを、交わすと……」

魔契約者になるために契約を結ぶという意味ではない。

ただ単純に、人間同士が惹かれあい、共に結ばれるかのように、魔族を相手に契りを交わすと言っているのだ。それが人間にとってどれほど愚かしいとされているか、分からないわけがない。処刑されてもおかしくはないだろう。

そうなるであろうことには気づいていたのか、シイナ以外の人間には決して打ち明けたりはしなかった。

勿論、シイナ自身も口を洩らすようなことはしない。姉の命が掛かっているのだから当然だ。

「それだけではありません。父と母は気づいていませんでしたが、姉は毎晩人目を忍んでどこかに出かけているようでした」

二人の部屋は二階にあり、外に出るには階段を下りて玄関を通らなければならない。しかしながらノインは階段を下りるようなことはせず、二階の窓から外に出ていたのだ。

ノインの様子が気になって部屋をノックしたが返事がなく、その代わりに窓が開いていたのが根拠だった。

「姉が何をしようとしていたのか、わたしは知りません。問いただしてみれば或いは、真実を教えてくれたのかもしれませんが、それも今となっては手遅れですね。……それから暫くして、姉が自殺し

たことを知らされたのですから」
「汝よ、矛盾が生じておるぞ。ノインは何者かに殺されたのじゃなかったのか」
シイナは、ノインが自殺したと告げた。先ほどは殺されたと言っていたが、確かにこれでは矛盾が生じることになる。
だが、それは間違ってはいない。嘘は何一つ言っていないのだ。
「……ええ、確かにわたしは姉が殺されたと言いました。それは紛れもない事実です。ですがそれでは、ロギスタニア王家が嘘の報告をしたことになってしまいます。この嘘にわたしが気づいたのは、報告を受けて暫く経ってからになりますが……、では何故、自殺に見せかけなければならなかったのでしょうか」
謎解きのような不可解な事態に、リュウオは間を置かずに答えを導き出す。
「ロギスタニア王家の中に、曲者がおったということじゃな」
そう、その人物こそが、ノイン＝ラヴィリンスを殺した張本人なのだ。
「正確に言えば、それはロギスタニア王家の人間ではありませんが、王女と近しい関係にある人物であることは確かです」
虚偽の発言によってロギスタニア王家の人間とシイナを混乱させた人物は、いったい何の目的があってノインを殺したのか。また、殺されるだけの理由があったのか。
「魔族と契りを交わすなど、人間からしてみればおかしな言動でしかありませんでしたが、あの頃の姉は幸せそうでした。でも、だからこそわたしは真実を知りたかった。幸せの最中にいた姉が自殺をしなければならないわけを……」
「……そして、汝は決めたのじゃな。占師になると」
リュウオの言葉に、シイナは強く頷いてみせる。
真実を知るために、そして何があったのかを視るために、シイナは魔族との契約を結び、魔契約者となったのだ。
「えてして、汝は真実を視たわけか」

占師となるために支払った代償は、シイナを暗闇の世界へと誘った。

眼が見えないということに初めのうちは戸惑い、何もかもが疑わしき存在であると感じていたが、やがてそんなことはどうでもよくなった。

視力が無いのであれば、代わりに耳で聞けばいい。空気の流れを感じ取ればいい。今までは眼に頼り切っていたシイナだったが、アカズになるのを切っ掛けとして、その他の感覚が特に優れるようになっていた。

【2－4】

「わたしは姉の代わりとして王女の専属占師となりました。悪いとは思っていましたが、真実を知るには都合がよかったのです。……そして、遂にわたしは見つけました。姉を殺したであろう人物を……」

確信が持てないのは、シイナが過去を視通すことができないからだ。他者の未来は視ることができても、その者が過去に何をしてきたのか知る術は無い。

「そこで、汝は何を知った」

「……王女は、その人物が婚約者であることを教えてくれました。わたしは特に何も考えずにその人物と握手を交わそうと手を差し出したのですが、その人物はそれを拒否しました」

占師に肌を触られることで、未来を視られるのが怖かったのだろう。他者に自分の未来を知られるのを嫌がる人間は多々いるので、それは至って一般的な考え方だった。

しかしだ、シイナはそのとき、その人物が別の理由によって接触を拒んでいることに気づいてしまった。それは直感的なものではあったが、不確定要素が幾つも重なり、明確な答えを示しているかのように思えたのだ。

「わたしは、その人物に触れることができないかと頭を悩ませました。しかしながら眼が見えないわたしにできるようなことは何もありません。気がつけば朝が訪れ、暗闇が辺りを包み込んでいきます……。そんな日々を送っていたわたしの許に、千載一遇の機会が巡ってきました。それこそが、今宵の出来事へと繋がるのです」

今宵の出来事とは、リュウオが王女を連れ去りに来ることを表している。

シイナはその日、王女の身に何が起こるのかを視た。リュウオが闇夜に紛れ寝室へと忍び込み、王女を連れ去ってしまう未来が視え

たのだ。慌てふためく王女と婚約者を前に、シイナはこれを好機とみる。婚約者に触れる機会があるとすれば、今しかない。この瞬間を逃せば、次はないかもしれない。そう考えたシイナは、王女の未来を変えるためにも婚約者の未来を視る必要があると強引に迫った。王女自身がそうすることが唯一の救いであると疑わなかったことから、シイナは婚約者と接触することに成功した。

そして、真実を視た。

「そこで、汝は何を視た」

「貴方には言えません。決して口にしてはならないことです」

語らなければならないところが抜けているが、それを話してしまえば、シイナが王女の替え玉として連れ去られた意味がなくなってしまう。

「何故、言えぬ」

「貴方が知れば、ロギスタニア王家だけでなく、国中が混乱を招くかもしれません」

シイナはそれ以上言葉を紡ぐのを拒んだ。

しかしそうなれば不満を露にするのはリュウオだ。このままでは何も分からずに話が終わってしまうことになる。

リュウオとしてはそれだけは避けたい。最後まで話を聞いて、真実を知っておきたかった。

「では王女には言うたのか、そやつと接触し何を視たのかを」

どうにかして聞き出そうと、リュウオは質問をぶつける。

「……いえ、王女にも言っていません。言えるわけが……ありません」

だが結局のところ、シイナが視たものを口にすることはなかった。自身の目的でさえ話したというのに、姉を殺したであろう婚約者について何も語ろうとしないのは何故なのか。

リュウオには理解することができなかった。

「……ふむ、まあよいわ」

「すみません」

全てを話し終えずに、シイナは頭を垂れる。
その姿を見て、リュウオはくくっと笑みを零した。
「浮かぬ顔をするでない、気が滅入るぞ。行く末が視えてしまうからそうなるのじゃ」
「ですが……、占師にならなければ真実には辿り着けませんでした」
真実を得た代償は計り知れないが、ただの人間でしかないシイナにはそうする以外に道は残されていなかったのだ。
「ならば問おう、真実を知った今尚、汝は占師であり続ける意味があるのかの」
その問いかけには、シイナも反応するのが遅れてしまった。
自殺をする前、ノインはいったい何を視てしまったのか。そして何故自殺しなければならなかったのか。そのわけが知りたくて、シイナは魔族との契約を結んだ。
魔契約者となった人間は、契約対象となる魔族の持つ魔力の十分の一を扱えるようになるが、その代償として光を失った。けれども後悔はしていなかった。これで真実を知ることができる。そう考えると、自然と勇気が出た。
「占師であり続ける意味……ですか」
だがそれも今となっては終わったことだ。
ノインを殺したであろう婚約者と接触することにも成功し、シイナは真実を得た。もはや占師であり続ける意味はないのだ。
「元々、汝は占師になる運命ではのうたじゃろうて」
リュウオの囁きに、シイナは目蓋を閉じて首を横に振った。
「占師になることがわたしの運命ではなかったとしても、わたしは自分の意思で占師になることを決めました。だから今更後戻りはできません」
その言葉を待っていたのか、リュウオは意地悪そうに笑ってみせる。
「ならば汝よ、吾と契約を結んでみるか」
「……貴方とですか？」

まさかそんなことを言われるとは思ってもみなかったのだろう。見えることのない眼を見開いて、リュウオの声が聞こえる方を向いた。
「汝は知っておるか、人間と契約を結ばんと考える魔族は滅多におらぬのじゃ」
「そうなのですか……」
それは初耳だった。
ラヴィリンス家では魔族と契約を結ぶことが当たり前のように行なわれていたので気にも留めなかったが、魔族側にも制限のようなものがあるのだろうか。シイナは眉根を寄せた。
「考えてもみるがよい、魔力の乏しい魔族が、十分の一とはいえ魔力を与えようと思うか」
「あ……」
確かに、言われてみればその通りだ。
魔契約者になることで、人間は十分の一の魔力を扱えるようになるが、それは同時に、人間と契約を結んだ魔族が十分の一の魔力を扱えなくなることを意味している。
「強き者であれば、それも可能かもしれぬ。じゃがな、弱き者が己が魔力を代償に支払い、人間と契約を結ぶにはそれ相応の危険があるでな」
魔力とは、魔族の象徴のようなものであり、自身の命と同じであると考えられている。
その命を削ってまで人間と契約を結んだりすれば、その分他の魔族との魔力の差が生じてしまい、命の危険に晒される可能性も否定できない。下手をすれば、人間にさえ殺されてしまいかねない。
「人間側から代償を支払ってもらうとはいえ、そんなものは魔族からしてみればまったく価値のないものじゃからのぅ。強大な魔力を持つ魔族の中でも、気紛れで契約を結ぶ輩がほとんどじゃろうて。……そう、たとえば今の吾のようにな」
音も無く腕を伸ばし、シイナの手を優しく握ってみせる。

広縁に長く居すぎたのか、シイナの手は冷たくなっていた。
「そろそろ中に入るかの」
その言葉を合図とし、トルエカがグラスを片付ける。
依然として、城の外では魔族の群が宴を張り盛り上がっている。
リュウオに連れられるまま、シイナは城の中へと入った。
室内には暖炉があるが、火は灯されていない。けれども不思議と寒くはなかった。これも恐らくは、ここにいる魔族の中のいずれかが魔力を用いることによって可能としているのだろう。
眼が見えないシイナを気遣いながら、リュウオはゆっくりとした歩調で歩いていく。
「椅子を用意させたでな、ここに座るがいい」
座るように促され、シイナは椅子の位置を手で確認する。
手触りのよい質感と弾力が指に伝わる。大きさからみて、どうやら二人用のようだ。これは椅子というよりもソファに近いかもしれない。
ゆっくりと腰掛けたその隣に座っているのは、言わずもがなリュウオだ。
「更に言えばのう、ここからが魔族と人間が契約を結ぶに際し面白いところじゃて」
ある種の自信のようなものを言葉の端から感じ取れるが、それはリュウオが魔を統べる王であることが最大の要因といえるだろう。そうでなければ、次のような科白を口にはしまい。
「魔族との契約とは、より強大な魔力を持つ魔族に優先権が存在しておる。つまりじゃ、汝が契約を結んでおる魔族よりも、吾の魔力が強大であれば、その契約を上書きすることも可能というわけじゃな」
「契約の上書き……。そんなことが可能なのですか」
「嘘を吐いてどうなるというのじゃ、吾になんの得もありはせぬ」
シイナが契約を交わした魔族が、魔を統べる王であるリュウオよりも強大な魔力を持っているわけがない。それは言われなくとも理

解している。だからこそリュウオは、このような話を振ってきたのだろう。だが、いまひとつ信じることができない話だ。何か裏があるのではないかと疑ってしまいたくなる。

勿論、問題はそれだけではない。

一度でも魔族と契約を結んでしまえば、人間は代償を支払わなければならない。　そしてもし仮に契約の上書きが可能だとすれば、それまでに契約を結んでいた魔族から得ていた魔力は失い、その代わりに新たな契約を結んだ魔族の魔力を得ることになるわけだが、それは同時に二度目の代償を支払うことにも繋がる。

つまるところリュウオは、眼が見えないシイナに、更にもう一つ何かを失えと言っているようなものだった。

【2－5】

「汝よ、契約を結んだ魔族の名を言うてみぃ」
「……真名は知りませんが、ラヴィリンス家はあの魔族のことをミロクと呼んでいました」
その名に聞き覚えがあるのだろう。シイナの口から出てきた魔族の名を耳にして、リュウオはくつくつと喉を鳴らした。
「ミロクとはのう……、これはまた大物が釣れてしもうたわ」
大物、とリュウオは表現した。魔を統べる王たる存在に、そのような表現を許される魔族は、滅多にいまい。ラヴィリンス家の人間が占師になるために代々契約を結んできた相手というのは、果たして何者なのか。
「奴はの、吾と等しい存在――魔を統べる王じゃ」
「ミロクが……魔を統べる王……？」
反問すると、リュウオはその通りだと頷いた。
「魔を統べる王は貴方一人ではなかったのですか」
驚きを隠せないといった様子で、シイナはリュウオに詰め寄る。
「その認識が既に間違いじゃ。吾が支配下に置くのは、此処ロギスタニア大陸に限られておるでな、それが意味することは汝も理解できようぞ」
「一つの大陸に、一人の王が存在していると……」
これも全て初耳ではあったが、リュウオの言葉には真実味がある。それはリュウオが人間ではなく魔族であることが理由として挙げられるだろう。
「汝が契約を結んでおる魔族、魔を統べる王ミロクはの、東の大陸――エルバストロスに存在する魔族の群の王じゃ。本来、支配下に置く大陸以外には干渉せぬが暗黙とされておったわけじゃが……さて、奴はいったい何十年前……否、何百年前からそれを破っておったのか。人間に代償を支払わせてまで、何を求めておるのかのぅ」

少し嬉しそうに思考する。シイナにはそれが一暴れしたがっているかのようにもみえた。
他の大陸の情報は、滅多に入ってこない。何故ならば、魔族に襲われるであろう危険を侵してまで、大陸間を移動しようと考える人間がいないのだ。
他の大陸との交流といえば、ロギスタニア大陸の東に位置するエルバストロス大陸が唯一だろう。しかしそれも魔族の手によって阻まれてしまうことがほとんどで、その他の大陸に至っては海を渡らなければならず、交流を持つことさえ不可能な状態にある。
「じゃが驚いたぞ、よもや吾と等しい魔力を持ちえる魔族との契約を結んでおるとはの」
「自分が知らない間に、わたしは魔を統べる王と契約を結んでいたのですね……」
人間や魔族の行く末を視通すことができれば、自身の思うがままに生きてゆくことができるだろう。言われてみれば確かに、ラヴィリンス家の人間は特に優れた魔力を持っている者がほとんどだった。契約を結んだ相手が魔を統べる王なのだから当然だ。
「しかしじゃ、汝が契約しておる魔族がどのようなものじゃろうと、吾にはまったくもって意味のないものじゃて」
たとえ魔を統べる王が相手だとしても、リュウオは臆することはない。
「さて、話が長うなったが……汝よ、吾と契約を結ぶか」
「断ります」
きっぱりと、シイナは断ってみせる。
「ほぅ、何故じゃ。ミロクとの契約により視力を失うた汝が、今更別の代償を支払うのが怖いわけではあるまいな」
眉間に皺を寄せて、真意を聞き出そうとする。
するとシイナは、ある意味予想通りの言葉を口にした。
「わたしはラヴィリンス家の人間です。姉亡き今、わたしには占師として生きていかなければならない義務があります」

義務、という言葉を用いた。
リュウオの話に心が揺さぶられたのは事実だが、今ここで新たな契約を結び、更に代償を支払うことにでもなってしまえば、姉の敵を討つことが困難になるだろう。
この眼で敵を見ることはできないが、必ず自分の手で決着をつける。それがシイナに課せられた義務でもあった。
「……ふぅ、やはり血は争えんのぅ」
少しばかし残念そうに、リュウオは深い溜息を吐いた。シイナはその呟きに反応する。
「それは、どういう意味ですか」
「場所を移そうぞ」
椅子から立ち上がり、リュウオはシイナの手を取る。回廊へと戻り、シイナが躓かないように気をつけながら、ゆっくりとした足取りで奥へと進んでいく。
「さあて……、先ほど話した内容と少し重なるがの、ほんの僅かな間ではあったが、此処には一人の人間がおった。そやつがまたおかしな人間でのぅ、魔族を怖がることなく、たった一人で此処までやって来おったのじゃ」
回廊を進み、階段を下りていく。
広間中央の黒の扉を開いて、二人は玉座の間へと入った。
「そやつはの、今の汝と同じ言葉を紙に綴りおったわ」
「……ま、まさか」
玉座の後ろには、更にもう一つの扉が用意されていた。
その扉を開いた先にあったもの、それは小さな墓石だ。
「見えぬか？　……いや、見えなくともよい。そやつも、汝にだけは見られたくなかったようじゃからのぅ」
墓石の前に立つと、リュウオは手を離した。
自由になった両手を前に出し、シイナは墓石に手を触れて、そこにあるものを確かめていく。
「汝の姉、ノイン＝ラヴィリンスの墓じゃ」

「貴方だったのですか！　貴方が、姉を攫って……っ」
後ろを振り返り、リュウオがいるであろう方角に向けて声を荒げる。
ノインが自ら命を絶ったと報告を受けたシイナは、哀しみに明け暮れていた。
だがそれに追い討ちをかけるかのように、亡骸が何者かの手によって奪われてしまった。
そう、シイナが捜すこの世には存在しない人物とは、ノイン＝ラヴィリンスなのだ。
「否定はせぬ」
「どうして……、どうして攫ったのですかっ」
怒りを抑えきれなくなったのか、シイナはリュウオの腕を掴み、ありったけの力を込めた。
それを優しく振りほどき、リュウオはシイナの頬に触れる。
「少しだけ、昔話をするかのぅ……」
墓石の前で膝を折り、両手を組んでみせると、リュウオは唾を飲み込み、息を整えていく。
妹であるシイナに心のうちを打ち明けるのには躊躇いを齎していたが、それでは怒りに我を忘れつつあるシイナを納得させることはできないだろう。
程よい緊張を持ったまま、その言葉をシイナの耳に届けることに決めた。
「汝の姉、ノイン＝ラヴィリンスと吾は、契りを交わすと誓（ちこ）うた間柄じゃった……」

【3－1】

冬が始まる少し前の出来事。

木々のざわめきが辺りに不気味さを演出し、太陽の光を遮断するかのように鬱蒼と生い茂っている。時折、肌寒い風が空気とともに通り抜けていくが、それも数えるほどにしかない。

枝の隙間から空を見上げてみれば、黒い影が幾重にも連なって暗闇を生み出していた。それはあたかも獲物を見つけた魔族が、狩る瞬間を躊躇わせているとも言い換えられそうだった。

その薄暗い森の中を、昂然と歩きゆく女性が一人。

真っ黒なローブに身を包み、大き目の肩掛け鞄を携えている。

魔族に襲われるかもしれないという危機的状況が続く中、血に近しい瞳の色を持つ女性は、腰まで伸ばした長い髪を揺らめかせながら歩く。それは恐れなど微塵も感じさせないかのような態度だった。

やがてその女性は、たった一度も魔族に襲われることなく、とうとう目的の場所へと辿り着いてしまった。我が身に降りかかるかもしれない危険をおしてでも、行かなければならなかった場所、それは高根の古城だ。

魔族の巣窟ということもあって、周囲には数え切れないほどの魔族の姿が確認できる。だがおかしなことに、その中の誰一人として、彼女に襲いかかるものはいない。

武器も持たない人間、それもか弱そうな女性が、此処に来るわけがないと認識していたのだ。

その光景は正に異様であった。

予期せぬ訪問者を前に騒ぎ始める魔族の群をよそに、女性は城壁をくぐりきってしまい、城門を目指して真っ直ぐに歩いていくではないか。

誰かが止めなければならないと思いつつも、結局は誰も行動に移すことができないでいた。

異様な空気が流れる中、遂にその瞬間が訪れてしまった。
「人間が、たった一人で吾の許を訪ねてくるのは久方ぶりじゃの。……汝、名をなんと申す」
城門の前に佇むのは古城の主――魔を統べる王リュウオ＝リヴァースだった。
危険はないであろうと考えているのか、リュウオの後ろに立つトルエカは臨戦態勢には入っていない。
リュウオの問いかけに、その女性は返事をしない。
「……汝よ、吾が怖いのか。じゃから返事をせんのか」
それは違う、と首を振る。
女性は肩にかけていた鞄を下ろすと、中から草紙を取り出して破ってみせる。同時に、一本の筆を手にして、すらすらと筆先を動かしていく。
文字が綴られた紙には、次のようなことが書かれていた。
――わたしの名は、ノイン＝ラヴィリンスと申します。
言葉を用いず、紙に文字を綴り名を名乗る。おかしなことをするものだと感じたが、ノインは気にもせず更に次の文字を書き綴っていく。
――魔族との契約を結ぶ、魔契約者にして占師です。
「……ほう、占師とな」
魔契約者といえば、人間ではなく魔族に近しい存在として知られている。十分の一ではあるが、契約を結んだ魔族の魔力を扱えるようになるため、もはや人間とは呼べないからだ。
「占師が、吾に何用じゃて」
用件を求めると、ノインはその問いかけに応じる。
――わたしは、とある女性の専属占師です。その女性の名は、ヘレナ＝ロギスタニアといいます。この大陸に巣食うからには、魔族たる貴方もその名はご存知でしょう。
ヘレナ＝ロギスタニアとは、此処ロギスタニア大陸を治めるロギスタニア城の王女の名だ。

王女の専属占師であるノインが、いったい如何なる用事を持ってリュウオの許を訪ねたのか。
――王女の前途を幸あるものとするため、わたしは幾度となく手にした魔力を行使してきました。そんな時、わたしはふと考えてしまったのです。自分自身の行く先とは、果たしてどうなっているのだろうかと。
占師として生きているのだから、その欲求は当然のものといえるだろう。占師としての魔力を持つノインを王女が頼るように、ノインもまた自身の魔力に頼ってみたくなったのだ。
――一度でも思考してしまえば、もう後戻りはできません。我慢できなくなってしまったわたしは、つい先日、自身の未来を視通したのです。
「ふむ、占師が自身を占うとな……。いや、実に興味深いの。えてして、汝はどのような結果が視えたのじゃ」
――貴方とわたしが、契りを交わすであろう未来が視えました。
恥ずかしげもなく、ノインはその科白を言葉にした。
一切の戸惑いや躊躇いも見せないその毅然とした態度に、さしものリュウオは眉根を寄せる。
「吾が……汝と、契りを交わすじゃと……？」
予想だにしない科白に、むしろ戸惑いを見せたのはリュウオの方であった。
「なにを馬鹿げたことを言うておる。吾は魔を統べる王リュウオ＝リヴァース、人と交わろうなど考えもせぬわ」
思わぬところで真名を告げたリュウオだったが、ノインは気にも留めていない。言われなくとも初めから理解していると言いたげな様子だ。
――貴方が仰っていることは間違いではありません。しかしこれは、わたしが魔力を用いて行く末を占い、視た現実なのです。今はまだそのような考えをお持ちだとしても、いずれ貴方はわたしのことが好きになることでしょう。

これは予め決められていた未来であると宣言するかのように、それは自信の込められた力強い言葉だった。
自分のことを好きになると言われ、動揺しないはずがない。リュウオの頭は混乱していた。
「汝は現状をはっきりと理解しておるのか？　吾の機嫌を少しでも損ねれば、汝は瞬きする暇もなく首から上が無くなるのじゃぞ」
死に直面しうる状態にあることは、ノインも承知の上だった。
だが、たとえそうだとしても、ノインは自分が視た未来を信じてみたかった。
――魔族が、人と契りを交わしてはいけないのですか。
純粋な気持ちを文字にして伝える。その真っ直ぐな想いを向けられたリュウオは、脅しとなる言葉をそれ以上紡ぐ気にはなれなかった。
「……汝はおかしな奴じゃのう。人であるというのに、吾の許に足を運ぶとは物好きにも程があるぞ。魔族が怖いとは思わんのか」
――未来で視たわたしと貴方は、とても幸せそうでした。その幸せを感じることができるのであれば、わたしには何一つとして恐れるものはありません。
まるで告白をされているかのような錯覚に身を震わせる。
リュウオは、ノイン＝ラヴィリンスという人間がますます理解できなくなっていく。
だが、それとは別に、別の感情が生まれつつあるのを微量ながら感じ取っていた。
――わたしは人間です。家族もいますし、王女の専属占師としての仕事もあります。ですから此処に長く留まることは不可能です。
「それを吾に伝え、汝はどうするつもりじゃ」
ある程度予想はしていたが、リュウオはあえてその先を促してみる。
ノインは薄っすらと微笑み、紙に文字を書いていく。
――わたしに、会いに来て下さい。

そこに綴られていたのは、一人の占師の単なるわがままだった。
「汝に会いにゆけと申すか」
その通りです、とノインは笑みを浮かべたまま頷いた。
――毎夜、わたしの許に姿を見せて下さい。そうすれば、わたしは三里も離れた古城へと足を運ぶ必要もありませんし、家族に怪しまれることもないでしょう。
自分勝手な要求でしかないというのに、ノインはそれが絶対に叶うものだと確信しているかのような表情をしていた。これもまた占いによって視通したとでもいうのだろうか。
「吾の都合はどうなるのじゃ、汝の意見に全て従えとでもいうつもりか」
魔を統べる王たる存在が人間に会いに行くためだけに、三里の距離を毎夜移動しなければならないというのは、自身が支配下に置く魔族らに示しがつかなくなるだろう。魔を統べる王としての名誉にも関わってくる問題だ。
――それを決めるのは、貴方自身ですよ。
恐らくはずっと前から決められていた未来が、今ここに来てようやく形となり姿を見せるようになったのだ。
ノインは自分の前途に幸せを視た。そしてリュウオの幸せも同じく。
信じがたい話だとしても、魔族との契約を結び占師となったノインが、行く末を見間違うはずもない。だとすれば、リュウオに選択権は無いに等しいといえよう。
「……く、くくっ、これもまた一興か」
我慢できずに苦笑する。
それもこれも全ての元凶は、目の前に佇む占師ノインによるものだ。
「よかろうて、吾は汝と契りを交わしたもうぞ」
遂に、リュウオは観念する。だがその表情はどことなく嬉しそうでもあった。

「王、人間を相手にそのような行為は――」
「阿呆が、よう見てみぃ……」
トルエカの心配をよそに、リュウオは喉を鳴らして解顔する。
「いったい何処に人がおると申すか。此処におるのは人じゃのうて、魔契約者たる存在、つまりは魔族というてもおかしゅうない人型しかおらぬぞ」
理屈ではない。無理に屁理屈をこねているのは明らかだ。
けれどもトルエカは、未だかつてリュウオがこれほどまでに満足気な笑みを浮かべているのは見たことがなかった。それを見てしまえば、あとはもう何も言っても無駄であると悟った。
「――さて、汝よ」
トルエカの制止を振り切り、リュウオはノインと向かい合う。
「吾は汝の願いを聞き届け、契りを交わすと約定するぞ」
その言葉を聞いたノインは、首を横に振ってみせる。
草紙を丁寧に破り、新たな文字を綴っていく。
――それはわたしの願いではありません。運命によって予め決められていることです。わたしの願いは別にあります。
「ほぅ、なんじゃそれは」
――人間と、魔族の共存です。
大真面目な表情で、ノインは心のうちを文字として書き出した。しかしそれはあまりにも壮大で実現しうるには想像を絶する労力が必要となるであろうものだ。
「汝よ……、たわ言も大概にせぬか。魔と人は相対するもの同士じゃて、共存は不可能じゃ」
諭すかのように、リュウオは返事をする。
確かにそれは不可能といっても過言ではない。ノイン自身、魔族が人間のことをどのように思っているのかは理解の範疇にはないが、逆は知りえている。
人間は、魔族を恐れるものだ。人々の生活を不安定にし、命を脅かす存在として位置づけている。互いに認め合い、共存するなど絶

対的にありえないのだ。
——正論でもありますが、これは決して不可能な願いではありませんよ。国一つを治めるロギスタニア王家の王女の専属占師をするわたしと、魔を統べる王たる貴方が手を組めば、限りなく実現に近づくのではないでしょうか。
勿論、それは気の遠くなるような年月をかけることによって、ようやく達成できるかもしれない不確かなものだ。ほんの些細な綻びで崩壊してしまうであろう脆さと、常に隣り合わせだ。
「汝は待ち続けると申すか」
魔族にとっては、それほど長い年月ではないかもしれない。
だが人間は違う。魔族に比べて寿命が短いのだ。生きている間にできることは僅かだ。
——待ちます。願いが叶うのであれば、わたしはいつまでも待ち続けます。
それでも、ノインは待ち続けると文字に誓った。一人で此処にくるだけの決意がある人間に、もはや何を言っても無駄なのだ。
「……ふぅ、汝には敵わんの。言葉で言い負けたのはこれが初めてじゃて」
くくっ、と笑みを零すリュウオを見やり、ノインもまた嬉しそうに微笑んだ。
「して、その願いとやらを叶えるために、吾は何をすればよいのじゃ」
するべきことは山ほど存在する。その第一歩となるものをリュウオは訊ねた。
すると、ノインはここにきて初めて、リュウオの名を綴る。
——魔を統べる王リュウオ、わたしは貴方に命じます。これから先、一生において、貴方は人を殺めないことを誓って下さい。
共存を実現するため、手始めとして無駄な殺生を禁じることにした。
魔を統べる王が人を殺めなくなれば、その支配下に置く魔族の群

にも少しずつ影響を及ぼしていくことだろう。
「なんじゃ、吾は汝の思惑に嵌ってしもうたようじゃの」
――そうですね、その通りだと思います。まさかわたしもこれほど上手く事が運ぶとは思っていませんでした。
悪びれた様子もなく、ノインは悪戯な笑みを浮かべてみせる。
その笑顔を向けられたリュウオは、一つ咳払いをして顔を背けた。
「まあ、吾を利用しようがしまいがよかろうて。それより汝よ、吾と契りは交わすとしても、契約は結ぶことは望まんのか」
魔契約者となっている者に魔族との契約をほのめかすのは、そのほとんどが無意味とされている。何故ならば、魔契約者は既に契約を結んでおり、その代償を一つ支払っているからだ。
一つ目の代償を支払うのには、勇気が必要となるだろう。自身を代償に魔力を手に入れるのだから当然ともいえる。
しかし中には勇気と言うよりも無謀と言い表した方が合っていると語る者も存在するが、正にその通りであろう。
そして二つ目の代償を支払い、前身の魔族との契約によって手に入れた魔力を失ってまで新たな魔力を必要とするのには、心を削る必要があるといえよう。もう一つの魔力を手に入れるわけではなく、引き換えにしなければならないのもまた躊躇いの原因となる。
――貴方と契約を結ぶつもりはありません。
しかしだ、ノインは心を一切揺らすことなく、リュウオの誘いを断った。
その理由は、至って単純なものだ。
――わたしはラヴィリンス家の人間です。ラヴィリンス家の人間は、代々ロギスタニア王家に仕える占師として生きていくことを義務付けられています。
「吾との契約は、汝の義務に劣ると申すか」
――義務を負い、占師にならなければ、わたしは貴方に出逢うこともありませんでした。それでもまだわたしと契約を結びたいというのであれば、貴方に従いますが。

従うつもりなど毛頭ないといった表情で、その文字を見せつける。従わなければならないのは、リュウオの方だった。
致し方ない、と大きな溜息を吐いた後、リュウオは晴れやかに、これでもかと言わんばかりの破顔を披露してみせる。
「くくっ……、ならば汝が契約を結びたいと自ら申し出るようになるまで口説き続けてみせようぞ。汝を手に入れるためならば、汝が思い描く些細な願いを叶えることなど造作もないことじゃろうて。……さあて、今此処で汝に誓(ちか)うたもうぞ。吾はもう二度と人を殺めんとな」

【3－2】

魔を統べる王と占師が出逢ってから、一月が過ぎた。
毎夜の出迎えに行かなければならないことに、初めのうちは戸惑いを見せていたリュウオだが、それも三度(みたび)繰り返せば慣れてしまった。今では、太陽が沈み夜が顔を覗かせるのを今か今かと待ちわびるほどだ。
そして今宵もまた、ラヴィリンス家に知られざる訪問者が姿を現す。
「――来るのが早すぎたかの」
声が聞こえた方に視線を向けると、窓枠に足をつき、羽を休めるフクロウがいる。いつでも入ってこられるように窓は開けっぱなしになっていたが、そこにいるのをいつまでたっても気づかれないフクロウは我慢できなくなったのだろう。嘴で窓を小突いてみせる。
――ごめんなさい、リュウオと会うために身だしなみを整えていたの。
部屋の主はベッドに腰をかけて、奇麗な黒髪にくしを入れている最中だった。
紙に書かれた文字に眼を通せば、出逢ったころの硬さが抜けているように思える。二人の距離が縮まっている証拠だ。
「まあよい、汝と会うための待ち時間も楽しみのうちの一つじゃからの」
身支度を済ませたノインは、すっくと立ち上がる。
窓の傍に近寄ると、フクロウは重力に逆らうかのように浮かび上がり、羽を広げることなくノインの腕にとまった。
――今宵は月が奇麗です。空の旅を満喫するには勿体無いぐらいですね。
夜空には十五夜の月が昇っている。
窓から身を乗り出して隣の部屋の窓を確認してみるが、灯りは消

えている。妹は既に夢の中にいるらしい。気づかれることなく外出する準備が整ったようだ。
ノインの腕から離れて部屋の中心に移動すると、フクロウは魔力の流れを変化させる。
すると驚くことに、フクロウはみるみるうちに人型へと姿を変貌させていく。ノインはその様を嬉々として眺めつつ、恋人が支度を整えるのを待った。
「ノイン、手を取れ」
名を呼ばれ、ノインは差し伸べられた魔族の手を握る。
二人は手を繋ぎ合い、互いに見つめ合った。
「今宵は人型にて、空を舞うぞ」
――はい。時が経つのを忘れ、朝が訪れるまで語り合いましょう。
窓枠に足をかけ、窓の外に背を任せる。けれども重力に従って下へ落ちることはなく、宙に浮かんでみせた。
リュウオの手に導かれ、ノインは闇夜に姿を包ませる。
重力を自在に操ることの可能なリュウオと共にいるため、その影響はノインにも現れている。
――幾度も経験しましたが、これは不思議な感覚ですね。
声帯を失ったノインは、空の旅をするにも草紙と筆を持参する。そうしなければ、リュウオと会話することさえできない身にある。
しかしそれも些細な問題だ。今の二人には会話などなくとも、共に過ごす時間があるだけで幸せを感じられるのだ。
「今宵は何処に向かうかのぅ」
この瞬間を心行くまで堪能し、二人は空の旅に出かけるのだった。

雪が降る季節になった。
白い結晶がさらさらと降り注ぎ、深緑に覆われていた空間は徐々に白銀へと彩られていく。
昨夜も空の旅を満喫したノインは、今朝も普段通りに起きて朝食を取り、仕事場へと足を向ける。行く先はロギスタニア城の、とあ

る一室だ。
城の兵士に言葉無き挨拶を交わし、城の中へと入っていく。豪奢な造りの中には人の通りが滅多にない場所も存在する。
ノインはその場所を目指して長い廊下を歩き続け、下へ下へと階段を下りていった。やがて、灯りの疎らな空間に、過去に忘れ去られたかのような扉を見つける。
薄汚れたドアノブに手を伸ばし、古びた鍵を差しこむ。錆びついているのか、鍵を開けるのも一苦労だった。
鍵の外れる音を合図に、ノインはドアノブを回して扉を開く。部屋の中には埃を被った本棚が壁一面を占領しているのが見えた。
この空間こそが、ノインが占師としての魔力を扱う仕事場であった。
此処に、人がいることすら知らない者がほとんどだ。しかしそれも仕方のないことであろう。
占師という職業柄、あまり表立って活躍することはできないのだ。
ラヴィリンス家の人間が占師の家系だということを知る人間は、ごく僅かしか存在せず、それもロギスタニア王家の血統に当たる人間に限られている。よその人間が、ノインが魔契約者であることを知る術はないのだ。
だが、それも今この瞬間を持ってお終いとなる。
王家の人間ではない訪問者がノインの前に姿を現したのだ。
「ノイン、遅かったわね。待ちくたびれちゃったわよ」
部屋の中にいたのは、ロギスタニア城の王女――ヘレナ＝ロギスタニアだ。
窓から吹き込む寒々しい風に栗色の髪を靡かせ、蒼に染まった両目をノインに向ける。気品溢れるというよりは、少々お転婆なところがありそうな雰囲気を醸す女性だった。
――わたしは時間通りにこの場所へと通っているはずですが。
彼女はノインを専属の占師として雇っている。その占いには絶大なる信頼を寄せており、何をするにもまずノインの占いを頼るよう

にしていた。
「ふふっ、それもそうね。……それより今日はノインに紹介したい人がいるの」
そしてもう一人、ノインにとっては招かれざる訪問者がいた。
「……へえ、キミがヘレナの専属占師か」
ヘレナが言い終わると同時に、後ろから声がかかった。
振り向いてみると、青年が一人、扉に寄りかかっているではないか。
初めからこの部屋にいたのだろうか。存在すら感じることができなかった。
「彼の名前はデザイヤ＝イスナーク、私の婚約者よ」
優雅な振る舞いで一礼する青年――デザイヤ＝イスナークは、ヘレナの婚約者だった。
その名は、表舞台に出ないノインの耳にも届いていた。
――わたしの名前はノイン＝ラヴィリンスといいます。
偽りの笑顔を張り付けて、ノインはその手を差し出した。
「……ああ、よろしく。専属占師さん」
一瞬、デザイヤは眼を細める。感づかれてしまったのだろうか。
だが、握手を止めることはできない。まんまと騙されたデザイヤは、ノインと握手を交わす。
その瞬間、ノインはデザイヤの未来を視た。
「本当はね、私とデザイヤが婚約してることはお父様たちから秘密にするように言われてるのよ。でもね、ノインにだけは教えておきたくて連れてきちゃったわ」
幸せそうに微笑むヘレナは、どうやら婚約者の本当の姿を知らないらしい。
自分は二人の間に口を挟み、その幸せを壊さなければならないだろう。それが少し辛かった。
「ノインも彼の武勇伝は聞いたことがあるでしょう？　誰もが恐れていたあの逆さまの王の首を獲った英雄なんですものね」

――ええ、その話は両親から伝え聞きました。まさかとは思いましたが、この方がその英雄様だったのですね。お会いできて光栄ですよ。

聞き間違いなどではない。

ヘレナは確かに、デザイヤが逆さまの王の首を獲った英雄であると告げた。しかしそれでは矛盾が生じる。ヘレナの口から出た言葉が嘘ではないとすれば、では毎夜のようにノインが逢瀬する、魔を統べる王とはいったい何者だというのか。どちらかが嘘をついているのは明らかであり、その答えは初めから分かりきっていた。

嘘をついているのはヘレナだ。

否、正確に言うならば、デザイヤが虚言を吐いて国中を巻き込んでいる。

デザイヤという青年は、酷くしたたかな人物だ。

人々から逆さまの王と呼ばれ恐れられている、魔を統べる王の首を獲ったなどという嘘をついてまで、地位や名声を欲するほどだ。いずれ嘘が明るみに出るとは思わないのだろうか。

そう、ノインも初めのうちはそのように考えていた。だがよくよく思い直せば、逆さまの王が自ら足を運び、人々を襲ったことは一度もない。黒き竜の姿を成していることは人々の噂によって皆が知るところにあったが、デザイヤを含め、その姿を自身の眼で捉えた者は誰一人としていない。

過去、幾度となく逆さまの王を討伐に向かう兵士や若者たちがいたが、今となっては彼らを勇敢と呼ぶ者は存在しない。何故ならば、揃いも揃ってこの世を去っているからである。

しかしだからこそ、デザイヤが吐いた嘘が生きてくる。

逆さまの王の首を獲ったという、その真偽を確かめる術を人間は持ち得ない。

偽りの王を作り上げ、手ごろな魔族の首を獲って持ち帰ればよいだけの話なのだ。

「ねえ、実はノインにお願いがあるんだけど、今日は彼のことも占

ってほしいの」
椅子に腰掛けるノインを前に、ヘレナは身を乗り出してお願いをする。二人の行く末を視てほしいのだろう。するとデザイヤは、眉間に皺を寄せて都合が悪そうな表情をする。
「別にいいよ。俺は自分の未来なんて知らなくてもいいさ。ヘレナと二人で幸せに暮らしてることは分かりきったことなんだからな」
婚約者から二人の幸せを確信する言葉を受けて、ヘレナは満面に笑みを咲かせる。
だがそれも既に事を得ていた。
――もう、視ました。
デザイヤの思惑通りにはさせない。
ヘレナを助けることができるのは、専属占師たる自分しかいないのだ。
「……視た、だと？　いつの間に……」
緊張を隠そうとするあまり、デザイヤの顔は引きつっていた。
ヘレナに嫌われてしまうかもしれない。けれどもヘレナが不幸になることの方がノインには耐えられない。だからこそノインは、デザイヤの未来を視通した次の瞬間には、全てを話してしまおうと決めた。
――デザイヤ＝イスナークは、英雄などではありません。
まずは一文、紙に文字を書き綴り、それをヘレナに手渡した。
「え……」
英雄ではないとの文字に、ヘレナは眉根を寄せる。
ノインは質問する暇すら与えずに、もう一文を書き上げてみせた。
――逆さまの王は今も健在です。此の者に首を獲られてなどおりません。
真実を告げるために、ノインは逆さまの王が生きていることをヘレナに伝える。
――此の者の行く末を視通したとき、これから先起こりうるであろう悲劇を視てしまいました。ヘレナ＝ロギスタニア王女、それは

貴方が此の者の手によって命を落とす未来です。
「な、なにを……言ってるのよ。ノイン……、貴方正気なの？」
ノインを専属の占師として以来、今までに一度として間違ったことは言われなかった。生命を持つ者の行く末を占えるのだから当然といえよう。ヘレナはノインのことを心の底から信頼していたし、感情を隠さずに話し合える友達とも考えていた。
信じたくなくとも、ノインが視たものは真実だ。疑う余地はない。
「……う、嘘だ！　こいつは嘘を吐いている！　俺が何故、ヘレナを殺さなければならないんだ。ヘレナは俺の婚約者なんだぞ？　ヘレナを傷つけるのも大概にしろ！」
床にへたり込むヘレナに、デザイヤは肩を貸す。しかしながらヘレナは、デザイヤの助けを借りるのを拒否した。疑いの目はデザイヤへと向けられつつある。
「くっ……、目を覚ませヘレナ、占いなんて不確かなものを俺よりも信じるというのか？」
「でも、ノインの占いは間違ったことはないわ……」
「たとえこいつの占いが真実を視るとしても、こいつ自身が視たままの真実を告げるわけじゃない。つまりこいつは、嘘を吐こうと思えばいつでもそうすることができる立場にあるんだ」
占師にとって、人に嘘を吐くということは、万死に値する。
嘘を吐き、人から信用されなくなった占師など、いったい誰が頼りにするだろうか。
そのことに気づかないほどヘレナは間抜けではない。そしてデザイヤ自身も同じだ。
焦りを見せ始めるデザイヤは、ヘレナを説得させながらも、危機を脱する手立てを考える。
そして、小さなほころびに気がついた。それはノインがリュウオと出逢ってしまったが故のほころびだった。
「ならば問う。お前は何故、逆さまの王が生きてることを知ってるんだ？　俺が首を獲った逆さまの王が偽物であると何故断言できる

んだ？　お前は逆さまの王の姿を知っているとでもいうつもりなのか？　……いや、ひょっとしてお前、魔族の手先なんじゃないのか？　だからお前は魔族にとって不利益になりうる事実を偽るために、逆さまの王は生きてるなどと虚言を吐いてるんだろ？」

強引に、けれども偽りによってほころんでいた外堀を埋めるかのように、デザイヤはまくし立てる。デザイヤの意見に反論するため、ノインは紙に筆先を走らせるが、これ以上のことをヘレナに吹き込まれたりでもすれば、更なる混乱を招くことになるであろうことを予測したデザイヤは、ノインの手から紙を奪い取ってしまった。

「お前は罪人だ。俺とヘレナの幸せを奪おうとする悪魔……いや、魔族そのものだ！」

――ヘレナ、わたしを信じて。

紙を奪われてもなお、声として届けることのできないその想いを、壁に書き綴る。

「……う、うぅ」

ノインとデザイヤ、果たしてどちらが真実を伝えようとしているのか。

ヘレナは信じるべき相手を選択しなければならない。

専属占師として常にヘレナの幸せを願い、前途を視続けたノインか、それとも逆さまの王の首を獲り、英雄となった婚約者のデザイヤか、混乱するほどに思考を巡らせていく。そして、

「――ねえ、ノイン？　……貴方、疲れてるのよ」

ヘレナが選んだのは、デザイヤの方だった。

「いつも私のことを占ってくれてたものね、疲れが溜まっていてもおかしくないわ」

違う、そうではない。疲れてなどいない。自分は真実を伝えようとしているだけだ。

ノインは首を振り、ヘレナの許へ這い寄る死の恐怖を知らせようとした。

「そうね、今日はもう占う必要はないから、家に戻ってゆっくりと

休みなさい」
きっと、他者の未来を視すぎて疲れてしまったのだろう。
そう思い込むことに決めたヘレナは、心配そうにノインの肩に手をかける。
「また明日ね、ノイン……」
それ以上、もはやノインには筆を走らせる気力は残されていなかった。

【3－3】

その夜、ノインは家に帰らずにロギスタニア城の仕事場にこもっていた。ヘレナを救う手立てはないものかと頭を悩ませていたのだ。

デザイヤは慎重な男だ。不利益になりうる存在は速やかに排除するだろう。

それはヘレナだけではなく、ノインも例外ではない。

ロギスタニア王家の存亡にも関わるであろう難問を前に、ノインは無力だった。人を占い、行く末を視通せる魔力を持っていたとしても、信じてもらわなければ意味がない。魔契約者としての魔力を発揮することもできないのだ。

どうすればいいのだろうか。悩みぬいた末、ノインは一つの考えを思いつく。それは今、ノインにできる唯一の手段だった。

そう、ノインは自分の未来を視ることにした。

リュウオと共に幸せになる前途を手に入れて以降、ノインは自身の行く末を視通すことを止めた。二人が幸せの絶頂にいることは疑う余地もなく、更に占う必要がなかったからだ。

元々、ラヴィリンス家の人間は、自身を占う行為を禁じてきた。長時間をかけてじっくりと占えば、これから先に用意されている全ての道筋を視ることが可能であり、同時に死期を知ってしまうことになる。それだけは視てはならないと、両親から何度も口を酸っぱくするほどに教えられてきた。

しかし悠長なことは言っていられない。ヘレナと近しい関係にあるノインは、自身の未来に何か手段が残されていないものかと考え、二度目の占いを行なうことに決めた。

心を閉ざし、内に秘めたる人間ならざる存在を解放する。

胸の鼓動が瞬時に高鳴り、右の手の平に魔力が集まり始めた。それを眼で捉えることは、人間には不可能だ。魔力の流れを視認し、捉えられるのは、同じく魔力を持つ存在だけだ。

胸の前で両手を組み、魔力を右から左へ流し込んでいく。
魔力の干渉を受けた左手は、身体の持ち主たる存在の前途を、時の流れに逆らわぬように逆流させていく。魔力によってそれを感じ取ったノインは、そこで初めて行く末を視通すことが可能となる。そして、知りたくもない未来を視てしまった。

「浮かぬ顔をしておるの」
月明かりの道しるべを辿り、フクロウが木窓の縁に影を落とした。
毎夜の逢瀬に姿を見せないノインを心配したフクロウが、仕事場へと足を運んだのだ。
「何故(なにゆえ)、このような暗きところに」
ノインは椅子に腰掛けたまま、不安を打ち消すかのように左腕を上げる。フクロウの存在をしっかりと感じたかった。心を落ち着かせてほしかった。
優しげに、子供をあやすかのようにフクロウの背中を撫でると、くすぐったそうに首を回す。
机の棚から草紙を取り出して、筆先を走らせてゆく。
――なんでもない、だから心配しないで。
それは嘘だ。なんでもないわけがない。
真実を語り、フクロウの手を借りさえすれば、全てを思うがままに解決することができる。
言葉にして伝える必要がある大きな歪みであることを知らせなければならない。
「ならばよい、それより今宵は空の旅を満喫はせんのか」
気づいてほしい。
わたしが視たものを知ってほしい。
けれどもフクロウには、それが嘘と見抜く術は持ち合わせてなどいなかった。
――具合がよくないから、今日は止めておくわ。
「ふむ、それならば仕方がないのぅ、……じゃがいつまでも此処に

おるわけにはいくまい。吾が家まで送りたもうぞ」
だが、それでも首を横に振る。拒否をしてみせる。
フクロウの助けを借りてしまえば、家族を死の危険に晒すことになる。
――大丈夫、わたしは一人でも帰れるから安心して。それにこの場所から家まで送ってもらうには人目が多すぎるわ。
「言われてみれば、確かにそうじゃのぅ……」
渋々といった様子で納得するフクロウは嘆息した。
ノインが視た真実、仮にそれが現実で起こりうるとするならば、過去に視た未来は変わってしまうことになる。下した決断を行動に移した場合、それは決して避けられない運命となるだろう。逃げ道は用意されていない。
――さようなら、逆さまの王。
だとすれば、今ここで伝えておきたい。
二人の行く末を視通したときから、ずっと言葉にできなかった科白を伝えたい。
――リュウオ、わたしは貴方のことが大好きよ……。
決して気づかれぬように、そっと唇を振るわせた。
ありったけの想いを込めたその言葉を文字にすることはなく、同時にその想いがフクロウの心に届くことはなかった。

フクロウが去ってから、一時が過ぎた。
松明の灯りが影を揺らし、ノインはそのときが訪れるのを待ち続けていた。
何を切っ掛けに、二人の未来は変わってしまったのだろうか。ふと、そんなことを考えてしまう。その答えは恐らく、一介が占師でしかない自分が薄っぺらな正義感を抱いてしまい、その魔力を行使してしまった瞬間に違いない。
親しい友であり、そして仕えるべき存在でもあるヘレナを助けることはおろか、挙句には自身の命まで失おうとしている。もはや苦

笑するのも馬鹿げている。
「警護の兵士もつけずに暗がりに一人でいるとは、随分と無用心なんだなあ」
不意に、声が届いた。室内には自分以外に誰もいなかったはずなのに、その人物はいつの間にか壁に寄りかかっていた。
――デザイヤ＝イスナーク……。
声帯を失われてなお、その名を口にする。
そう、ノインの前に姿を現したのは、デザイヤ＝イスナークだった。
「……いや、待てよ。よくよく考えてみれば、ヘレナの専属占師たるキミの存在を知る者は、ごく僅かなんだっけかな？　だとすれば兵士をつけて警護する意味もないわけか」
――やはり、貴方も魔契約者だったのですね。
唇を動かして、一つ目の真実を音のない言葉にする。
ノインが何を喋っているのか理解したのだろう。デザイヤは口角を上げる。
「キミは俺と握手を交わすとき、右手に魔力を集めていたな？　魔力を持たない人間にはそれを眼で捉えることはできないが……、残念なことに俺は魔契約者だ。つまり魔力を手に入れた存在ってわけだ」
握手を交わし、未来を視たとき、デザイヤは既に真実を暴かれるであろうことを予測し、対処する方法を考えていたのだ。
「あのとき、キミと握手を交わすのは当然の流れだった。キミが対象者に触れることで行く末を視通せることを、俺は知らないはずだからな。……だが、キミはヘレナの信頼を勝ち取ることができなかった。……くくっ、恋は盲目とはよく言ったものさ」
婚約者である存在を蔑む発言に、ノインはデザイヤの顔を睨みつけた。
「おお、怖いねえ。怖すぎて今にもこの場所から逃げ出してしまいたいぐらいだよ。まあそれも口封じを終えてからになるわけだがね

……」
一歩、ノインに近づく。
距離を縮められたノインは、それでも睨むのを止めようとしない。怯えなど見せたりしない。
「しかしおかしな話だよなあ……、キミは占師なんだろ？　今宵、キミはここで俺に殺されることになるのを視ているはずなんだが……。なあ、死ぬ前に一つだけ教えてくれよ。どうしてキミは逃げないんだ？」
まるでなんでもないことのように、さらりと死を言葉にした。
「ああ、失敬。キミは言葉が喋れないんだったな？　魔族との契約で声帯を代償にするとは恐れ入るよ、まったく……。因みに俺が代償として支払ったものを教えてやろうか？」
聞かれてもいないことを、べらべらと喋り始める。もはやノインには現状を打破することはできないと悟っているのか、誰にも告げたことのない秘密を次々と話していく。
「俺が支払ったもの、それは他者を思いやる心さ。人を愛したり哀れんだりすることができなくなるように、俺が自ら頼み込んだ。そうすることで、俺は何者にも一切感情を振り回されることはなくなるからな。むしろ心を失って感謝してるぐらいだよ」
心を失ったデザイヤは、地位と名声を手に入れるためならなんでもした。
嘘を吐くことは、当然の成り行きといえよう。
「さて、冥土の土産にもう一つだけ教えてやる。キミはどうやって俺がこの部屋に姿を現したのか不思議に思っていたはずだ。いったい、どうやって入ってきたのかとね」
デザイヤは魔契約者だ。きっと何らかの魔力を用いて室内へと侵入したのだろう。
「答えは簡単さ。俺が契約を交わした魔族が持つ魔力が、空間転移に特化していたのさ」
そう言ってみせると、デザイヤは内に秘めた魔力を解放する。

すると驚くことに、先ほどまでそこにいたはずのデザイヤが姿を消してしまったではないか。
「くく、びっくりするだろ？　これが俺の手に入れた魔力だ。有効範囲は俺が今現在この視界に捉えている場所に限られるが、好きなように空間を移動することができるのさ」
真後ろから声をかけられて、ノインは後ろを振り向こうとした。しかしそれを阻むかのように縄を首に巻きつけられ、きつく絞め上げていく。
「――ッ」
苦しい。息ができない。
けれどもこれは自身が視通した、行く末の結末でもあった。変えることの許されない現実だ。
「苦しいか？　だがそれもじきに治まるさ。意識が遠のけば苦しみからも解放される。だから安心して死ぬがいい」
自分と同じ存在である魔契約者がもがき苦しむ様を、デザイヤは嘲笑うことで反応を示した。
それが悔しくて、そしてもう二度と愛する人の顔を見ることができないという事実に、ノインは涙が溢れ出るのを止められなかった。
「ヘレナの専属占師さん、キミは自殺するんだ。鍵の閉められた密室で、天井から吊るされた縄に首をかけて、その生涯を終えるのさ……」
意識が遠のいていく。だが不思議なことに、最後のときに思い浮かんだ人物は愛する人ではない。妹のシイナだった。
自分が死ぬことによって、シイナにはラヴィリンス家の呪縛を科すことになるだろう。
魔族と契約を結び、代償を支払い、占師となって生きてゆかなければならない。妹には自分と同じ苦しみを味わってほしくなかった。それだけが心残りだった。
やがて、ノインは抵抗することを止める。一つの生命が失われる瞬間だった。

※

「――あの晩、ノインは吾の許へ姿を見せんかった。ロギスタニア王家の占師をしておることは知っておったからの、ロギスタニア城に忍び込み、ノインの姿を捜してみると、狭い部屋の中で肩を落としておったわ。その翌日、その部屋で自殺してもうた……」

墓の前で両手をついたまま、リュウオは粛々と過去に何があったのかを語った。

語るのも辛いと言いたげな表情で、けれどもシイナには真実を知る権利がある。苦悶に満ちながらも一つずつ話していく。

「吾が知っておるのは、これが全てじゃ」

リュウオ自身にも知らないことは多々あった。ノインにはおかしな言動や行動が目立つときもあったが、それを見抜くだけの術をリュウオは持たなかった。だからこそシイナから真実を伝えられるまで、死因が自殺であることを疑いもしなかったのだ。

「シイナよ、吾が憎いか……？」

辛いのはリュウオだけではない。それはシイナ自身にも当て嵌まる。姉が殺されてしまったのだから当然といえよう。

「汝の許からノインを奪い、挙句には見殺しにした吾のことが憎うて仕方がないか？」

墓石に刻まれたノイン＝ラヴィリンスの名に唇を噛み締め、リュウオの話が終わるのを待ち続けていたシイナの身体は、心なしか震えているようだった。

哀しいのだろう。シイナとリュウオが知りえていた真実を重ね合わせれば、また新たな真実が浮かび上がってきた。それをまた知ってしまうことにより、シイナは胸が苦しくなっていく。

そんなシイナの姿を見かねたのか、リュウオは墓の前で手を組むのを止めると、そっとシイナの手を握った。

「占師シイナ＝ラヴィリンスよ……、その怒りを、苦しみを、そし

て哀しみを我慢しとうないと申すなら、吾はこの命を汝に捧げようぞ……」
殺したいのなら、殺せばいい。
悪魔のようでいて、天使であるかのような囁きに、シイナは肩を揺らした。
「吾の命を散らすことで、汝の哀しみに溺れるその心が少しでも和らぐのであれば、それも全て受け入れるだけの覚悟を持っておるからにの……」
もう片方の手が、シイナの手に触れる。だがその手には刃の反った鋼色に染まる短剣が携えられていた。それをシイナの手に握らせると、狙いどころを間違えないように、剣先を心の臓の前へと導いた。
ロギスタニア大陸の魔を統べる王が、一人の占師の手によって、その命を断とうとしている。
他者からしてみれば、それは異様な光景であるといえよう。しかしながら二人の姿をその眼に捉える者は誰一人として存在しない。此処に入室を許可された者はシイナが初めてなのだ。
「さあ……、吾を殺せ」
ノインの実妹の手にかかって死ぬことができれば、この胸の疼きもきっと治まるはずだ。
リュウオはそのように考えていた。――だが、
「――毎夜、姉はわたしに内緒で何処かへ出掛けていたわけですが……、その謎が、今ようやく解けました」
その手に掴んだ短剣を一突きするのではなく、あろうことかシイナは、剣先を引いてみせる。
驚きを隠せないのはリュウオだ。
「……吾を、殺さぬと申すか」
その言葉にシイナは首を振って否定する。
「わたしが視た貴方の死期は、今ではありません。わたしは故意に運命を変えるようなことは絶対にしません」

あえて、シイナは殺さない。此処でリュウオを殺してしまえば、自身の命も絶たれることになるだろう。そうなってしまえば、ノインの敵を討つことも果たせなくなる。それにリュウオの命を奪うようなことは、ノインが絶対に許してはくれないはずだ。

いずれ死期を迎えるであろうことは理解しているが、その日が来るまでは、同じ哀しみを胸のうちに隠した者同士として力を合わせていこう。シイナはそれこそが、ノインに対する罪滅ぼしであると考えた。

「……吾を赦すのか」

そしてなにより一番大切なのは、シイナ自身の気持ちだ。二人の関係を知り、互いの想いを知ってしまったことで、シイナにはどうしてもリュウオという存在が身近に感じられてしまい、殺さなければならないほどの人物であるとは考えられなくなっていた。

「姉は貴方と出逢うことができて、とても幸せだったに違いありません。……リュウオ、わたしの姉に幸せを与えてくれて、ありがとうございました。心より感謝を申し上げます」

気の迷いなどではない。それが自身の出した答えであるならば、最後までそれを貫き通してみよう。魔を統べる王を殺すことよりも、シイナは自身の感情を優先させることに決めた。

「汝は優しすぎる」

「優しいのではありません。わがままなだけですよ」

柔らかな笑みを浮かべてみせるシイナの姿は、リュウオの心を動かしていく。

ノインが何者かの手によって殺されたというのであれば、必ずその報いを受けさせてみせよう。それでもなお、シイナの感情が晴れることがなければ、そのときは自ら死を受け入れよう。

それがノインを見殺した自分に対する枷だ。

「シイナよ、汝が視た不確かな未来を、吾は叶えてみせることを誓(ちか)うたもうぞ……」

この日、リュウオは生涯二度目の誓いを口にした。

一つ目の誓いは、ノインの願いを叶えるために。
そして二つ目の誓いは、シイナが視通した行く末を確かなものへとするために。
もう一度、墓石の前で手を合わせて眼を閉じる。ノインへの懺悔を終えた後、リュウオはシイナの手を取り、この場所を後にするのだった。

【4－1】

玉座の間には、四つの扉が用意されている。
広間へと通じる扉、ノインの墓石が立てられた部屋に通じる扉、リュウオの寝室へと通じる扉、そして最後は地下牢へと通じる扉の四つだ。玉座の間から地下牢へと通じる扉が用意されているのは、人間からしてみれば異常な造りであるといえよう。
だが、魔族は人間とは根本的なところからして異なっている。地位や名声によって支配するのではなく、魔力を持ってして支配することが可能だ。それ故、魔を統べる王が座する場所を通り抜けてまで脱獄しようなどと考える魔族はいない。地下牢の造りとしては正に打ってつけともいえるだろう。
しかしながら今現在、地下牢に閉じ込められている者は存在しない。ロギスタニア大陸に巣食う魔族において、リュウオの存在は絶対的なものであり、反意を抱こうと考える愚かな魔族は皆無だ。同時に、人間たちからは逆さまの王として恐れられる存在であったので、昔ならいざ知らず現在では歯向かう者もいない。
無論のこと、リュウオはまだデザイヤが偽りの王を仕立て上げ、自身の首を獲ったと吹聴していることに気づいてはいないのだが、それもリュウオにとっては些細な問題であろう。
「さて、汝は何か欲しいものはあるか」
リュウオの寝室へと通されたシイナは、王室にあったものと比べても差異のない、ふかふかのベッドに腰を掛けている。幅も広く、一人で寝るには大きすぎると感じた。
「欲しいものですか」
「うむ、眼が見えぬというのは何かと不便じゃろうからのぅ」
光の無い暗闇の世界に生きるシイナの身を案じているのだろう。
シイナはその言葉に嬉しさを感じた。
「……では、杖が欲しいです」

「杖じゃと？」
「はい。此処がどのような場所なのかわたしには知る術がありませんが、杖があれば音を鳴らし耳に情報を伝えることによって、ほんの少しですが周囲を把握することも可能ですから」
視力を失った結果、シイナの聴力は通常よりも遥かに聞こえが良くなっている。その点を考慮してみても、確かに杖があれば役に立つかもしれない。
「暫し待っておれ、なにか手ごろなものを探してみる」
寝室には、色んなものが無造作に並べられていた。それは過去に手にした戦利品の数々だ。
人間を相手にしたものだけでなく、魔族との戦いによって手中に収めたものも多々ある。
「さあて、どれにすればよいものかのぅ……」
頭を悩ませつつ、戦利品をそこら中に散らかしていく。
「あの……、別に無理に探さなくても……」
豪快な音を立てながら杖を探すリュウオに不安を覚えたのか、シイナは声をかけてみる。
しかしリュウオは探すのを止めずに、あっという間に部屋を汚くしていく。
「ああぁ、わたしが杖を欲しいと言ったばかりに……」
申し訳なさそうに溜息を吐き、シイナはリュウオの姿があるであろう場所を見つめる。
やがて、リュウオはお目当てのものを探し出した。
「これでどうじゃ、シイナよ。手ごろな杖が無(の)うたからに、暫くはそれで我慢すると助かる」
リュウオから手渡されたものを触ってみる。持ち手から先端部まで、しっかりと。
「……変な形ですね」
「当然じゃ、杖とは名ばかりの木の枝じゃからの」
くくっと喉を鳴らし、リュウオは笑みを零した。

「でも、その割には触り心地がいいみたいですが……」
「汝が持っておる木の枝はの、元々は吾が持つための杖を作る目的で用意したものじゃ。まあそれも今に至るまで忘れとうたわけじゃが……、吾の魔力を込めておる故、持っておれば他の大陸の魔族も汝にはそう簡単には手出しできんじゃろうて」
不器用なりにシイナを大事にしていることは、言葉を聞かずとも理解できる。
シイナは眼を瞑り、その感情をじっくりと味わった。
「リュウオ」
その名を呼んだ。
名を呼ばれた人物は、眉を上げてシイナの顔を覗きこむ。
「ありがとう」
「ん、……ああ、うむ」
感謝の意を込めて、シイナは微笑んでみせた。
リュウオは喉を詰まらせたのか、返事をした直後に咳き込んでしまった。
ベッドから立ち上がり、木の枝を突いて寝室を歩き回る。先ほど散らかした戦利品が障害物となり、外を歩く予行練習としては都合がいい。
壁にぶつからないように、足を躓かないように、一歩ずつ歩を進める。その様をリュウオは心配そうに見守った。
「木の枝では呼びづらいですね」
「ん、……まあ、そうじゃな」
確かに、いつまでも木の枝と呼ぶわけにもいかないだろう。持ち主に相応しい名を考える必要がありそうだ。
「逆さまの杖と名づけてもいいですか？」
「……ほう、逆さまの杖か」
どのような名をつけようかと思考する間も与えず、シイナが杖の名を口にした。
「貴方から頂いた大切な杖ですから、この名が一番相応しいと思い

まして」
「では、今この瞬間をもって命名しようぞ。その杖の名は、逆さまの杖じゃ」
その名をつけることを許されたシイナは、嬉しそうに口元を緩める。
それから暫しの間、逆さまの杖を手に馴染ませる。寝室の端から端を三往復した後、先端部でリュウオの足を突いて確認すると、目の前で立ち止まり、空いた方の手を差し伸べた。
「リュウオ、貴方のお城を案内して下さいますか」
「よかろうて。さあ、共に来るがよい」
長年連れ添った夫婦のように、二人はゆったりとした足取りで城内を歩いていく。
途中、眼は見えなくとも声を聞かせようと、リュウオは多くの魔族をシイナに紹介した。
魔族とは思えないほどに好意的に接しているようだが、それも全てはリュウオに絶大なる忠誠を誓っている故といえよう。トルエカがそうしていたように、他の魔族もまた、リュウオと同等の存在としてシイナに接した。
「このお城には、どのくらいの数の魔族の方がいるのですか」
「数えたことはないのぅ、呼んでもおらぬ者たちが次々と住み着いてくるからに」
城内はともかくとして、城の外にいた魔族の群は、耳に届く声を頼ってみても正確な数は計り知れない。けれどもその数はゆうに五桁を超えているであろうことは想像するに容易かった。
眼が見えていたとすれば、シイナは古城に着いた瞬間に我を忘れていたに違いない。そう考えてみると、誰の助けも借りずにたった一人で三里離れた古城を訪ねたノインは、尊敬するに値する。自身の行く末を視通していたのだから、その行為は決して無謀ではなかったはずだ。
「今宵限りでは城の隅々まで歩いて回ることは不可能じゃろうな、

きりのよいところで切り上げて寝室へと戻ろうかの」
一時を掛けて城内を歩いた二人だが、その実で十分の一すらも見てはいない。眼の見えないシイナが古城の大きさを知ることはないが、少なくともロギスタニア城の三倍はあろう面積を誇っている。
シイナは眼が見えないのだから、ただでさえ歩くのに時間がかかる。一日中歩いたとしても全てを把握するのは難しいだろう。
「とりあえずですが、今宵わたしの足で実際に歩いてみた場所や部屋、扉の位置など、それらの配置に関しては頭に記憶しました」
「……なんと、汝は耳だけじゃのうて記憶力もよいのか」
流石に予想外であったのか、リュウオは驚きに眼を見開いた。
魔契約者となるために視力を失いはしたが、その代わりに得たものは魔力だけではなかったようだ。聴力と記憶力、この二つがシイナに不安や恐れを忘れさせてくれる。
「歩き方も人それぞれですから、一度でも記憶に刷り込んでおけば、それが誰なのか当てることもできますよ」
「そりゃ驚いたのぅ……」
驚愕するリュウオと共に、二人は玉座の間を通って寝室へと戻ってきた。
椅子の置かれていた場所を覚えていたのか、シイナは杖を突いて確認し、そっと腰を下ろす。
「身を清めとうなったときは、この部屋を使うがよい」
寝室から直接湯殿へと足を運べるようになっているらしい。
戦利品の山に行く手を遮られた扉を手の甲で叩きながら、リュウオは説明する。
「……ああ、そういえば汝は眼が見えんのじゃったな、では吾が湯浴みを手伝(てつど)うてやらねばならんかのぅ」
「魔族にもえっちな方がいるのですね」
冗談混じりの科白を投げ掛けるリュウオに、シイナは平坦な口調で返事をする。だが、
「では、そのときはわたしの眼となることをお願い申し上げます」

「ぬっ」
思わぬ返答を受け、リュウオは肩を揺らして反応した。
その姿を見ることはできないが、動揺を感じ取れただけでもシイナは満足だったようだ。
「冗談です、本気にしないで下さい」
くすり、と笑みを零して眼を細めてみせた。
「それより一つ、お願いがあるのですが」
「な、なんじゃ」
冗談を冗談で返されたリュウオは、言葉に詰まりながらも耳を傾ける。
すると、シイナは少し恥ずかしそうに顔を俯けて、その言葉を口にした。
「わたしも、姉と同じように……空の旅をしてみたいです……」
眼が見えないシイナにとって、ノインと同じように空の旅を堪能し、上空より眺める景色をその瞳に映し出すことができない。それを知ってか、リュウオは苦悶に満ちた顔を作る。
「空を舞い、肌で風を感じることしかできぬぞ、それでもよいか」
「承知の上です」
それでも構わない、とシイナは頷いた。
「姉の話を聞き、リュウオに攫われてこの城まで空を舞ったときのことを思い出しました。あのときは王女の代わりとなっていることを気づかれないように必死でしたが、今は違います」
自分は、ノインでもなければヘレナでもない。ただの占師だ。リュウオにとって何の価値もない存在であろうことは理解している。けれども、占師になって以来、ずっと張り詰めていた心に安らぎを与えたい。
少しぐらい、わがままも言ってみたかった。
「もう一度……、今度はわたしを楽しませるために空を舞っていただけませんか」
しかしながら、シイナのわがままもリュウオにしてみればその通

りではない。
　ノインと共にしてみせたように、また同じように空を舞うことができる。その相手は、契りを交わすことを誓い合った愛しい人ではないが、リュウオは嬉しさに頬を緩ませた。
「……シイナよ、吾は汝を空の旅へと招待しようぞ」
　窓を開け、粉雪が降り注ぐ夜空を前に、シイナの手を取った。
　背中に手を回し、もう片方の手で足を抱え込む。その身体を優しく抱き上げた。
「今宵は冷えるでな、凍え死ぬ前に帰ろうぞ」
「ええ、そうしましょう」
　シイナの笑いを誘った後、二人は白銀の世界へと舞い始める。
　上へ上へと舞い上がり、雲に届こうかという高さまで辿り着く。見下ろしてみれば、一万を超す魔物が巣食う自慢の古城がちっぽけな存在に見えた。
「さて、汝は今、空を舞っておるわけじゃが……、感想を聞かせてもらえるかの」
「それはまだ言えません。もっと長く……貴方と一緒にいなければ、まだ……」
「……うぬ、心得た」
　地に足を刻めば、その地形を理解できよう。杖を用いれば、周囲の状況を把握することも可能だろう。だがしかし、空を舞っていては流石のシイナもお手上げだ。共に空の旅を満喫するリュウオに、その身を任せるしかない。腰に回した手をぎゅっと握り締め、落ちないように身を強張らせている。
　その様子がおかしかったのか、リュウオは耳元でそっと囁く。
「心配せずともよい、汝と共に空を舞うのはいったい誰じゃと思うとる」
　緊張を解き、安らぎを与える言葉を口にする。
「吾は魔を統べる王にして、人からはこう呼ばれておる。？逆さまの王？とな……。その意味が理解できぬほど間抜けではなかろうが」

「……その言い方が、既にわたしを馬鹿にしています」
徐々にではあるが、シイナは身体に込めた力を緩めていく。
重力を自在に操ることが可能な逆さまの王と共にいるのだ。そう考えてみれば、シイナは何一つとして不安を感じる必要はない。
「うむ、汝はそれでよい。空の旅を心ゆくまで堪能してみせよ」
リュウオなりの心遣いだったのだろう。
恥ずかしさを紛らわすかのように、シイナは温かなその胸に顔を埋めてしまった。だがそれもほんの僅かな間の出来事で、リュウオの顔を上目遣いに見つめると、頬を朱色に染めたままゆっくりと頷いてみせる。
「上空からの眺めは格別じゃ。見えはせぬが、汝も肌で感じようぞ」
空気の流れに抵抗し、風を切る様は爽快な気分だった。
一生に一度は空を飛んでみたいと考えるのが人間だが、シイナは今その願いを叶えている。
「夢みたいですね、この感覚は……」
「夢ではのうて、これが現実じゃよ」
三里離れた場所にさえ、あっという間に辿り着く。そこはシイナにとって見覚えのある場所だ。リュウオ自身も例外ではない。幾度か足を運んだことがある。
空を舞い、二人が羽を休めようと決めた場所は、ロギスタニア城のとある一室だ。
窓には鍵がかかっていたが、リュウオは片手を翳してみせると、重力を操り室内から鍵を回し始める。人間ならざる魔力を持ってすれば、まるで不可能は存在しないとでも思い込んでしまいそうだ。
窓を開けると、縁に足をつき、頭を打たないように屈んだ。

【4－2】

「此処は何処ですか」
「汝の姉、ノインの仕事場じゃったところじゃて」
重力に逆らうのを止めると、二人の身体に重みが戻ってくる。シイナにはそれが不思議な感覚に思えた。だがそんなことは今はどうでもいいと言いたげに、リュウオの顔に視線を向けたまま眉をしかめる。
「なんじゃ、別のところがよかったかの」
「そうではありません」
気づいていない。シイナが言いたいことにリュウオは気づいてすらいない。
それが情けなくて、思わず溜息が漏れる。
「リュウオ……、大胆不敵とは正に貴方のことを言うのでしょうね」
堂々と敵地に足を踏み入れる辺り、リュウオの性格が存分に出ているといえよう。
「褒め言葉と受け取ってもよいのかの」
「警戒心がなさすぎると言っているのです。貴方は逆さまの王なのですよ、命を狙われてもおかしくはありません。人間は無力ですが、時に恐ろしいほどの知略を巡らせます。それは貴方の命を奪い取ることさえ可能とするでしょう。ですから――」
「やれ、説教くさいのは耳に毒じゃ」
真面目な顔で忠告するシイナを前に、リュウオは耳を塞ぐ素振りをしてみせる。
その仕草を確認することはできないが、シイナにはリュウオが何をしているのか見えずとも理解できてしまった。
「貴方は、そんなに死に急ぎたいのですか……」
「そのような事態に陥れば、むしろ汝にしてみれば願ってもないことではないのかの」

確かにシイナは、リュウオの死期をその眼で見届けると誓った。けれどもそれとこれとは話が違う。シイナは下唇を緩く噛み締め、リュウオを睨みつけた。
「もっと、命を大切にして下さい……。姉にとって貴方という存在は、自身の命よりも重く大切なものだったのですから……っ」
瞳を潤ませ、心から訴える。
その表情がリュウオの眼にどのように映ったのかは定かではない。しかしながら一時の静寂と深い溜息を吐く機会を与えることには成功したようだ。
「……不安か、シイナよ」
真っ暗な部屋の中で、リュウオはその身体を抱き寄せる。
「ノインと同じように、吾が死ぬのが怖いか」
死を見届けなければならない存在であったリュウオは、人々からは逆さまの王と呼ばれ恐れられている。けれどもシイナは、真実を知ってしまった。必ずしも魔族が相対するべき存在ではないことをノインから教えてもらった。自殺に見せかけて人を殺してしまうような人間のほうが、よっぽど心の汚い生き物のように感じてしまった。
だからこそ、言葉として伝えたくなったのだろう。これが原因となり、未来が変わってしまおうとも、その想いを我慢できはしなかった。
「安心せぃ、吾は魔を統べる王じゃ、そう容易く死にはせんよ……」
緩やかなときを刻み、その心を落ち着かせていく。もう、シイナは大丈夫なようだ。
「……すみません、取り乱してしまって」
手の甲で目元を拭い、少し恥ずかしそうに微笑む。
「構わぬよ、吾を想ってのことじゃからのぅ」
口元を緩ませ、リュウオはからかう目的を持って言葉を返してみた。
だがシイナは怒って頬を膨らませたりはしない。逆に、視線を合

わせるのを躊躇うかのように、そっぽを向いてしまった。
「な、なんだか……、不思議な気持ちで胸がいっぱいになっています。……あの、いったいわたしはどうしたというのでしょうか……」
シイナには、その感情が何を意味しているのか理解できなかった。
そして、リュウオはそれが何なのかを教えるつもりもなかった。
「気にするでないさ、それは誰もが経験しよう一時の気の迷いじゃからの……」
だから、忘れてしまえ。
これ以上深みに嵌ってしまえば、姉と同じ過ちを犯すことになるだろう。同じ哀しみを刻ませることになるだろう。それだけは絶対にあってはならない。
リュウオはその心を見せるようなことはしなかった。
「此処には、姉に連れられて何度か来たことがあります」
闇夜に紛れ忍び込んでいるということもあって、なるべく大きな音を立てないように気をつけながら、逆さまの杖を突いて室内を歩いて回る。
元々眼が見えないシイナからしてみれば、灯りがなかろうが同じことだった。
「……姉は、本を読むのが好きでした」
本棚の前に立ち、手で触れる。埃を被った沢山の本が、そこには並べられている。
ノインがこの世を去って以来、この部屋には誰一人として入室を許可されなかった。人が死に、更にはその亡骸までもが姿を消してしまい、この部屋には魔族の呪いがかけられていると噂になったからだ。
それまでは表舞台に出ることのなかったラヴィリンス家が、ノインの死を切っ掛けに魔族との関係を暴かれていった。
ロギスタニア王家が占師を仕えさせ、常に行く末を視通していたことが明らかになり、国民による王族への不信感は次第に高まっていった。そこでロギスタニア王家が取った行動は、代々王族に仕え

続けてきたラヴィリンス家に対する裏切りであった。
「けれども今はもう、ここにはいません。わたしは一人ぼっちになってしまいました……」
魔契約者たる存在になるため、魔族との契約を結んできたラヴィリンス家の人間は、ロギスタニア王家の命により死刑を宣告された。それはシイナも例外ではない。
ロギスタニア王家に裏切られてしまえば、ラヴィリンス家は死んだも同然だ。
それならば、と両親はノインの後を追うかのように自らの手によって死ぬことを選択した。
死に切れなかったのはシイナだ。幸せの絶頂にいたはずのノインが何故、自殺をしなければならないのか。真実を確かめたかったシイナは、死を先延ばしする決意をした。
表面上は国民の支持を回復するために死刑を宣告したが、やはりロギスタニア王家の人間は占師とは切っても切り離せない関係にある。今更占師に頼らざることはできないのだ。
占師となり、これから先も王族に仕えることを条件に、シイナはその身柄を匿わせた。
国王と女王、そしてヘレナの三人を除いて、シイナの存在を知る者はいない。世間的には既に死人となったシイナは、それからずっと待ち続ける。真実を知るそのときが訪れる日まで。
「ラヴィリンス家の人間は、呪われているのかもしれませんね」
ぽつりと呟く。過去を思い出してしまったのだろう。
シイナは眼を瞑り、同じ暗闇の空間へと視界を閉ざした。だがそれを許さない存在が、今は傍にいる。魔を統べる王、リュウオ＝リヴァースだ。
「汝の耳は飾りか？　眼は見えずとも、汝の耳には吾の声が届いておろうぞ」
その声が、その旋律が、シイナの心を開いていく。
出逢ってまだ間もないというのに、その想いは勢いを止めること

なく膨れ上がる。
「シイナよ、汝は一人ではない……。汝の傍には、吾がついておる……」
死期が訪れるまで、絶対に一人ぼっちにはさせない。
シイナにそれを伝えることなく、リュウオは胸のうちに誓った。
「……ありがとう、リュウオ」
今までと同じように、感謝の言葉を口にする。しかしその科白には、少しばかしの変化が見られた。時を重ねることによってリュウオとノインが辿り着いたように、シイナは堅苦しい喋り方を止めて、その想いを言葉にしたのだ。
「そういえば、まだ貴方に聞いていなかったことがあります」
言葉遣いはすぐに元通りとなる。しかし先ほどの科白の変化にリュウオは気づいていた。
真っ暗な闇に怯まず目的となるところまで歩き、木机の上に腰を下ろす。
「はて、まだ話しとらんことがあったかのぅ」
リュウオは首を傾げてみせた。その反応から察するに、思い当たることはないらしい。
「姉の亡骸を攫った理由です」
「……ん、ああ……、そのことじゃったか」
確かにそれはまだ話していなかった。
ただ単純に、自分の手で埋葬したかったのだろうか。ノインを傍に置いておきたかったのだろうか。シイナは色んなことを考えてしまう。
「ノインがの、言っておったのじゃ」
上を向き、光の無い天井を見つめながら言葉を続ける。
「わたしに会いに来る人が、きっといるから……、とな?」
死してなお、ノインの墓を訪れる者、それが誰なのか初めのうちは分からなかった。
今宵、ようやくその人物が姿を現した。

「今思えばそれは、汝のことを言うておったのじゃろうな」
自分が死んだ後、シイナが占師となり、やがてリュウオと出逢うであろう未来を視ていたのだろう。死ぬ直前までシイナのことを心配していたというわけだ。
「そうだったのですか……」
暗闇に立ち尽くし、ノインがその生涯を終えた場所でシイナは黙祷を捧げる。
ノインは殺されてしまった。リュウオと共に幸せになることはできなかった。
しかしそれでもノインは幸せを感じていたに違いない。実妹のシイナには、それが何となくではあるが理解できた。
「……じゃがのぅ、ノインの亡骸を攫(さろ)うたのにはもう一つ理由(わけ)があるでな」
「もう一つですか」
まだ何かあるのか、とシイナは視線を向ける。
その様子を確認し、リュウオは躊躇うことなく口を開いた。
「ノインを、蘇らせるつもりじゃ」
「な……っ」
今ならば、その考えを口にしても大丈夫だと思っていたのだろう。けれどもその言葉は、シイナを絶句させるには十分な威力を持っていた。
「そ、それはいったい……どのような意味で言っているのですか」
聞き間違いかと思った。
だがそれは間違いなどではなかった。
「言葉の通りじゃよ、死者を蘇らせ、もう一度生命を与えると言うておる」
黒に染まるリュウオの瞳が、闇と同化する。
その科白と相まって、シイナには異常な存在のように感じられた。
「正気ですか……、死者が蘇るなど、そのようなたわ言を本気で口にしているのですか？」

眉をしかめ、シイナはリュウオに問い訊ねる。
「魔族にはの、多種多様な魔力を扱える者がおるわけじゃが、中には死者を蘇らせることを可能とする者もおるはずじゃ。そやつを捜し出し見つけ、そしてノインの亡骸が吾の許にあれば、必ずやまた再会することができるじゃろうて……」
「妄想です。そんな魔力を持った魔族などいません」
そのようなことは不可能であると、シイナはきっぱりと否定する。
その態度が気に食わなかったのか、リュウオは憤然と立ち上がり、シイナの肩を掴んだ。
「それこそたわ言じゃ、誰が死者は蘇らんと証明したかっ」
人目を忍んできたのを忘れたのか、リュウオは声を荒げて反論する。
それでもシイナは意見を曲げない。それが大きな間違いであることを知っているから。
「わたしの姉は……、貴方の恋人は……死にました。もう二度と、わたしや貴方の前に姿を見せることはできません」
「ふざけるでないっ、それも汝お得意の占術によって視たとでも申すかっ」
「視る必要などありません。どれほど優れた魔力を持つ魔族がいたとしても、人の生き死にを自在に操れる存在などいるはずがないのです」
もし仮に、死者を蘇らせることが可能だとすれば、それは神に他ならない。
そして残念なことに、リュウオは神ではない。ただの魔族だ。
怒りによって頭に血が上っているようだが、この場にシイナを置き去りにするようなことはなく、ただ見せ付けるかのように魔力を解放し続けた。怒りをぶちまけられる相手がいないことに、更にリュウオは腹を立てる。
そんなリュウオを見やり、シイナは止めとなる言葉を呟いた。
「貴方の恋人は、蘇ることなど望んでいないと思います。……リュ

ウオ、それは貴方自身がよく理解しているはずではないのですか？」
「ぐっ、……っ」
顔を上下し、左右に振り、両こぶしをきつく握り締め、自身を落ち着かせていく。
「そんなことは、言われんでも……理解しておるわ」
そう、リュウオは自分が馬鹿げた妄想を語っていることを自覚していた。
それでもなお、ノインが死んでしまったという事実を受け入れたくなかったリュウオは、ありえない存在を夢見ることにしたのだ。
「吾にとって、それは……、ただのわがままなんじゃ……っ」
契約を結ぶことはおろか、契りを交わすこともなく、永久の別れとなった。
それがただ哀しくて、リュウオは馬鹿な夢を見ようとしていたのだ。
「……リュウオ、貴方も……魔族でも涙を流すことができるのですね」
頬を伝い、涙の滴が闇に溶け落ちていく。
そっと、シイナは手を差し伸べる。魔を統べる王の涙が、その指に温かみを感じさせた。
「泣いてなどおらぬ。何も見えぬくせに……」
「確かに、わたしには貴方の顔が見えません。心も見えません。その仕草を見ることもできません。……でも、行く末を視通すことはできます」
片手だけでなく、両手でリュウオの顔を包み込む。
その感触を確かめると、優しく抱きしめた。
「泣きたいときは、泣いてもいいのですよ……」
その言葉が合図となり、リュウオは大粒の涙を零し続けるのだった。

【4－3】

「姉と同じように、妹の方も殺さなければ……だが、」
リュウオとシイナが空を舞い、ノインの仕事場に忍び込んだ時を同じくして、意外にもデザイヤは二人の近くにいた。
「まさか……あんなことになるとは」
デザイヤが今いる場所、それはロギスタニア城の一室だ。逆さまの王の首を獲った英雄として、城の一室を譲り受けたのだ。
だが、デザイヤは焦っていた。
ノインを殺してしまったことで、野心を知る者は誰一人としていなくなったはずが、思いもよらぬところで計画を台無しにしてくれる。実妹のシイナは死刑となったはずが、姉と同じように占師となり、挙句には王家に仕えていたのだ。
更にはシイナに未来を視られてしまい、逆さまの王に連れ去られてしまうという不測の事態に陥った。何故こうも次から次へと計画に狂いが生じるのだろうか。頭を抱えたくなる。
「死刑にさえなっていればこんなことには……くそっ」
すぐにシイナを始末しようと考えたが、それも逆さまの王の襲撃に遭い、阻まれてしまった。
「人間とは実に間抜けな生き物だな」
思考を巡らせるデザイヤを嘲笑するかのように、ぼそりと呟く者がいた。
この部屋には、デザイヤの他にもう一人存在していた。
「くぅ、うるさい奴だな……、元々はお前が俺に契約を結ぶように唆したのが原因だろうが」
その人物と向き合い、デザイヤは文句をぶつける。
「唆しただと？　……ふん、それは大きな間違いだ。お前が自分の意志を持って私と契約を結んだのだ。責任を押し付けている暇があるなら、無い知恵を回してみたらどうなのだ」

「魔族の分際でよくもそんな科白を……。俺は逆さまの王の首を獲った英雄だぞ？　神に選ばれし人間なんだよ。偉そうな口を聞くな」
「偽りの王の首を獲った偽りの英雄風情が粋がってみたくなったのか？　私がほんの少しばかし腕に力を込めるだけで、お前の首をへし折ることは容易だということを忘れるなよ」
指の骨を鳴らし、恐怖を与え支配する。
それ以上、デザイヤは何も言い返すことはできなくなった。
「……ううっ、ならばどうすればいい？　知略の限りを尽くすお前なら、何か良い案が思い浮かんでるんじゃないのか？」
ノインが死に、仮にヘレナの行く末が変わったのだとすれば、シイナには野心を悟られているわけではないだろう。それはシイナの態度が教えてくれた。自分のことを疑ってはいるものの、確信までは得ていないに違いない。
しかしながら窮地に立たされていることに変わりはない。
偽りの王の首を獲って英雄となり、地位や名声、そして一国の王女までも手に入れたわけだが、シイナがその全てを逆さまの王に吐露すればどうなるだろうか。
逆さまの王は、魔を統べる王だ。殺されてもおかしくはない。
「デザイヤ＝イスナーク、それは至って簡単なことだ」
恐怖に駆られ、肩を震わすデザイヤに、その人物はまるで壊れた玩具を見るかのような目つきで唇を動かしていく。
「お前が、逆さまの王を殺せばいい……。そして本物の英雄になればいいだけなのだ……」
「……お、俺が、本物の英雄に？」
果たして、なれるのだろうか。
自分は偽りの王の首ではなく、逆さまの王の首を獲ることができるのだろうか。
ドクンッ、と心臓が脈を打つ。鼓動が徐々に高鳴っていく。
「何も悩むことはない。お前はただ待ち伏せすればいいだけだ。舞台は整い始めているし、仕掛けは既に施した。後はそれが巧い具合

に機能するのを待てばいい」
自分の知らぬところで、先を見すえた行動を起こしていたらしい。
やはりこの人物は油断がならないと感じた。
「俺は人間じゃない、魔契約者なんだ……。魔族だって殺せるはずだ……」
言い聞かせるように何度もその科白を繰り返す。自身に暗示をかけているようにも見えた。
デザイヤは長剣を背に携え、ゆっくりと息を整える。
もはや、逆さまの王の首を獲る道以外は残されていない。この人物と契約を結んだ瞬間から、こうなる運命にあったのだと納得させる。
「私から、お前への最後の助言を授けよう」
部屋を出ようとするデザイヤの背中に声をかけ、口元に笑みを張りつける。
「シイナ＝ラヴィリンスを利用しろ。あの娘を捕らえることができたなら、或いはお前にも勝機が残されているはずだからな」
手駒の最期を見届けるため、その人物は忠告する。
幸いなことに、デザイヤがノインを殺したという事実を、シイナはまだ知らない。占師は過去を視通すことができないからだ。
しかもそれだけではない。驚いたことに、シイナにはデザイヤが逆さまの王の首を獲る未来が視えたのだという。これが切っ掛けとなり、ヘレナには嘘が見抜かれてしまったが、それもシイナの視た未来に従いさえすれば真実へと姿を変えるだろう。
偽りの英雄から、本物の英雄になる、人生最大の好機だった。
「俺は英雄だ。この国の王になる男だ。絶対にしくじったりはしないさ……」
部屋の外に出る。一定の間隔を持って灯りの燈された殿廊を、足音を立てぬように歩いていく。階段を上り、城の中心部まで進むと、兵士が二人ほど直立不動の体勢で警備をしていた。
「こんな時間まで大変だな」

デザイヤに声をかけられ、その二人は顔の前に片手を持ってくることで反応する。不審者であるとは思われないほどの地位は確立していた。デザイヤが望めば、国王と女王の部屋以外であれば、何処にだろうと入室を許可される。それがたとえ王女の部屋であろうと例外は無い。

「ヘレナ、起きてるか」

扉をノックして、反応を確かめてみた。

暫く待つと、足音が近づいてくる。扉の鍵が開き、ヘレナが顔を覗かせた。

「……デザイヤ？　どうかしたの」

こんな夜更けに訪ねてくるとは思ってもいなかったのだろう。眠たそうにしながらも、ヘレナは驚きを口にする。

「俺はヘレナに謝らなければならないことがある。聞いてくれるか」

「え？　……ええ、いいけど」

眉根を潜め、手の甲で目蓋を擦る。

扉の前から退いて、寝室へと入るように促したが、デザイヤは首を振る。中には入らずに、今ここで話をするつもりのようだ。

「以前、ノインが視たもの……、そして昨晩、シイナが告げたこと……。逆さまの王が生きているのは真実だ」

罪を告白し、デザイヤは溜息を吐く。なるべく深く、それが演技であると悟られぬように。

「……ヘレナ、つまり俺はお前の気を惹きたくて、逆さまの王の首を獲ったなどと嘘を吐いてしまったんだ。……すまない、本当にすまない」

「デザイヤ……」

婚約者の名を呟いてはみたものの、いったいなんと声をかけてやればいいのか、ヘレナには考え付かなかった。

「――だが、もう一度だけ……名誉を挽回する機会を与えてはくれないだろうか」

言葉巧みに、予定した筋道を一つ一つこなしていく。

「俺は逆さまの王の首を獲りにゆくことを、今ここに宣言しよう。そして必ずやその首を獲り、嘘を真に変えてみせると誓おう。……だからそのときは、俺を認めてくれないか？」
偽りの笑みを浮かべてみせる。そうするだけで、この女は、一国の王女は、簡単に騙されてしまう。内心で、実に間抜けな女であると嘲った。
「ええ、分かったわ……。でも一つだけ約束して、絶対に死なないで戻ってくるのよ？」
思わず声を出して笑ってしまいそうになるが、限界のところでそれを我慢した。
「……ああ、約束する。きっとまた戻ってくるよ」
そしてそのときこそ、自分は真の英雄として生まれ変わるのだ。
そう考えると、デザイヤは興奮を抑えきれなくなった。
「ヘレナ＝ロギスタニア王女よ、今度こそ必ずや、逆さまの王の首を獲って参ります」
言葉を交わすデザイヤは堅苦しく宣言し、踵を返した。
シイナが視た未来によれば、逆さまの王はシイナを伴ってラヴィリンス家へと姿を現すらしい。デザイヤは、シイナを人質とすることで、逆さまの王の首を獲るのだという。俄かには信じがたい話だが、占師の視たものは絶対だ。今すぐにでも足を運ぶべきだろう。
それに何より、自分には魔族がついている。もしものときは手を借りればいい。
「待ってろよ、逆さまの王……、貴様の首を獲ってやる……っ」
真の英雄となるために意気込む間抜けな人間を、その人物は闇に紛れ観察する。
自身の持つ魔力の十分の一を与えてまで、果たさなければならなかった企みが、ようやく終わりを告げようとしている。デザイヤを手の平の上で踊らせるのも、これでお仕舞いだ。
「もうすぐ、全てが終息する……。そうすればまた、きっと……」
薄い笑みを浮かべたまま、終焉を見届けるかのように忽然と姿を

消すのだった。

【5－1】

翌朝、シイナは目を覚ますと、ふかふかのベッドの上にいた。
空の旅を満喫し、古城へと戻ってきたシイナは、夢の世界に片足を踏み入れていた。よく憶えていないが、完全に眠りに落ちてしまう前に、リュウオが何事かを言っていたような気がする。なんと言われていたのだろうか。
「……うぅ、思い出せません」
眠気を覚ますように背伸びをし、まだ働かない頭に鞭を打って思考を巡らせる。
そんなシイナの許に、すぐ傍から声がかかった。
「なんじゃ、もう目が覚めたのか」
その声が耳に届き、シイナは今までにないほど肩を揺らして驚いた。
リュウオがいる方に視線を向ける。
「わたしは、……いえ、貴方はいつからそこにいたのですか」
「ずっとじゃ、汝が寝ておる間、その横で寝顔を見ておった」
途端に、シイナの顔が赤くなる。それはもう見事に、真っ赤に染まっているではないか。
唇を震わせて、何か言いたげな様子だが、それも言葉にならないほどに恥ずかしいのだろう。
「な、なんということを……」
「吾と共に寝るのは、そんなに嫌じゃったのか？」
一段階、声の音を下げ、シイナに問い訊ねてみる。
するとシイナは首を大きく振って否定した。
「……ち、がいます。そうではありません。ですが……、その、なんというか……っ」
頭の混乱は、まだ収まりそうにない。
シイナは思わぬ爆弾を投げつけられ、返答に困り果ててしまう。

そんな状態に陥らせた張本人は、なんでもないことのように大きな欠伸を一つ吐いた。
「さあて、吾はこれから行かなければならぬ場所があるでな、汝には留守番を頼もうぞ」
「え、どちらに行かれるのですか」
話の種を変えられ、ぼうっとした頭を冷やしながらもベッドから起き上がると、身支度を整え始めるリュウオの背中に訊ねてみた。
「エルバストロス大陸じゃ」
ロギスタニア大陸から見て、東に位置する大陸の名を口にする。だが何故、今からエルバストロス大陸に向かわなければならないだろうか。
その疑問を晴らすかのように、リュウオは更に言葉を続けた。
「東の魔を統べる王に、会いに行こうと思うてな……」
「……ミロクに、ですか？」
東の大陸――エルバストロスを支配下に置くのは、ミロクという名の魔族だ。
他の大陸には干渉しないのが暗黙とされているはずだが、リュウオはいったい何を仕出かそうと考えているのか。
「そうじゃ、汝の契約を破棄させようと思うておる」
契約の破棄、とリュウオは言った。
人間が魔力を得るためには、魔族と契約を結んで魔契約者になるしか方法はない。
契約を結ぶことを決めた魔族が欲する代償を支払うことで、人間は一つを失い、そして一つの魔力を手に入れる。
人間と魔族、両者の合意が得られなければ、契約は成立しない。また、それとは別に、魔族から魔力を貰い受ける代わりに、代償の支払いを誓った血の契約書に、本人であることを証明するために血判を捧げなければならないのだ。
ノインはもとより、シイナもミロクとの契約を結んだとき、血の契約書に誓っていた。それを破棄させるために、リュウオはわざわ

ざ東の大陸まで出向くと言っているのだ。
「血の契約書を破棄すればの、汝はもう二度と他者の行く末を視ずにすむのじゃ」
ラヴィリンス家の呪縛から解き放たれるのは、それが叶った瞬間だ。
リュウオはシイナの今後を見据えた上で、そうすることに決めたらしい。しかし、
「……でも、魔力を失ってしまえば……今度こそ、わたしには何一つ残りません……」
魔力を手に入れるために支払った代償は、シイナの許に戻ってくることはない。
占師としての魔力を失い、枷から抜け出せたとしても、一生を暗闇の中で過ごしていかなければならないのだ。
身支度を終えたリュウオが後ろを振り向くと、シイナは俯いていた。魔力を失ってしまうことだけでなく、それから先に襲いくる不安を感じているのだろう。
「心配するでない、汝の傍についておるのは誰じゃと思うとるか」
優しげな眼でシイナの姿を捉え、リュウオはベッドに腰掛ける。
「汝に誓おう、吾が死を迎えるそのときまで、吾は絶対に汝を一人にはさせんとな」
死期は、意外にも早く訪れるかもしれない。
けれどもリュウオは、あえてそのことには触れなかった。そしてシイナもまた同じ気持ちだ。
「……だとすれば、貴方が言っていることには矛盾が生じます」
弱みを見せるのは止めよう。シイナは自身に言い聞かせると、リュウオの顔を見上げた。
「矛盾じゃと？　……なんじゃ、それは」
「わたしを一人にはさせないというのなら、一緒に連れて行って下さい」
何処に、とは言わなかった。言うまでもないのだから当然だ。

「……しかしのぅ」
顎を触り、思考を巡らせようと試みるリュウオの手を握り、シイナは真剣な眼を向ける。
「リュウオ、貴方が今から向かう場所は、わたしにも関係があります。貴方が頷いてくれるまで、わたしはこの手を離しません」
行く手を阻むのは、当事者である占師だ。
「ミロクは東の大陸の魔を統べる王じゃ、常に危険と隣り合わせじゃぞ」
「構いません。わたしは逆さまの王と一緒にいるのですよ？　今更怖いものなどありません」
そう言われ、リュウオは思わず口元を和らげた。ノインが殺されてしまい、両親がその後を追い、一人ぼっちになったシイナは占師となる義務を背負った。
だが、それでもシイナは前を向く。暗闇にもがき、光を探し出そうとしているではないか。
シイナを止めることなど、自分には不可能だ。リュウオはそう感じた。
「後悔しても知らぬぞ」
繋がれた手を引いて、シイナの身体を起こし上げる。
枕元に置かれてあった逆さまの杖を手渡した。
「強引な性格はノインにそっくりじゃの」
ぼそりと呟いた後で、リュウオはシイナの耳が良いことを思い出す。恐る恐るシイナの方に視線を向けてみると、嬉しそうに身支度する姿があった。聞かれてはいるものの、特に嫌味とはとられなかったらしい。一安心だ。
「お待たせしました」
顔を洗い、身なりを整え終えたシイナは、出掛けるのを楽しみにしているようだ。
「……ちと此処は狭すぎるからの、外に移動しようぞ」
シイナの手を取り、重力に逆らいつつ、窓から城の外へと舞い降

りる。
城壁内部の広場に足を着くと、ゆっくりとシイナの傍を離れていく。
「汝よ、その場から動くではないぞ。でなければ怪我をすることになるじゃろうて」
それはどういった意味なのか、シイナは問いかけようとした。
しかしその直後、リュウオが佇んでいるであろう辺りから、尋常では考えられないような魔力による圧迫を受けた。リュウオが、自身の持つ魔力を解放しているのだ。
やがて魔力の波は押し寄せるのを止める。息を吸い、そして吐くという行為すら躊躇われるほどの威圧感は集束する。その中心に存在するは、魔を統べる王だ。
「――シイナよ、汝には見えぬじゃろうが、吾は今、黒き竜の姿を成しておる。此れが、此の姿こそが、吾の本来の姿じゃ……」
耳の奥に、脳を直接揺さぶるかのような声の震えに、リュウオの存在を感じ取る。今に至るまで、頭では理解していたものの、疑いを向けずにはいられなかったのだろう。この人物が、本当に魔を統べる王なのか、と。
だが、それも杞憂に終わった。
「……眼が見えなくとも、貴方という存在を肌で感じ取っています」
驚いた。まさかこれほどのものとは思いもよらなかった。リュウオの人となりを既に知っているから平常心を保つことが可能だが、もしそうでない人間がここに居合わせたとすれば、恐怖に怯え失神してしまうことだろう。
魔を統べる王としてロギスタニア大陸の魔族に忠誠を誓わせるだけの、確固たるものを、やはりリュウオは内に秘めていたのだ。
「凄いです、本当に……」
そう、驚愕を隠すことができない。
だからこそシイナは、不思議でならなかった。
何故、これほどの存在感を見せ付けてくれる魔を統べる王が、た

だの人間でしかないデザイヤなどに、首を獲られてしまうのだろうか。
デザイヤに触れたとき、シイナは確かにそれを視た。占術によって行く末を視通したのだから間違いがあるはずはない。だとすれば、既に未来は変わってしまったのか。
「乗れ」
大きな爪を尖らせた右の手の甲を地面に当てる。
その音を聞いたシイナは、それ以上考えるのを止めることにした。
「はい」
逆さまの杖を突いてリュウオの手を確認し、そっと片足を上げる。
ふと、靴を履いたまま乗っていいのだろうかという考えが過ぎったが、指摘されてはいないのだから構うことはない。シイナはリュウオの手に足を乗せて踏み込み、逆さまの杖でバランスを取りながら全身を乗せた。
それを確認すると、シイナの身体を傷つけないように手の平を丸め、外側を埋めるように重力の壁を生み出す。こうすることで、シイナは風による抵抗を受けずにすむ。
「はしゃぎすぎて足を踏み外すでないぞ、よいな」
子ども扱いするリュウオの顔を見上げて、シイナは頬を膨らませる。
その反応を十分に楽しんだ後、リュウオは背に生えた巨大な両翼をはためかせ、重力を操ることなく宙に舞った。
それからの出来事は、正に瞬きすら躊躇われるものといえよう。
魔族の群に見送られ、天へと向けて羽ばたいたリュウオは、東へ向けて勢いよく飛び始める。
暫しの間、シイナは時が経つのを忘れ、昨夜とはまた異なる空の旅を満喫するのだった。

【5－2】

ロギスタニア大陸から、東のエルバストロス大陸へと向かった二人は、目的地となる湖を上空から視界に捉えると、徐々にその速度を落としていき、やがて羽を休めた。

「降りよ、着いたぞ」

「……此処が」

ぬかるんだ大地に逆さまの杖を突き、倒れないように足元に注意を施す。

「そう、此処がエルバストロス大陸の魔を統べる王――ミロクが根城としておる湖じゃ」

目の前に広がるのは巨大な湖だ。シイナを降ろした後、黒き竜から人型に姿を成したリュウオは、湖の反対側を視認する。恐らく人目では確認することは不可能だろうが、リュウオの瞳にはそれがしっかりと映っている。

「ふむ、囲まれておるのぅ」

降り立つ前から既に気づいてはいたが、二人の周囲を数え切れないほどの魔族が取り囲んでいた。森に身を潜め、いつでも襲いかかれるように準備をしているのだろう。

此処はリュウオが支配下に置く大陸ではない。たとえどのような持て成しを受けたとしても、文句は言えないのだ。

けれども、そこは魔を統べる王たる存在だけのことはある。リュウオの本来の姿をその眼で捉えた魔族の群は、一向に襲い掛かってくる気配がない。強大な魔力を持つ存在を前にして、恐れをなしているのだろう。

「……やれ、血気盛んな輩はおらんようじゃの」

肩を竦め、リュウオはシイナの手を握る。

一応、不測の事態に備えて周囲に気を配ってはいるが、それも要らぬ心配のようだ。

「地面が水分を含んでいるのですが、ひょっとして此処は湖か何かですか」
問い訊ねられ、リュウオは思い出す。
まだ、シイナに説明をしていないのを忘れていた。
「うぬ、その通りじゃ。ミロクは湖の中に城を構えておるでな、人にはそう簡単に気づくことはできんじゃろうて」
「湖の中に……」
リュウオの古城とは異なる造りをしている。
シイナはそれを眼で捉えることはできないが、湖の中に根城があると伝えられ、素朴な疑問が口に出てしまう。
「どうやって、入るのですか？」
「くくっ、もっともな質問じゃのぅ」
余所者が初めて此処を訪れたとき、まずは誰もがそう思うだろう。過去のリュウオも同じことを考えた。しかしそれも時期に解決する。
「答えは簡単じゃ、城の主たるミロクが許可を下さん限り、入ることは叶わんのじゃよ」
返答した後、リュウオはそのときがくるのを待った。
「……っ、この音はいったい……何が起こっているのですか」
その直後、突如として湖が二つに割れ、滝つぼのような道を作り上げた。
「ミロクの魔力により、大地が震え、道無きところに道を作うたのじゃ」
二人の前に用意された道は段上になっており、湖の奥底へと続いている。この世の闇を生み出しているかのような気配を感じさせ、シイナの足元を脅かす。その暗闇の中から、こつりこつりと足音が響いた。
足音の主が太陽の下に近づくにつれ、周囲に緊張が走るのを感じた。二人を取り囲んでいた魔族の群が一斉に片膝をつき、頭を垂れる姿勢を取った。仕えるべき存在が姿を現したのだ。
「――やあ、ようこそ。ロギスタニアを統べる王、リュウオ＝リヴ

ァースくん」
「昔と変わらんな、ミロク」
真っ暗な闇底から姿を現したのは、エルバストロス大陸の魔を統べる王――ミロクだ。
ミロクは、絶世とも呼べるほどに美しい女性の姿を成していた。
この人物こそがシイナやノイン、そしてラヴィリンス家の人間たちに占師としての呪縛を与えた張本人だった。
その姿を眼に映すことはできずとも、言葉をぶつけることや睨みつけることは可能だ。
ミロクの声が響いた場所を向いて、シイナはその想いを口にした。
「ミロクッ、貴方さえいなければ、わたしの家族は――」
「――死なずにすんだ、とでも言うつもりかい？　占師のお嬢さん」
言葉を遮られ、先に続く想いを口にされた。
思わず眼を見開くシイナの表情を見やり、ミロクはシニカルな笑みを浮かべてみせる。
「あのさあ、ボクが誰なのかキミは知ってるはずだよね？　キミに未来を視ることのできる魔力を与えたのは他の誰でもない、ボク自身なんだよ？　つまりキミが言いたいことなんて、言葉にしなくても全てお視通しってことなのさ。理解したかな、お馬鹿なお嬢さん」
挑発染みた科白を返されてしまい、シイナは唇を噛み締める。悔しいのだろう。だがその感情も全ては理解の範疇にあるに違いない。言葉で言い負かせられるような相手ではないのだ。
「下衆な発言は慎むがよい、でなければ吾は一暴れすることになるがの」
「……くっく、単なる言葉遊びさ。それにボクはキミが怒りに狂うような未来は視てないからこれっぽっちも心配してないんだよ？」
カラカラと笑ってみせると、二人に背を向けて暗闇へと歩き始めた。後をついてこい、という意思表示なのだろう。
「シイナ、よいか」
「……はい、正直言ってものすごく頭にきていますけど、我慢でき

る範囲で我慢します」
　つまりそれは我慢できなくなればそうではないと言っているようなものだ。
「そうじゃな、汝はそれでよい。……さあ、ゆくぞ」
　その反応にリュウオは頬を緩ませて、共に地下へと降りていく。ミロクとの対面に不安を覚えていたが、どうやら何も心配することはなさそうだ。
　シイナは強い。ノインと同じか、それ以上に。不安など何一つとしてする必要はなかった。
　闇の底に下りていくと、扉が一つ用意されている。ミロクはその扉を開けると、中に入るように促す。二人が中に入ったのを確認し、ミロクはその扉を閉めた。
　扉の奥は灯りが揺らめいている。全てにおいて暗闇が支配しているわけではなさそうだ。
「ああ、そこに椅子があるからさ、適当に座っててよ」
　二人が通されたのは客間だったらしい。ごてごてしい壁には小さな虫が張り付き蠢いているのが眼に見えた。滑(ぬめ)った蔓が天井からぶら下がり、ゆらゆらと影を生み出している。
「陰気な場所ですね」
　湖の底に造られているのも原因の一つとして挙げられるが、ミロク自身がこのような空間を特に好いているというのが、最も頭を抱えたくなる問題だった。
　ミロクに仕える魔族の中にも、この空間が好きになれない者は多々存在する。そのような者たちは、揃いも揃って湖の傍に棲み処を造っていた。
「人が住めるようなところではないからのう……。その点、吾の古城は居心地がよかろうぞ」
　どうやらあの古城は、リュウオにとって住み心地が良いと判断されているらしい。
　確かに城内は豪奢な造りをしており、なに不自由なく生活できそ

うにも思えるが、欲を言えば一つだけ問題がある。それは古城が建てられている場所だ。
「買い物が不便です」
その一言で一刀両断にしてしまい、シイナは微笑した。
「手厳しい奴じゃのう……」
シイナの評価はいまひとつのようだ。
「キミたちは随分と仲がいいみたいだねえ？　なんだか羨ましいよ」
そこにミロクが姿を現し、声を挟んだ。
机の上にコップを三つ置き、手の平を見せ、召し上がれと合図する。
「ぶどう酒さ。人間の口にも合うはずだよ？」
持て成しを断る理由もなく、二人はコップを手にする。まず、リュウオが口をつけ、吟味する。その後で、シイナもぶどう酒を飲み始めた。
「もっと飲みなよ、ストックは幾らでもあるからさあ。……いやなに、酒が入れば魔族も人間もみんな饒舌になってべらべらとおかしなことを吐露してくれるからさ、客人には必ず勧めるようにしてるんだ。ボクにとって酒は最高の道具だからね？」
その科白にシイナは眉根を寄せ、二口目を味わうことなくコップを置いた。
リュウオはそんなことはお構いなしに、ぶどう酒を一気に飲み干してしまう。
「んー、なんていうかさ、キミは穏やかな表情をするようになったよね、リュウオ」
そんなリュウオの様子が気になったのか、ミロクは眉を上げて視線を向ける。
前に会ったときはもっと鋭い目つきをしていたように思えたが、今はそれがまったくない。
「うーん、人間と出逢っちゃうと、こんなにも変化するものかねえ？　そこんとこキミはどう思う、占師のお嬢さん？」

話を振られ、シイナは少し身を引いた。
隣に座るリュウオの手を握り、ただじっと沈黙を守る。
「ふふっ、そうかい、無視するのが一番だって考えなんだね、キミは？　まあ確かにその作戦は利口ではあるね。けれどもそれはボクに限っては例外なんだってことを忘れないでくれよ」
言葉を紡がなくとも、自身の魔力を持ってすれば、他者の未来はおろか考えていることすら視通すことができる。つまり隠し事は不可能だということだ。これがミロクの恐ろしいところだ。絶対的な忠誠を誓った者でなければ、ミロクの傍に仕えることすらできない。反旗を翻すような魔族は全てを葬り去ってきた。そうすることでミロクは、今の地位を確立させたのだ。
「……のう、ミロクよ。他者の心が読めすぎるというのも、案外に苦痛じゃろうて。それは汝が一番理解しとうはずじゃ」
コップを持ったまま、リュウオは口角を上げて意地悪そうに笑う。言われた瞬間は何を指摘しているのか理解できなかったが、シイナはその答えにすぐ気がついた。
「リュウオ、キミもなかなか嫌なところを突いてくるね。……ああ、そうさ。確かにその通りだよ。ボクは未来が視える。思考を読み取れる。なーんでもできる。……だからかな、ボクはボク以外の存在を信じることができなくなってしまったのさ」
顔は笑っていた。その実、眼が笑っていない。
どうやら痛いところを突かれてしまったらしい。
「先を視通せる汝にさえ、叶わぬものがあるとはのぅ……。やれ、難儀なものじゃ」
「いやまったくだよ、くっくく……」
空気の流れが変わったような気がした。
二人の魔力がぶつかり合い、空間に亀裂を生み出すかのような圧迫感がシイナを襲う。表面上はなんともないような様子だが、裏では既に魔力の比べ合いが行なわれていたようだ。
「……やーめた。キミと睨み合ってもなんの利益にもならないから

ねえ。というわけでそろそろ本題に入ろうかな？」
　両手を上げ、降参したかのような姿勢を取ってみせると、いよいよミロクは語り始めた。
「別にわざわざ聞かなくても分かることだけどさ、一応訊ねておくのが礼儀ってもんだと思うんだ。……さあて、それではリュウオくん。キミは今日、何用でボクの許を訪ねたんだい？」
　机に両手をつき、身を乗り出して問い訊ねる。
　客人が訪れるということですら珍しいのだ。その相手が魔を統べる王であり、更にはミロクが契約を結んだ占師の人間がお供をしているのだから興奮が収まらない。この高揚感は、たとえ未来が視えようとも変わることはないのだ。

【5－3】

「……のう、ミロクよ。汝はいったい何を考えておるのじゃ」
まずは、別の話題から攻めてみることにした。
「汝は何故、ロギスタニア大陸に干渉するのだ」
リュウオが知りたかったのは、ロギスタニア大陸で人間と契約を結び続ける理由だ。
エルバストロス大陸の人間を選ぶのではなく、何故にロギスタニア大陸の人間と契約を結ぼうと考えたのか。その理由が知りたかった。
「んー、干渉するつもりはなかったんだけどね……」
悪びれた様子もなく、笑みを浮かべたまま肩を竦めてみせた。いずれこうなるであろうことには、初めから気づいていたと言わんばかりの態度だ。しかしそれも未来を視ることが可能なのだから当然といえよう。
「どれくらい昔のことか忘れちゃったけどさ、キミの隣に座ってる占師のお嬢さんの家系の人間がね、大陸を渡ってボクの許を訪ねてきたんだよ」
自らの科白に驚きを表現し、ミロクは嬉しそうにシイナの顔に視線を向ける。
シイナは無反応だった。リュウオが質問し、ミロクがそれに答えるのを黙って聞いている。
「おや、驚かないんだね？　まあ別にボクはその反応の無さも楽しめるからいいよ。それでその続きなんだけどさ、彼らはボクと契約を結びたくて、此処までやってきたんだってさ。どうやらボクが全てを視通す魔力を持ってるってことをどこかで嗅ぎつけたらしくてね、数日かけてやってきたらしいのさ」
人間が魔力を手に入れるためには、魔族と契約を結び、代償を支払わなければならない。

それでもなお、シイナの先祖はミロクの持つ夢のような魔力を求めた。
「ラヴィリンス家を繁栄させるために、これから先、一生をかけて、ボクと契約を結びたいってお願いされたわけなんだけどね、残念なことにボクは一人しかいない。そして彼らは、そうじゃなかったんだ」
人間は、複数の魔族との多重契約を結ぶことはできない。魔契約者となった人間が別の魔族と契約を結ぶ際、既に契約を結んでいる魔族との魔力の差を比べ、より強大な魔力を持つ魔族が契約を上書きすることができる。そしてそれは、魔族も同じだった。
人間と契約を結ぶには、自身の持つ魔力の十分の一を与えなければならない。それは契約を結んだ人間がその契約を破棄するか、死ぬか、契約を上書きされるかした場合に限り、自身に戻ってくる。だが、それでもやはり十分の一の魔力を失うのは魔族にとっては痛手だ。
幾人もの人間と契約を結んでしまえば、自身の持つ魔力の量が枯渇してしまうだろう。そうなってしまうのを防ぐため、十分の一以上の魔力を人間に与えようとすると、魔族の身体は警告を打ち出す。全身が震え、拒否反応を示すのだ。
「彼らの願いを叶えることは、ボクには不可能だった。でもさあ、流石にそれじゃあかわいそうだもんね？　だからボクはこう提案したんだ。彼ら全員を魔契約者にすることはできないけど、その代わりに、一人につき二十年、ラヴィリンス家が繁栄する未来を見届けようってね」
一人につき、二十年。
その中の一人と契約を結び、二十年の間を魔契約者として過ごさせる。そして二十年が過ぎてしまえば、今度は次の世代へと契約を譲り、永遠にラヴィリンス家との契約を結び続けるというものだった。
途中、欲の張った者が契約を譲ろうとしなければ、それはラヴィ

リンス家の崩壊を意味することは言わずとも理解していたに違いない。契約を結ぶ相手は、仮にも魔を統べる王なのだ。
「というわけで、ボクと彼らのうちの一人は契約を結んだのさ。元々はロギスタニア大陸に干渉するつもりなんてこれっぽっちもなかったんだよ。でも契約を結んだ相手がエルバストロス大陸の人間じゃなかったんだから仕方ないよねえ」
悪びれた様子も見せずに、むしろ嬉々として昔話を語る。ミロク自身、相当に退屈していたのだろう。これだけ言葉を交し合える相手は久しぶりだった。
「なるほどの、ラヴィリンス家の人間が汝と契約を結んでおるのはそういうわけじゃったか」
疑問が一つ解け、リュウオは顎を擦りながら息を吐く。故意に干渉したわけではないので、これ以上は責めることもないが、それでも別の疑問が頭に思い浮かぶ。
「ミロクよ、汝は何故にそのような契約の結び方をしたのじゃ」
解せないのは、その一点に尽きた。
契約を結んだ相手を手にかけることで、ミロクはいつでも魔力を取り戻すことができる状態にはあったが、それでも疑問が解けることはない。その契約を結んでしまえば、ラヴィリンス家が崩壊でもしない限り、延々と魔力を失ったままなのだ。そうまでして何故、ミロクは契約を結ぼうと考えたのか。
「いい質問だね、リュウオ。その答えはなかなかに話しづらいことだよ」
眼を細め、次の科白を口にするまで間を置いた。
二人を焦らし、その様を存分に楽しんだ後、ミロクはその秘密を言葉にする。
「――ボクはね、人間を作ってみたいんだ」
「人間じゃと……」
リュウオは眉をしかめた。シイナに至っては、その言葉の意味が理解できなかったらしい。

唖然とした表情でミロクを見つめているではないか。
「人間と契約を結ぶとき、ボクら魔族は魔力の十分の一を失うってのに、人間はたった一つの代償を支払うだけでいいんだよ？　それもまったく興味をそそられないものばかりさ。でもねえ、ボクはそれの有効な活用法を見つけたんだ。つまりはね、人間が玩具で遊ぶように、ボクも人間を使って遊んでみたくなっただけのお話さ」
「……貴方は、神にでもなったつもりですか」
その言葉を受けて、今まで沈黙を守り続けていたシイナが、我慢しきれずに口を開いた。
「馬鹿だねえ……、ボクは神なんかじゃない、ただのしがない魔族さ」
くすくすと笑みを零し、シイナを挑発する。
異常にも思えるミロクの言動に、リュウオは眉間に皺を寄せた。
「……ノインも、汝と契約を？」
「ノイン？　……ああ、彼女ね。いやなに彼女はとてもいい人間だったよ。ボクの魔力を巧く使いこなしていたみたいだし、なにより素質があった。でも結局は殺されちゃったけどね」
代償として声帯を支払い、ノインは魔力を得た。そしてその契約相手は、やはりというべきかミロクだった。
ラヴィリンス家の人間と契約を結び続けるミロクの手によって、シイナとノインは魔契約者という名の呪縛へと誘(いざ)われたのだ。
「ノインを殺した相手の名はなんと申す」
「それを言っちゃあ未来が変わってしまうさ。もしそうなったらボクとしてはまったくもって面白くなくなるねえ。リュウオ、そして占師のお嬢さん、未来というのは自分自身の手で変えるものなんだからさ、ボクに請うのはお門違いってもんだよ」
あわよくば、その人物の名を知ることができるかもしれないと考えたが、やはりミロクはそれを拒否した。幾通りもの未来を視ているからこそ、ミロクにとってより面白みのある道を選択しているのだろう。リュウオやシイナからしてみれば迷惑な話だ。

「まあ、それは吾も同意するところじゃ。他者の手など借りるつもりは毛頭ない。……じゃがな、なにもラヴィリンス家の人間でなくともよかろうが」
つまるところ、それはロギスタニア大陸の人間ではなく、エルバストロス大陸の人間と契約を結んで行なえばいいと言っているようなものだ。人間とはいえ、自身の領土内の者が好き勝手に弄られるのは好ましくないと考えているのだろう。
それに加え、ミロクに利用されているのはラヴィリンス家の人間だ。シイナはミロクと契約を結んでしまい、光を失った。ミロクが別の判断をしていたならば、そういった事態に陥ることもなかったかもしれない。
けれども、ミロクは首を振る。
「くくっ……、いいや駄目だね。それは今更変えられないんだよ。過去に幾度となく実験を重ねてきたわけだけどさ、人間を作るってのはものすごく難しいことなんだよ？　血統って奴が重要になってくる。それは魔族だって同じことだよねえ。身体に流れてる血が違うだけで拒絶反応を起こしてくれちゃってさ、すぐに壊れちゃうんだよ。そうなっちゃうともう駄目さ。ただの肉隗だよ、あははっ」
ミロクがラヴィリンス家との契約に応じたのには、そういった背景もあったのだろう。
暇を飽かすために始めた遊びに、ラヴィリンス家の人間を利用してきたのだ。ノインからは声帯を奪い、そしてシイナからは視力を奪い取った。これから先、あとどれぐらいすれば、この呪縛から逃れることができるのだろうか。
「ああ、そういえばさ、キミに言いたいことがあったんだよ」
何かを思い出したのかミロクはシイナへと視線を向けた。
「ラヴィリンス家の人間は、この世にあと一人しかいない。キミが死んでしまえば、ボクが今までに培ってきた努力や苦労が全て水の泡になっちゃうわけだよ。だからボクから一つお願いをしたいんだけどさあ……」

一旦、口を閉じる。リュウオとシイナ、二人の腕を交互に見やり、視線をシイナへと戻す。
悪戯な笑みを浮かべ、何事かを伝えるかのごとく、ミロクはその科白を口にした。
「……今宵、何があろうとも、決して死を受け入れないでくれよぉ？」
そう、それはミロクからのメッセージだ。
初めから決められていたはずの未来を変えることのできる、唯一の道しるべ。
それに気づくか否かは、シイナ次第だった。
「貴方が何を言いたいのかわたしには理解できませんが、わたしは既に、貴方と契約を結んだときから死を受け入れています」
頑なな意思を確認し、ミロクは満足そうに口元を緩める。
「キミはノインと似て頑固だねえ」
「そういう貴方は自分勝手ですね」
「くっく、自分勝手なのは果たしてボクだけかなあ？」
何度も、意味深な目配せをして、二人に合図を送る。だがそれに気づいた様子はない。
「……まあ、適当に頑張ってよ。終わりはすぐ傍まで近づいてきてるからさ」
肩を竦め、ミロクはおどけてみせる。
そこでまた、リュウオが口を開いた。
「ミロクよ、汝に言っておくことがある」
「なんだい、それは？」
今から何を言おうとしているのかを確かめ、その上でミロクは促してみる。それがミロクという魔族の接し方といえよう。
「吾とノインは、最期のときまでそれを果たすことができんかったが……、シイナとはいずれ、契約を結ばせてもらうつもりじゃて」
「……リュウオ、それはキミがボクよりも暗に強いって言いたいのかな？」

リュウオが言っていること、それは契約の上書きを意味する。それを実行するには、先に契約を結んだ魔族よりも強大な魔力を持っていなければならない。

これはリュウオからの挑戦とも受け取れる。

「否定はせぬ、汝は武道派ではなかろうて。……それとも、今此処で確かめてみるか」

一瞬の静寂、そして苦笑する声が部屋に鳴る。

「うん、その通りだよ。ボクはリュウオには敵わないだろうねえ」

あくまでも、一対一の対決においてはそうであろう。だがしかし、ミロクには未来を視通すことができる。戦局を自在に操ることはお手の物だ。

「だけどね、その代わりと言っちゃあなんだけど、ボクはこの世の生物全ての未来が視えるってことを忘れないでおくれよ？　……まあ、そうは言っても結局はみんな死んじゃうから終着点は同じなんだけどさあ」

興味を失ったのか、リュウオは大きな欠伸をしてみせる。

その姿を眺めるミロクは、ぶどう酒を口にした後、ぽつりと呟いた。

「リュウオ。……キミ、もうすぐ死ぬよ」

「吾が……死ぬじゃと？」

「うん、人間に殺される」

思わぬ宣告を受け、リュウオはシイナの反応を横目に確認してみた。

人間に殺されることになると言われ、シイナの顔が脳裏に浮かび上がったのだ。けれどもすぐに考えを改める。シイナには自分を殺すだけの魔力はない。できることといえば、他者の行く末を視通すことぐらいだ。それではリュウオを殺せない。

では、いったい誰が自分を殺すのか。

「死期を変えたいのなら、キミは決断を下さないといけない。でもそれは苦渋の選択にもなりうる。未来を決めるのは、あくまでキミ

だからね？」
　両目を閉じて、椅子に寄りかかったまま口を動かしていく。
　ミロクには全てが視えているのだ。
「……ああ、そうそう。ボクとラヴィリンス家の関係を終わらせたいんならさ、血の契約書を破棄しなよ。契約の上書きなんてされたらボクも黙ってるわけにはいかないからね。穏便に事を済ますなら、そうした方がいいよ？　ボクとしては人間を作る手間が掛かって不利益な事態になっちゃうけど、そうすればボクとラヴィリンス家の関係は絶たれることになるし、エルバストロス大陸にいるボクには手出しできなくなるからさあ。……でもね、それが切っ掛けでキミが死ぬことになったとしても、ボクは責任持てないよ」
「どういう意味じゃ」
「ボクは教えてあげない。どうしても知りたいなら、ボクの魔力を十分の一でも扱える、そこのお嬢さんに聞いてみればいいよ」
　未来を視ることが可能なシイナは、リュウオと出逢ったとき、ミロクと同じことを言っていた。ヘレナの身代わりとなることによって、いずれ死を迎えるであろうことを宣言していた。
　だが、リュウオは追求しない。
　その答えを求めてしまえば、シイナを困らせることになるのは言わずもがなだ。
「……吾は死なん。シイナと契約を結ぶまではの」
「ふーん、……だってさ、どうするんだい？」
　話を振られ、シイナは息を呑む。
「わ、わたしは……」
　なんと返事をすればいいのだろうか。もう、いっその事、全てを話してしまった方が楽になれるのではないかと考えてしまう。そうすれば、こんなにも苦しまなくてすむのだ。
　シイナは悩んだ。しかしながらその答えは出せなかった。
「……邪魔したのぅ、ミロクよ。吾とシイナは古城へと戻ることにする」

「どうぞご自由に」
手の平を向けて、薄っすらと笑みを浮かべる。
扉がひとりでに開いて、二人の帰路を導いた。

湖の底から外へ出ると、既に辺りは暗くなっていた。時間の流れが速く進んだようにも感じるが、思いのほか長い間、ミロクと共に話をしていたらしい。
人型から黒き竜の姿を成したリュウオは、出発時と同じように、シイナを手に乗せる。そしてもう一度、空の旅へと舞い上がる。
「……シイナよ」
けしかけられて以降、ずっと口を重くしているシイナを見かねたのか、リュウオは一つの提案を持ちかける。
「ラヴィリンス家の人間は占師となることを義務付けられておると申したな？　それはミロクとの間に血の契約書が存在するからじゃ」
今更何を言っているのかと、シイナは俯けていた顔を上げて視線をぶつけた。
それをよしとしたのか、リュウオは更に言葉を続ける。
「吾は今から血の契約書を取りにゆき、それを破棄するぞ」
「……それで絶たれるのは、ラヴィリンス家との関係だけです。既にミロクとの契約を結んでしまったわたしには代償を取り戻すことはできませんよ」
一瞬、眼を見開いたが、シイナはすぐに俯いてしまう。
「そんなことは言われんでも分かっておる。吾が言うとるのはそういうことではないわ。吾が支配下に置く大陸で、人間を弄び続けておるミロクが気に食わんだけじゃ」
シイナは、本当は気づいていた。
リュウオがシイナを助けるために言っているということを。
「リュウオ……、貴方は魔を統べる王……。それなのに、優しすぎます……」
「優しい？　吾が優しいじゃと？　……ふっ、なにをたわ言を」

「その優しさが……」

その先に続く言葉を紡ぐことは、今のシイナにはまだできそうになかった。

【6－1】

十五夜を過ぎた月が闇夜を照らし、空を舞う二人の姿を捉えていた。

どのくらいの距離を移動しただろうか。沈黙が二人の間に流れ、今は両翼が風を切る音しか聞こえない。それも後に終わり、やがて目的の場所へと辿り着く。

二人が向かった先、それはラヴィリンス家だ。

雲よりも上空を旋回し、位置を確認する。このままの姿で大地へと降り立てば、大きな騒ぎになるのは明らかだ。リュウオは空に舞ったまま、人型へと成していく。その腕に抱きかかえられ、シイナは逆さまの杖をぎゅっと握り締めた。

「――随分と寂れておるの」

ゆっくりと、誰にも気づかれぬように、二人はラヴィリンス家の玄関の前に舞い降りる。

窓は割れ、庭は荒れ放題となっている。当然だが、灯りはついていなかった。

「今は誰も住んでいませんから、このような状態にあっても仕方ありません」

此処が、シイナが生まれた場所。そしてノインも同じく。

ほんの少し前までは、此処にも人が住んでいた。占師の家系であるとはいえ、幸せな暮らしを送っていたのだろう。だが、その後に待ち受けているものは絶望を生み出した。

そのことを思い出したのか、シイナは下唇を噛み、眼を瞑った。

「もう二度と、此処には戻らないと思っていたのですが……当てが外れましたね」

哀しげな表情のシイナを見やり、リュウオは頭を乱暴に撫でる。

「な、なんですか急に……」

「汝はのぅ、元気な姿が一番似合(にお)うとる」

豪快に、歯を見せるように笑いかける。
リュウオの笑顔を見て、シイナは自分が心配を掛けているということに気づいた。
「……すみません」
「謝るでない、吾は汝の笑っとる顔が見とうて行動したまでじゃ」
眼には見えないかもしれない。だが、シイナにはリュウオの笑顔が心に伝わってくるのを感じた。もっと別の出逢い方をしていれば、自分もノインと同じように幸せに生きることができただろうか。ふと、そんなことを考えてしまう。
「さあて、心の準備は出来たかの」
「はい、行きましょう」
二人は手を硬く繋ぎあい、玄関をくぐった。
扉は鍵がかかっていたが、シイナはローブの袖の下から鍵を取り出す。捨てるに捨てられなかったのだろう。それが今、役に立つときがきた。
「扉を壊さんですみそうじゃな」
「これでも一応、わたしが住んでいたところです。乱暴はしないで下さい」
「心得た」
くっくと喉を鳴らし、二人揃って家の中に入った。
室内は特に荒れた形跡はなかったが、割れた窓の隙間から雨が入り込んで床を台無しにしていた。灯りはつけなくとも、二人が室内を歩くたびに埃が舞っているのがよく見える。
「……んん」
ふと、リュウオは足元に視線を向ける。
何かおかしい、そう思った。
埃の溜まり方が均一ではない。二人の足跡以外にも、他の何者かが侵入した形跡がある。
今、此処に潜んでいるのか。リュウオは室内を見渡してみたが、気配は感じられない。シイナの息遣いだけが支配している。気のせ

いだろうか。
「リュウオ、見つけました」
思考を遮り、シイナの声が届く。
声の先を見ると、シイナが逆さまの杖を突きながらこちらへと歩いてくる。その手には古びた紙切れが握られていた。
「それが、汝とミロクが契約を結ぶために用意した、血の契約書じゃな」
問いかけると、シイナはしっかりと頷いた。血の契約書をリュウオへと手渡す。
「血の契約書を破棄するのは至って簡単じゃ、ただ破り捨ててしまえばよいのじゃからの」
代償を支払ってまで手に入れた魔力は、血の契約書が破られてしまうだけのことで、呆気なく破棄されることになる。魔契約者となった者は、その魔力を失わないために、血の契約書を自身の命と同列に扱う。つまりは、魔契約者にとって一つ目の試練とは、血の契約書を守り抜くことにある。
だが、シイナはそれをあえて手元には置かなかった。否、そうする必要がなかった。
一生を占師として過ごしていくつもりはなかったし、目的を果たしたときは死をも覚悟していたのだから当然といえよう。
「シイナ、汝が義務と申すなら、それは予め決められていた未来なのかもしれん。じゃがの、吾は未来を変えるぞ。ラヴィリンス家とやらの呪縛から、汝を解放してみせようぞ」
それだけ告げると、シイナの返事を待たずしてリュウオは血の契約書を破り捨てる。
その瞬間、シイナは自分の身体から魔力が抜け出ていくのを感じた。
たとえ血の契約書を破棄し、自身が持つ魔力を失ったとしても、それを手に入れるために支払った代償は、シイナの許に戻ってくることはない。視力は失われたままなのだ。

目的を果たす前に、シイナは占師としての魔力を手放した。
「……これで、わたしはなんの価値もない人間になってしまいましたね」
自虐にも似た言葉を口にして、溜息を吐いた。自分に残されたものといえば、歩を刻むために必要な逆さまの杖だけだ。無事に目的を果たすことはできるのだろうかと不安になる。
けれども、リュウオは否定した。
「吾が言うた科白を忘れたか？　眼が見えぬというのなら、吾が汝の眼の代わりとなろうぞ」
手を差し伸べられているのを感じ取る。
そう、シイナの傍にはリュウオがいる。家族は失ったかもしれないが、一人ではないのだ。
「……リュウオ」
その言葉が、心を締めつける。
閉ざしたはずの胸に、嬉しさを与えてくれる。
「さあ、目的は済ませたからの、城へと戻ろうぞ」
なにも悩む必要はない。ラヴィリンス家の忌まわしき呪縛から解き放ってくれたのだ。
リュウオと共にいれば、ノインと同じように幸せを感じることができる。
そう考えたシイナは、当初の目的を忘れ、リュウオの手を取ろうとした。だが、
「――ッ」
突如として、何者かが姿を現した。
二人しかいないはずの室内に気配もなく、またリュウオに感づかれずに、シイナの腕を後ろ手に掴み、喉元に短剣を当てた。
シイナは眼を見開いた。自分の身に何が起こったのか把握していないのだろう。
「動くなよ、占師。お前の首をかっ切るのに時間はいらねえんだからよ」

侵入者は、一人ではない。
シイナを捕らえた人物が脅しと取れる言葉を囁くと同時に、窓をぶち割る音が響いた。次いで幾人かの足音が重なり合い、なだれ込んでくる。
「そいつらに手を出すな、そうすればこいつの命はないぜ」
状況を把握したリュウオに一つ、けん制を入れた。それを合図とし、リュウオはその場から動くのを中断する。
リュウオの視界に映るのは、若い男が一人と兵士が二人の計三名。家の外に身を潜めていたであろう兵士の存在に気づかなかったのは、室内に痕跡を残した何者かに眼を奪われていたのが原因だ。
しかしながら解せない。若い男はいったい何処から姿を現したというのか。気配はおろか、空気の流れが変わった様子すら感じ取れなかった。一瞬にして、目の前に立っていたのだ。
「……汝、魔契約者か」
「御明察通りさ」
二人の兵士にシイナの身柄を拘束させ、若い男は一歩前に出た。
そして、醜い笑みを口元に張りつける。
「初めまして、逆さまの王。俺の名はデザイヤ＝イスナーク。貴様の首を獲りにきた英雄だ」
その人物とは、デザイヤ＝イスナークだった。
リュウオとは初対面となるデザイヤは、英雄を気取った態度で恭しくお辞儀をしてみせる。
「汝が英雄じゃと？　……くく、笑わせてくれるではないか。英雄とはのぅ、汝のような無粋な者が語ってよいものではないぞ」
視界に映っているのはデザイヤを含めて四名だが、魔契約者ということは、何処かにデザイヤと契約を結んだ魔族が潜んでいるかもしれない。
シイナを人質に取られたものの、リュウオは内に秘めた魔力を思うがままに解放する。
「ううっ、……くっ」

それを受け、デザイヤは身体を強張らせた。魔契約者たるデザイヤは魔力を感じ取ることができるのだが、そのためにリュウオの恐ろしさを存分に味わうことになるとは思わなかったのだろう。全身から汗が吹き出すのを止められない。怖い。今すぐにでもこの場から逃げ去りたい。そう考えてしまうほどの圧迫感が、リュウオには存在した。

しかしだ、今更引くわけにはいかない。もう後戻りはできないのだ。

「そやつを人質に取って、いったいなんになるというのじゃ、吾は痛くも痒くものうぞ」

「だとすれば何故、貴様はこの占師もろとも俺を殺さない。そして何故、この占師が今もなお生きている？　俺には貴様の考えまでは読めないが、人質たる存在であることは明らかだ。それを理解したなら、魔力を解放するのを今すぐ止めろ。これは命令だっ」

魔を統べる王は、何者にも囚われない。他者の死に干渉しない。興味を持たない。

一見、デザイヤが取った行動は、意味のないものに思えるだろう。けれどもそれは大きな間違いだ。今のリュウオは、魔を統べる王でありながら、人という存在に囚われている。首を獲るには、最も有効な手段だった。

「リュウオ……」

ミロクとの契約を破棄し、魔力を失ったシイナには感じることはできないだろうが、それでもこの空間に生み出されている威圧的な空気が収まったであろうことを肌で感じ取る。命令に従い、リュウオが魔力の解放を止めたのだ。

その名を口にするが、しかしその行為を止めることはできなかった。

そう、これが、この瞬間こそが、シイナが視たリュウオの死期なのだ。自分には止めることなどできない。未来を変えるなど不可能だ。

「ご苦労だったな、お前のおかげで俺は真の英雄になることができそうだ」
無防備な状態を晒すリュウオに近寄り、厭らしげな笑みを浮かべる。全てが巧くいったのだと、上機嫌になっているらしい。
「逆さまの王よ、貴様が何故、この占師を人質に取られて身動き取れなくなっているのか、俺にはまったく理解できないが……、貴様は本当に間抜けだな？」
蔑むような目つきでリュウオを見やり、嘲笑の的とする。
「魔を統べる王の割には賢くはないんだな？　この占師は元々、俺たちの仲間なんだよ。つまり貴様は、まんまと騙されたわけさ」
「騙されてはおらぬ、吾は初めから気づいておうたわ」
シイナの考えを見抜き、それでもなお行動を共にするだけの意味があった。
リュウオにとってシイナとは、それほどまでに大切な存在となっていたのだ。
「くくっ、だとすれば貴様は、人質に取られた占師が敵であることを自覚しておきながら、あえて自分の意志でなすがままになっているってわけか」
笑いが止まらない。こんなにも気分がいいのは、記憶にない。
逆さまの王を討ち取る瞬間が、もう間もなく訪れるということに、デザイヤは興奮していた。
「しかしまあ、間抜けなのは貴様だけじゃなくてお前も同じだな、占師よ」
口撃の対象を、シイナへと移す。
後ろを振り向けば、両手を縄で縛られたシイナが困惑した表情を浮かべている。
「占師、お前は本当にしたたかな人間だ。俺の未来を視て野心に気づき、俺がお前の姉を殺した張本人かもしれないというのに、お前はあのとき、俺に復讐を果たすことよりも先に、逆さまの王を殺すことを選択した。人生最大の過ちとは、正にこのことを言うんだろ

うな？」
「では、やはり貴方がわたしの姉を……っ」
少しばかし、気づくのが遅すぎた。
もっと早く気づいていれば、この男が英雄になるのを協力するようなことはしなかった。
自分の間抜けさに涙が溢れてくる。そしてそれ以上に申し訳ないのは、リュウオが自分のために死ぬという事実だ。

【6－2】

何故、自分は泣いているのだろうか。これは自分が望んだ未来のはずだ。嬉しくて笑みが零れるのが当たり前の場面で、眼を潤ます意味はない。

デザイヤがリュウオの首を獲れば、ロギスタニア大陸の人々は恐怖から少しでも解放されるはずなのに、それを嫌がる自分がいた。

たった一日を共にしただけだ。それなのに、何故だ。

「リュウオ……ごめんなさい……っ」

自らが犯した過ちを詫びる言葉を口にする。その瞬間、堰を切ったように感情の波が押し寄せ、我慢できずにしゃくりあげてしまう。

過去を視ることができない、自身への怒り。

過去を視ることさえできていれば、デザイヤの正体を暴くことができた。

それなのにシイナは、ノインを殺した男の手助けをし、挙句には殺されようとしている。これを間抜けと言わずしてなんというのか。

「……泣くでない、シイナよ。汝にそのような顔は似合わぬと言うたであろうが？」

「でも……、でもっ」

涙によって視界が霞むこともない。シイナを支配しているのは暗闇なのだから当然だ。

何も見えない自分が愚かで仕方がない。

「安心しろよ、逆さまの王。これも全ては、この占師の占術によって決められた未来なんだからな、こいつが悲しがってるのも演技なんだよ。……そして俺は、ものすごく思いやりに溢れた性格をしている。だからな、逆さまの王。貴様だけを殺しはしない。真実を知る者は少ない方がいい。貴様の首を獲った後、この占師を存分に可愛がってから殺してやるよ、くははっ」

怒りに我を忘れそうになるが、シイナを人質に取られていては、

抵抗は不可能だった。
　これでもかと言わんばかりに歯を噛み締め、それでも怒りを強引に抑えつける。
　そんなリュウオの許に近づき、デザイヤはその首筋に視線を向けた。
「……昔々、ロギスタニア大陸には魔を統べる王がいました。重力を自在に操る王は人々から逆さまの王と呼ばれ恐れられていました。しかしそんなとき、一人の青年が逆さまの王の首を獲るために立ち上がるのです」
　ゆっくりと、リュウオを中心に一周していく。
「見事、青年は逆さまの王の首を獲りました。人々は歓喜に沸き、青年を英雄であると褒め称えました。それだけに止まらず、王族にもその勇敢さを認められ、一国の王女と結ばれることになるのです。……けれども、人々は気づいていませんでした。英雄と呼ばれた青年が、本当は野心に溢れ他者を利用することしか考えていなかったことを」
　やがてデザイヤは、リュウオの横に立ち、背に携えた長剣を鞘から引き抜く。
　鋼の擦れる音が響き、闇に鈍い光を齎した。
「ですが心配は無用です。これは誰も知らない物語。真実を知る者は一人だけでいい。……それが誰なのか、貴様には分かるか、逆さまの王？」
　ミロクと契約を結び、魔力を手に入れたときから、シイナは闇に支配され続けた。
　それは何も見えない恐怖と絶望を与えるものだが、ノインを喪い、家族をも喪ったシイナにとって、既にそれは経験済みのものであった。
　今更、恐怖など感じない。絶望などしない。そう誓った。
　でも、今は違う。
　リュウオが、ノインと同じように殺されようとしている。

それも全てはシイナが視た未来によって得たものだ。
変えようと思えば、いつでも未来を変えることはできた。リュウオに死期を伝え、全てを話してしまえばこんなことにはならなかった。それなのにシイナは、自分のわがままでそれを拒んでしまった。
このまま、リュウオを喪ってもいいのか。
「リュウオ……」
自分は一人ぼっちではないと教えてくれた。
自分の傍にいてくれることを誓ってくれた。
自分の心や胸に温かな感情を与えてくれた。
今の自分にとって、リュウオはなくてはならない存在になっていた。
もう、絶対に喪いたくない。哀しみなど知りたくはない。
「分からないなら教えてやろう。今から貴様の首を獲る俺が、この物語の主人公なんだよ」
静寂に音を鳴らすデザイヤの声に、シイナは耳を澄ます。
人質に取られた自分には、リュウオを助けることはできない。ただ、何が起こっているのかを耳で知ることしか、道は残されていなかった。

――そう、眼は見えないが、シイナには耳が残されていた。

「今宵、逆さまの王は俺の手によってその命を終えるわけだ……」
耳があれば、眼が見えずとも何が起こっているのかを知ることができる。
「首を獲るとは言ったが、魔族の中には首をはねても死なないものもいるらしいからな、貴様の息の根を止めるために、まずは心臓を一突きにしてやる」
いつ、デザイヤがリュウオを殺そうとするのか、聞き取ることが可能だ。
「せめてもの情けって奴だ。苦しまずに殺してやるよ」

これはシイナに残された、最後の好機だった。
今この瞬間を逃してしまえば、後には後悔しか残らない。
だから、決めろ。自分の想いに素直になれ。
「さあ、覚悟はいいな？」
声が届くのを待つ。
デザイヤがその言葉を口にするのを、耳を澄まして待ち続ける。
そして――、
「死ねぃ」
静寂に波を打ち、死を告げる言葉が木霊する。
それを合図とし、シイナは行動に移す。未来を変えることを決意したのだ。

――瞬刻、リュウオとシイナのいる場所が入れ替わった。

「……え」
瞬きする暇すら与えない、予想外の出来事。
その出来事に驚きを示したのは、デザイヤだけではない。リュウオ自身も同じだ。
一瞬、何が起こったのかを理解することができなかった。
だが、シイナにとってそれは都合のよいものであり、ほんの少しの戸惑いさえあれば、デザイヤが手を止めることはできないと悟っていた。デザイヤはその思惑にまんまと乗せられてしまったのだ。
「……ぐっ、……かはっ」
シイナの身体を一突きにした長剣は、背中を貫いた剣先からべっとりと血糊がついていた。
咳き込み、口元からも血が溢れ出る。
がくがくと足が震え、身体を支えていられずにその場に倒れ込んでしまった。
「な、何が……起こったんだ……？　俺は確かに、逆さまの王を……」

「そこを退かんか――――――――ッ！！！」
室内に鼓膜を震わすほどの声が響いた。声の主はリュウオだ。
シイナと場所が入れ替わったリュウオは、自分の腕を縛り上げる縄を引きちぎり、内に秘めた魔力を限界まで解放する。
同時に重力を操ることで、両脇を固めていた兵士を、更にはデザイヤを壁へと吹き飛ばす。
「シイナッ、返事をせい！」
すぐにシイナの許へ駆け寄り、その身体を抱き寄せる。
デザイヤの戸惑いが功を奏したのか、身体を貫く長剣は、心臓を一突きにすることはできなかったようだ。しかしながら死は既にそこまで近づいている。このままでは、シイナは死んでしまうことになるだろう。
「……ぅ、リュウ……ォ……」
眼を開けて、暗闇の中にリュウオの顔を探す。
だが、何も見えない。見えることはない。ミロクとの契約を結ぶために視力を代償として支払ったのだから当然だ。それでも瞳を彷徨わせ、リュウオの顔を探し続ける。
「何故じゃ……、汝は何故に……吾を助けたのじゃ……っ」
二人の腕に嵌められた赤と黒の腕輪が塵と化す。その役割を終えたのだ。
リュウオが心臓を一突きにされる間際、シイナは両手を縛られながらも後ろ手に腕輪を触り、その釦を押した。二人のいる場所を入れ替えて、リュウオを救うために。
『死期を変えたいのなら、キミは決断を下さないといけない。でもそれは苦渋の選択にもなりうる。未来を決めるのは、あくまでキミだからね？』
あのときミロクが告げた言葉は、リュウオではなくシイナに向けられたものだった。

そのことに、シイナはようやく気がついた。
未来を決めるのは、あくまでも自分自身だ。その言葉がシイナの背中を押した。
「……リュ……ウオ、あなたの……みら、いを……、かえ……たかった、から……っ」
本来、リュウオは此処で死ぬはずだった。
しかしその未来を視通し、リュウオに死期が迫っていることを知らせたシイナは、傍観することよりも助けることを選択した。
「リュウ……ォ、あなたは、わた……しに、ひかりを……あたえ、て、くれた……。くらやみに……いき、る……わたしに……。だから……、こんど、は……、わたし……が、あなたに、あたえ……なければ、ならない……。あなた、に……、みら、いを……」
辛そうに、けれども懸命に息を吸い、その想いを伝えていく。
シイナの頬に、リュウオの涙が零れ落ちていく。それすらも今のシイナには感じることができない。感覚が麻痺している。
「シイナ、シイナ、シイナ……、汝は本当に……大ばか者じゃ……
……」
何度も、何度もその名を口にする。
たった一日だけの出逢いにも関わらず、リュウオは涙を堪えることができない。
「……リュ、……ォ、あ……たと、ち……りを……、むす……び……たかった……っ」
それは、最後の合図だった。
その言葉が、その想いが、人間と魔族との契約を可能とする。
「……シイナ、吾は誓(ちか)うたもうぞ。汝と契りを結び、その代償をも吾が支払うことを……」
膨大な量の魔力が、リュウオとシイナの二人を中心に渦を巻く。
圧倒的なまでの存在感を魅せつけ、魔力を解放し続ける。

「これが、汝と吾とを結ぶことになるじゃろう……」
重力を限界まで操り、空間に歪みを生み出すと、目の前に亀裂が奔った。
リュウオは亀裂の中に腕を入れ、古びた紙を手に携える。
シイナの右手を取り、血で濡れた口元へと持っていく。血で親指を塗り飾り、契約書の右端に血判を押させる。
リュウオは左手の親指の先を噛み切り、契約書の左側に、同じように血判を押した。
二人の血の証が押されたのを確認し、リュウオは血の契約書を亀裂の中へ納めると、空間を閉じてしまった。これでもう、誰にも血の契約書を破棄させることはできない。
十分の一では足りないというのなら、幾らでも受け渡してみせよう。
身体が拒絶反応を起こそうとも構わない。シイナを喪うことに比べれば、たとえ魔力のほとんどを失うことになろうとも、決して躊躇ったりなどしない。
シイナに這い寄る死期を取り除くことが可能であれば、どのような仕打ちでも受けよう。
「……さあ、受け取れ。吾が持つ魔力を……」
そしてリュウオは、シイナへと魔力を分け与える。
十分の一の魔力がシイナの身体へと浸透していく。けれどもまだ足りない。命の灯火が消える前に、可能な限り分け与え続ける。
全身に警告を発しているが、それでもリュウオは手を止めない。
やがて魔力の半分を与えた頃、身動き一つ取れなくなっていたシイナの身体が反応を示す。
胸を貫く長剣を、そっと抜いていく。不思議なことに、血は出ていない。魔力が全身に巡ったのだろう。自然とシイナの身体を守ろうとしている。
「シイナ……、シイナ……ッ」
何かが、聞こえたような気がした。

そしてその声に呼応するかのように、心臓が脈を打つ。
身体の中に入り込んでくるそれらは、自らの意志を持ち、胸の鼓動を取り戻そうと懸命に動き続けていく。すると、身体に一つの変化が訪れた。
――眼が、痛い。
闇に慣れたはずの眼が、痛みを訴えている。それも両目ではなく右目だけだ。
生きろ、生きろと、誰かが耳元で囁き、死を拒む声が身体中を蝕み続けていく。
もう、いいから。自分の役目は果たしたから。
だからこれ以上、暗闇の世界に戻そうとしないで。
眼を開けずとも、暗闇が支配する空間から逃れる術は持たない。
何もかも失ったのだから生きている意味がないのだ。
だが、それでも声の主は自分の名を呼び続ける。
それだけは絶対に許さないと声を荒げ、感情を露にし、何度も繰り返し、自分の名を呼んだ。
その声が、心に響く。
その声が、感情に火を灯す。
その声が、生きる希望を与えてくれる。
その瞳に映し出したことのない人物と、もう一度言葉を交わしたい。想いを伝えたい。感情をぶつけたい。未練を残したまま死にたくない。生きたい。この想いを隠したまま一生の別れを交わすことなんて耐えられない。
暗闇の中に生きようが構うことはない。それが自分に科せられた代償なのだから。それよりも、今はとにかく、あの人の不安を取り除きたい。
――だから、シイナは眼を開けた。

【6－3】

「シイナッ、吾の声が聞こえるかっ」
暗闇が支配する世界に、リュウオの声が聞こえた。けれどもそれは半分しか届かない。
何故ならば、シイナの右目には、光ある世界が映し出されていたから。
「リ……、リュウ……ォ……？」
喉を震わせて、その名を呟いてみる。
すると右目に映るその人物は、涙に濡れたその顔を今よりも更にくしゃくしゃにしていく。
「……眼が……、見える……」
思わず声が出てしまう。しかしそれも驚きによって齎されたものだから仕方あるまい。
「貴方の、顔が……はっきりと……見えます……っ」
人間と魔族が契約を結ぶとき、人間は代償を、そして魔族は魔力を支払うのが習わしとなっている。それが当たり前であり、十分の一の魔力を分け与える魔族側からしてみれば、それでも足りないぐらいだった。
しかしそれはあくまでも習わしにしかすぎない。血の契約書の文面を変えてしまえば、その限りではないのだ。
シイナとの契約を結ぶとき、血の契約書の文面を自らの血で上書きし、新たな制約と誓約を書き記した。それは魔力を人間に分け与えるだけでなく、人間が支払わなければならない代償をも肩代わりするというものだ。
リュウオは、代償として片目を失った。
だがしかし、そのおかげでシイナは暗闇の世界から抜け出すことができたのだ。
「汝は人間ではのうなった。吾が持つ魔力の半分を得たからの。…

…迷惑じゃったか？」
胸に抱かれたシイナが視た――否、見た人物は、決められた未来を変えてまで守ろうとした存在であり、同時に自分の命を救ってくれた大切な人。
「……いえ、そんなことはありません」
涙に霞む視界の中に、その人の顔を映し出し、感情を表に出していく。
「すごく……、嬉しいです……っ」
「その言葉が聞きたかった。その言葉が聞ければ、吾は満足じゃ」
隻眼となった二人は、片目に互いの姿を映し出す。
一方は右目を失い、もう一方は右目を得た。
床に落ちた逆さまの杖を手に取ると、それをシイナの手に握らせる。
「この杖は、吾が汝に渡したものじゃからの、肌身離さず持っておくがいい。……さて、」
シイナの身体を抱きかかえたまま、リュウオはゆっくりと後ろを振り向いた。
視界の先に映った人物、それはデザイヤ＝イスナークだ。
「こ、これもあの占師が視た筋書き通りなのか……？　まだ、俺は……逆さまの王を殺してなどいないぞ……ひぃ」
直後、デザイヤの身体が宙に浮いた。まるで逆さまに吊り上げられたかのような体勢だ。
「……何故、吾が逆さまの王と呼ばれておるのか……、汝は存じぬか？」
怒りを爆発させるようなことはなく、冷静に、しかし決して矛先を収めたりはしない。
「それはのう、吾が重力を自在に操れるからじゃ」
「ぐぁあああっ」
兵士共々、デザイヤは室内をぐるぐると旋回し始める。眼が回るほどの速さで、勢いを止めることなく延々と続ける。

「偽りの王を作り上げ……英雄としての地位や名誉、そして名声を得た気分はどうじゃ？　さぞかし心地よいものじゃったろうなぁ……。じゃがの、それも今宵限りとなるでな」
声が届いているとも思えない。しかしそれでもいいと考えている。この瞬間を持って、思う存分に恐怖を身体中に植えつけてやることの方が大事だ。
「もう一度、汝に問おう……、吾が誰か存じぬか？　人でなければ汝が作り上げた偽りの王でもない。吾こそがロギスタニア大陸の魔を統べる王――リュウオ＝リヴァースなのじゃ」
玄関の扉がひとりでに開かれると、室内を旋回していたデザイヤたちは次々と外へ投げ出されていく。その後を追い、リュウオは庭に出る。兵士は気を失っていたが、デザイヤだけはまだ辛うじて意識が残っているようだった。しかしそれも不幸の連鎖へと導くだけになる。
「汝を抱えたままというのが、ちと不安じゃが……、こやつと契約を交わした魔族が何処に潜んでおるやもしれんからの」
「大丈夫です、今のわたしには怖いものなど何一つとしてありませんから」
その言葉を聞いて、リュウオは笑みを浮かべる。
そして次の瞬間には魔力を解放し、人型から黒き竜へと姿を変えていく。その姿を見たデザイヤは、恐ろしさのあまり全身を震えが駆け巡る。汗が噴出すのが止まらない。今すぐにこの場から逃げ出したいが、身体が言うことを利かない。
「今宵は特別じゃ、偽りの英雄とやらに空の旅を満喫させてやろうぞ」
重力に逆らい、デザイヤの身体は高く高く空へと浮かび上がっていく。それも尋常ではない速度だ。重力に逆らうことで、逆に押しつぶされそうになる。
空から落ちてきて、地面の手前で止まった。それを最後に、デザイヤは気絶する。これで空の旅は終わりを迎えることになった。

「……殺さないのですか」
「ノインと誓うたからの、決して人間を殺しはせぬと……」
律儀な性格をしているものだ、とシイナは思った。
けれどもそんなリュウオと共に過ごしたからこそ、未来を変えようと決めたのだろう。
「全てが、終わったのですね……」
ぽつりと呟くシイナは、小さく息を吐く。
「いや、まだ終わってはおらぬ」
だが、リュウオはその言葉を否定する。
まだ終わっていない。最後の仕上げが残っているのだ。
「事の発端は、こやつが魔契約者になったことが挙げられようぞ。確かにこやつは裁かれて当然の人間じゃが……、黒幕は別におるでな」
そう言って、ラヴィリンス家の屋根上に視線を移してみる。
するとそこには、リュウオにとって見覚えのある人物が佇んでいるではないか。
「やはり汝の仕業じゃな……トルエカ」
屋根上にいた人物、それはリュウオの側近であり、相当な信頼を寄せていたであろうトルエカだった。シイナはトルエカの姿を視界に映すのは初めてだったが、疑問を抱かずにはいられない。何故、トルエカがリュウオを裏切るような行為をしたのか。
「トルエカよ、汝がこやつと契約を結んだ魔族なのじゃな」
「その通りで御座います、王」
弁明するつもりはないのか、屋根上から降りてきたトルエカは、二人の前で深く頭を下げる。
「私がこの者を唆し、魔契約者へと仕立て上げました」
「何故じゃ、トルエカ」
どうやらリュウオにも理解の範疇にないらしく、トルエカの真意を聞き出そうとする。
「あの占師が王の許に姿を見せたときから、私はずっと不安を感じ

ていました。王が人間と契りを交わすなど、そんなことがあってはなりませんし、それだけでなく、挙句には人間を殺さないとまで言い出す王を前にして、心を穏やかに保っていられるはずがありません」

野心を持っていたわけではない。リュウオを殺そうとしていたわけではない。

トルエカは、ノインと出逢う前のリュウオに戻ってほしかったのだ。

「あの占師がこの者に殺され、王が元に戻ってくれるであろうことを信じていました。しかしです、あろうことか今度は実妹のシイナ様が占師となって王の前に姿を現したではありませんか。私は、王を誑かす存在を全て排除するために、シイナ様が視たという未来をこの者から聞き出し、その対処法として、お二方に赤と黒の腕輪を渡しました」

シイナを人質に取られ、リュウオがなす術も無くデザイヤに殺されることを知ったトルエカは、それを好機と捉えた。二人の場所を自在に入れ替えることの可能な腕輪をシイナに持たせていれば、シイナは必ずリュウオを助けるだろう。そう考えたのだ。

思惑通りに腕輪の効力を発揮し、シイナはリュウオの身代わりとなった。けれどもここで予想外の出来事が起きた。

「シイナ様が王と契約を結ぶことになるとは思ってもみませんでした。あの瞬間、私の企みは全て崩れ去ってしまったのです」

未来が変わったとき、次に何が起こるのかは占師にしか視えない。つまりトルエカには、あのときリュウオが何をしようとしていたのか判断することができなかったのだ。

「……王、私は反逆者です。絶対的な忠誠を誓いながらも、王を裏切りました」

覚悟ができているのだろう。死を受け入れたトルエカは、ゆっくりと両目を閉じた。

「潔いな、トルエカよ……。じゃが、汝が仕出かしたことは決して

許されぬ」
トルエカに向けて、手を翳す。重力を操り押しつぶすつもりなのだろう。
だが、それを止める人物が一人いた。それは数刻前まで占師であった少女だ。
「……シイナよ、何故止めようとするのじゃ」
「リュウオ、貴方は姉と誓いましたよね。もう二度と、人間を殺したりはしないと……」
確かに誓った。しかし何故この瞬間にそのようなことを言い出すのか。
リュウオは眉根を寄せた。
「それでは、今度は姉とではなく、わたしと誓ってください。もう二度と、魔族を殺したりはしないことを……」
「……正気か、シイナよ」
トルエカは、ノインを殺した張本人ではない。けれどもトルエカがデザイヤを唆したりなどしなければ、ノインが死ぬことはなかったし、シイナが占師となることもなかった。
それなのに、シイナはトルエカを赦すと言っているのだ。
「わたしは、リュウオが哀しむ顔を見たくなどありません」
トルエカが死ねば、トルエカを殺せば、トルエカをその手にかければ、リュウオが哀しむであろうことにシイナは気づいていた。
長年、側近として傍に仕えていたのだろう。信頼も寄せていたはずだ。そのような存在を自らの手で殺めることなど、望んではいない。ノインのために、そしてシイナのために殺そうとしているのは明らかだった。
「本当に……、それでよいのじゃな」
念を押す。それでもシイナは迷わない。力強く頷いてみせる。
その姿を見たリュウオは、視線をトルエカへと移した。
「トルエカよ、吾は絶対に汝を赦しはせぬ……。じゃから命ずる、その一生を捧げ、罪を償い続けることを今ここに誓うがよい」

命を受け、トルエカの頬に涙が伝っていく。
それは感情を隠し続けた魔族が、己が背負うはずの罪を赦された瞬間であった。
「……姉さん、貴方が幸せだった理由が、今ようやく理解できました」
そんな中、シイナはそっと呟いてみる。リュウオの耳には届いていないらしい。
隻眼に魔を統べる王を映し出し、頬を朱に染め上げていく。どうやらこの感情を抑えることはできそうにない。だから一つだけ心に決めることにした。
ノインが手に入れた幸せと同じものを、いつかきっと自分も手に入れてみせるのだと――…

【エピローグ】

古城へと戻った二人は、ノインの墓石の前に佇んでいた。
「これから、どうするかのう」
魔力の半分をシイナに分け与えたリュウオは、それでも十二分に他の魔族を圧倒するだけの魔力を秘めているわけだが、リュウオ自身が納得できないでいる。魔を統べる王たる存在として、自分は不適格になってしまった。そう考えていた。
「北へ行くか、南へ行くか、それとも西へ行くか、はたまたミロクのおる東の地へと行くか」
ロギスタニア大陸を出て、別の大陸へと移り住むつもりだ。そしてそれは一人で向かうのではなく、シイナを連れ添っての旅となる。
「西がいいです」
思案するリュウオに、シイナが主張する。
「ほう、何故じゃ」
「東のエルバストロス大陸には、嫌いな魔族がいますから」
「くっく……、汝は正直じゃの」
思わず苦笑してしまう。シイナと共にいれば、こうやって言葉を交わすことも可能なのだ。
寂しい思いをすることもないだろう。
「うむ、それではシイナの意見を参考にし、西へと向かおうぞ」
心残りがあるといえば、ノインの亡骸をおいていくということぐらいだろうか。しかしながらそれも要らぬ心配だった。
リュウオはシイナとの契約を結ぶ際にしてみせたように、空間に亀裂を生み出すと、墓石を丸ごと次元の彼方へと飲み込んでしまった。重力を操ることが可能である限り、二人はいつでもノインの墓石の前に手を合わせることができるのだ。
「汝には、すまぬことをしたのぅ」
ふと、リュウオは思い出したかのように呟いた。

了承を得たとはいえ、シイナは占師ではなくなり、更には新たにリュウオとの契約を結んだ。
強引が過ぎたかもしれない。
「そうですね……。でも、そんなことよりももっと大切なことがあるのを忘れていますよ」
「大切なこと？　なんじゃ、それは」
小首を傾げ、リュウオはシイナの眼を見つめる。
「リュウオ、わたしは貴方と契約を結んだとき、大切なものを代償として支払いました」
「なにを言うとるか、代償を支払ったのは吾の方じゃ、シイナはなにも失っておらんぞ」
リュウオが言っていることは正しい。決して間違ってなどいない。
だがしかし、シイナが伝えようとしているのは、そんなことではない。
「いいえ……、わたしは、貴方に未来を奪われました」
「……未来じゃと？」
占師であったときと同じように、隻眼にリュウオの姿を映し出す。視ることはできずとも、見ることはできるのだ。
「ええ、死を受け入れる未来です。……でも、その代わり、二つの贈り物をいただきました」
贈り物と称し、シイナは言葉を続けていく。
「一つは、光ある世界を……」
右目を指差し、瞬きをしてみせる。
「そしてもう一つは……リュウオ、貴方と共に、幸せになる未来を……」
その科白を口にした次の瞬間には、シイナは踵を上げてリュウオに顔を近づけ、あっという間に唇を奪ってしまった。
「……わたしの、初めての口づけを貰っていただきましたから、二つではなくて三つになってしまいましたね」
恥ずかしそうに頬を掻き、シイナは可愛らしく微笑んだ。

この行動には流石のリュウオも驚きを隠せないようだった。
「汝は……、シイナは、想像していたよりも積極的じゃな」
「今回は特別です。二度目はありません」
「ないのか」
「ないです」
そんなやり取りを交わし、二人は共に笑いあう。
やがてどちらからともなく手を握ると、古城の外へと向かった。
扉を開けてみると、すでに回りには多くの魔族が集まっている。リュウオがこの地を離れるという噂を聞きつけたのだろう。この群を見れば理解できるが、ロギスタニア大陸に巣食う九割以上の魔族が集結している。正にお祭り騒ぎだ。
二人のすぐ傍には、トルエカの姿も見受けられる。
「別れの言葉は、要らぬな？」
深々とお辞儀をし、トルエカは今もなお忠誠を誓う。
「では……、シイナ＝ラヴィリンスよ」
その名を言葉にし、重力に逆らい、ふわりと舞い上がっていく。
「ちと、長い空の旅になるじゃろうが、存分に堪能するがいい」
耳元に囁かれ、シイナは小さく頷いた。
「はい、よろこんで」

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8291v/

逆さまの王

2011年8月29日18時08分発行